

靈界物語 第一七卷 如意寶珠 辰の巻

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第十七卷』愛善世界社

1996(平成8)年08月25日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

～
～
～
～
～
～
～
～
～
～

目次

序文 じよぶん

凡例 はんれい

總説歌 そうせつか

第一篇

雪山幽谷 せつざんいうこく

第一章

黄金の衣 わうごんこうぎ〔六一二〕

第二章 魔の窟まのく〔六一三〕

第三章 生死不明せいしふめい〔六一四〕

第四章 羽化登仙うくわとうせん〔六一五〕

第五章 誘惑婆いうわくばば〔六一六〕

第六章 瑞の寶座みづはうざ〔六一七〕

第二篇 千態萬樣せんたいばんやう

第七章 枯尾花かれをばな〔六一八〕

第八章 蚯蚓の囁みみずささやき〔六一九〕

第九章 大逆轉だいぎやくてん〔六二〇〕

第一〇章 四百種病しひやくしゆびやう〔六二一〕

第十一章 顯幽交通けんいうかうつう〔六二二〕

第三篇 鬼ヶ城山 おにがじやうざん

第二章 花と花 はな はな〔六二二〕

第三章 紫姫 むらさきひめ〔六二四〕

第四章 空谷の足音 くうこく そくいん〔六二五〕

第五章 敵味方 てきみかた〔六二六〕

第六章 城攻 しろぜめ〔六二七〕

第七章 有終の美 いうしう び〔六二八〕

靈の礎 たま いしずゑ (三)

曉山雲 (謠曲)

序文 じよぶん

本卷は陰曆三月二十五日より二十七日、即ち四月二十一日より二十三日の三日間に亘り口述したるものでありまして、比沼の眞名井ヶ原参拜より、丹波村お節親子の邪教宣傳者黒姫撃退、竝に鬼ヶ城に割據せる鬼熊別、蜈蚣姫夫婦の邪神、數多の魔軍を振捨て、天の磐船に身を任せ、天空高く姿を隠したる所までの、山嶽を中心とする神代の物語であります。

三五教の宣傳使、悦子姫、音彦、加米彦、青彦を始め、魔神の爲に三嶽山の窟に捕はれ居たる紫姫主従三人が救はれて、之に参加せる言靈戦を以て本卷の終局としてあります。地名等に於て、現代とは少々變つて居りますが、分り易くするため、新しき地名を用ゐて口述して置きました。特に注意すべき事は、神界幽界現界共通の面白き場面が現はれ居る事であります。見落しなくお読み下さい。

大正十一年四月二十三日

於瑞祥閣 王仁

凡例

一、本巻に現はれてゐる地名は、現代と多少違つてゐるものもありますが、多くわれわれに親しきをもつた地名ですから、興味を感じつつ讀んで行くことが出来るであります。

一、『靈の礎』は、雑誌『神の國』に連載されましたが、非常に貴重なものと信じますので、本書にも巻を逐うて掲載いたします。

一、巻末の『曉山雲』は、瑞月聖師が謠曲の形式に作られたものです。そして節付もなされたのでありますが、その符號は印刷上都合よくゆき兼ますので、單に本文だけを載せておきました。

大正十一年十二月

編者識

總説歌

西にしに半國はんごく聳そびえ立ち 東ひがしに愛宕あたごの峰みね高たかく

南みな逢はるか 妙見めうけんの 山雲表やまうんべうに屹立きつりつし

帝釋山たいしやくざんは北方ほつぽうに コバルト色いろを染そめ出いだし

若芽わかめに萌もゆる山屏風やまびやうぶ 中なかの穴太あなほに牛飼うしかひし

吾故郷わがふるさとに名なも高たかき 西國さいこく二十一番にじふいちばんの

札所ふだしよと聞きこえし穴太寺あなほでら 故郷こきやうを出いでて二十五にじふごねん年

神かみの眞道まみちに服まつろひて 幼稚心をさなごころに慕したひたる

三十三相備さんじふさんさうそなへます 聖ひじりに對たいし尻喰しりくらひ

觀音くわんのんさまとて棄すてられず 松村加藤中野氏まつむらかとうなかのうぢ

筆ふでの勇者ゆうしやを伴ともなひて 三日三夜みつかみよさを棒ぼうに振ふり

歸かへつて一日いちにちグウグウと 疲勞くたびれ休やすみ氣きの休やすみ

愈腹帯締めなをし

悪魔退治の其續き

地は一面の銀世界

せう事なさのまる裸

爺サン婆サンや娘子を

峠の上に登り行く

五人男は昇天し

進み行く手に黒姫が

力限りに喰ひとめる

婆の話を聞捨てて

清水湧き出る靈場に

手桶をさげて庭の面

爺サンは幽界の人となり

床に苦み日に夜に

語り出でたる大江山

黄金の色の花咲きて

眞名井ヶ原に詣でむと

寒さ耐へて登り行く

背中を負うて比治山の

寒さは寒し忽ちに

親子三人是非もなく

伏屋の中より現はれて

信神堅固の老爺、娘

勇み進みて比沼眞名井

首尾能く詣で立歸り

ウンと轉けたが病就で

又もや娘が病氣の

瘦衰へしお節嬢

婆ばばの頼たのみに黒くろ姫ひめは

肩かたを怒いからし出いで来きたり

譯わけの分わかからぬお筆ふで先さき

ウラナイ教けうの宣せん傳でん歌か

汗あせを流ながして宣のりつれば

病やまひは益ます々ます重おもくなり

これや堪たまらぬと黒くろ姫ひめは

神しん界かい御ご用ようが急せく故ゆゑに

妾わたしは歸かへらにやならないと

態ていよく此この場ばを逃にげ歸かへる

娘むすめのお節せつは夢ゆめ心こ地ち

假か死し状じやう態たいに陥おちりて

荒あ野のヶ原がはらをトボトボと

進すすみ行ゆく折をり忽たちまちに

裸はだか男をとこの五ご人にん連づれ

お節せつを見みかけ打うちかかり

危あやふく見みえし折をり柄からに

顔かほ色いろ青あをき青あを彦ひこの

靈み魂たま忽たちまち現あらはれて

娘むすめの難なんを救すくひたり

お節せつは呼い吸きを吹ふき返かへし

喜よろこぶ折をりしも黒くろ姫ひめが

大おほきな面つらして出いで来きたり

何なんぢやカんぢやと減へらず口ぐち

時ときしもああれや青あを彦ひこは

肉にく體たいささげて入いり来きたり

お櫓なう婆ばサンの懇こん望ぼうに

お節せつを嫁よめに貰もらはうと

半約なかばやくして歸かへり行ゆく

三嶽みたけの山やまを乗のり越こえて

三五教あななひけうの宣傳使せんでんし

曲津まがつの巢すくふ鬼おにヶ城がじやう

銚ほこを揃そろへて一齊いつせいに

言靈戰ことたませんを開始かいしする

實げに面白おもしろき物語ものがたり

瑞祥閣ずめしやうかくに北枕きたまくら

火鉢ひばち眺ながめて西にしを向むき

黒くろい顔かほをば睨にらみ合あひ

ボンボリ燈つけて筆ふでを執とる

松村まつむら北村きたむら加藤氏かとううぢ

東尾ひがしを吉雄よしを氏し四人よにんづ連れ

縦横じうわう無盡むじんに書かきまくる

現幽神界げんいうしんかい混同こんどうの

夢物語ゆめものがたり面黒おもくろし

あゝ惟かむながら神々かむながら

御靈みたまの幸さちを賜たまへかし

頭あたまかしかし穴あなかしかしこ。

大正十一年四月二十三日 舊三月二十七日

於瑞祥閣 王仁

第一篇 雪山幽谷

第一章 黄金の衣〔六一二〕

見渡す限り野も山も 平一面の銀世界

人の心を冷やかに わかやる胸を撫で下ろし

雪の肌の愛娘 魔神の深き計略に

押籠められて岩窟の中にて絞る涙の雨

何時しか比沼の眞名井ヶ原に 一陽來復の春待ち兼ねて

皇神の恵の露に綻びし 心切なき節子姫

此岩窟に捕はれて 悲しき月日を送る内

春夏秋と十二節 越えて漸う東雲の

空晴れ渡る思ひなり。

悦子姫に送られ、祖母の家に歸り來れる節子姫は、嬉し涙に一夜を明かし、あくれば正月二十八日、平助、お櫛の祖母と共に、雪積む野路を辿りつつ、心も深き禮参り、岩公、勘公、櫛公諸共に、眞名井ヶ嶽の麓を指して進み行く。

お節「お客さま、御存じの通り、年を老つたる老爺サン婆アサン、それに纖弱き女の妾、思ふ様に足許も捗りませぬ。あなた方は神様にお仕へ遊ばす身の上、悦子姫様が嘸お待兼で御座いませう。何れ眞名井ヶ原の神様の御前にて、お目に掛りませうから、どうぞ妾等にお構ひなく、一足先へ行つて下さいませ」

岩公「左様なれば、お先へ道開けの爲に参りませう。一切萬事用意を整へ、お待受を致して居ります、どうか緩々お出で下さいませ。お老爺サン、お婆アサン、お節さま、左様なれば吾々三人は一足先へ御免を蒙りませう。何卒ゆるりとお越し下さいませ」

平助「ア、それが宜しい。此方は年老つた老爺に婆ア、纖弱き娘、到底あなた方

の様な屈強な若いお方と、同道するのは苦しい御座ります。又あなた方もマドロしく思はれませう。それよりも早う悦子姫様のお側へ行つて、すべての御用をお聞き下さいませ。吾々三人はボツボツ後から参ります」

岩公「ソナラお老爺さま、お婆アさま、お節さま、一足先へ失禮致しませう。

……サア勘公、櫟公、雪中強行軍だ。前進々々、お一、二、三」

と掛聲諸共、バラバラと驅出しける。

お櫛「アノ、夜前のお客さまの元氣の良い事、……アア、年は取りたくないものだ。これ程雪の積つた路を、猪かナンゾの様に、驀地に驅出して、早モウ姿が見えなくなつて了つた。サアサアボツボツ行きませう」

と三人は杖を突き乍ら、岩公等の通つた足跡を踏んでボツボツと進み行く。

話は後へ戻る……

心の鬼に責られて泊りも得せず、雪積む夜路をトボトボと、雪しばきに向ひ乍ら、互に肩を組み合せ、西へ西へと進み行つた鬼彦、鬼虎の兩人は、路踏み迷ひ、路傍の糞壺の中へ、肩を組んだまま、ドボンと轉落し、頭の手先から足の爪先まで、

たちま 忽ち黄金佛と早替り、二人は漸く生命からがら這ひ上り、身を切る如き寒風のピ
ユウピユウと吹いて来る中を、震へ聲を搾り乍ら、
鬼彦 『罰は目の前だ、コンナ事なら、頭の一つや二つ、平助老爺に叩かれても、
素直に謝罪つて、泊めて貰つたが得策だつた。貴様が、テレ臭いとか、何とか言
つて、瘦我慢を出すものだから、コンナ目に遭つたのだよ。實に糞慨の至りだ』
鬼虎 『過去つた事を、今になつて言つた所で、何になるか。過去し苦勞は大禁物
だと云ふ事を忘れたか。刹那心だよ。併し乍ら、斯うして居れば、着物も體も氷
結して了ふ。零度以下二十度と云ふ此寒空に、糞汁の着物を着て歩いて居るのも
能い加減なものだ。況して神様は神聖な……清淨潔白をお喜び遊ばす。コンナ着
物を着て、どうして參拜が出来ようか。……貴様達はまだ悪が消えないから、參
拜の資格がないと云つて、神様が糞壺へ放り込んだのかも知れぬ。……ア、寒い
寒い……寒さが通り越して、體中が痛くなつて來た。そこら中錐で揉まるるやう
だ。……冷たい、痛い。……アア泣くに泣かれぬ。どうしたら宜からうなア』
鬼彦 『平助やお櫛に屁を噛まされ、馬鹿臭い、テレ臭い、阿呆臭い……と臭い目

に會うて、其上又糞壺へ放り込まれ、……アーアぢぢ臭い、ババ臭い……此處にも進まねず……エー糞いまいましい。どつか此處らに家でもあつたら、今度は何と言つても構はぬ、無理に押入つて、焚物でも焚いて、體を温め、ゆつくり湯でも沸して淨めなくては、どうする事も出来ぬぢやないか。グツグツして居ると、身體強直、石地藏の様になつて了うワ、サア往かう往かう」

二人は生命からがら、二三丁ばかり前進すると、バタツと行當つた又もや一軒の茅屋、

「ヨー天道は人を殺さずだ。此處に一軒屋が有るワイ。……ハテ此れは物置小屋と見える。……マア兔も角、這入つて體の處置を附けようかい」

二人は戸を押し開け、怖々這入つて見ると、暗がりに赤い物が見える。鬼彦「ハハア、誰か火を焚いて行きやがったなア。大方音彦、加米彦の仕事だら

と附近の藁を引摺り出し、火を吹き點け、眞裸となり、

「一寸是で樂だ。併し乍ら、着物を乾かさねばなるまい。……それにしても一度洗濯をして、其上にせなくては、乾いた所で、臭くて、どうにも斯うにも仕方があるまい、のう鬼虎」

「ウン此茅屋も、元は誰か住んで居つたのだらう。井戸がある筈ぢや。一つ探して、井戸でも有つたら、俺達の着物を突込み、バサバサとやつて、充分に壓搾を加へ、水氣を除り、大火を焚いて焙る事にしようかい。……オー有る有る、グヅグヅして居ると、落ち込むかも知れぬぞ。どうやら水溜りが有るらしい。……オイ貴様火を焚く役だ、俺が暫く洗濯鬼になつてやらう。人鬼だ。婆の來ぬ間に鬼が洗濯……アハ、ハ、ハ」

「兩人は糞まぶれの着物を、水溜りに向けて、手早く脱ぎ、投げ込み、サアこれで洗濯の用意は出來た。併し乍ら着る物がない。どつか此處らに薦でもないかなア」

「と二人はガサガサと、小屋の隅クラを、手探り、古薦や、古蓆を探し索めて、やうやう身に纏ひ、

「ア、これで生命丈は助かった」

と大火を焚いて、兩人は「あた」つて居る。

「オイ、鬼虎の大將、お前は洗濯にかかるとだよ。俺は干す役を勤めるから」

自分の着物は自分が洗濯し、他人の世話になると云ふやうな事は天則違反だぞ。

「ヨシ、自分の丈を洗濯して、お望みとあらば、干す役もして貰はうかい。…」

「ヤア井戸かと思へば、又糞壺だ。家の中に雪隠を拵へて置きやがるものだから、

間違うのも無理はない。併しまア陥らなんだ丈は結構だ」

「オイ鬼虎、俺の方は、どうやら本物らしいぞ、「かやく」が浮いて居らぬワイ」

「アハ、、、、鬼彦、貴様のは小便桶だ。何とかせなくてはなるまいぞ」

「アツ、、、、火が點きやがった。オイ鬼虎どうしやうどうしやう」

「雪の中へ轉げ込め」

「よし来た」

と鬼彦は、矢庭に外へ驅け出し、雪の上を轉げて居る。又もや鬼虎のお米の木の

着物に火が燃へ移り鬼虎は、

「此奴ア堪まらぬ」

とザブリと水溜りへ飛び込めば、何處よりともなく怪しき笑ひ聲、

「アツハ、ハ、ハ、オホ、ハ、ハ、」

「オイ鬼虎、ナア貴様は氣樂な奴だ。糞責め、火責め、水責めに逢うて苦しみて居るのに、何が可笑しいのだ。怪體な聲を出しやがつて……」

「鬼虎が笑つたのぢやない、物が笑つたのぢやない。……ソレ、物が物言うてるぢやないか」

「ヤイヤイどこの奴ぢや。何が可笑しいのだ。俺は鬼彦さまだぞ」

「又もや隅の方より、」

「鬼彦、鬼虎、随分苦勞をしたネー。お節の宿で半殺しに會ひ、今又此處で半殺しの様な目に遭つて、牡丹餅の様に、黄金の餡や、雪の餡を着けて、中々うまい事をやるのウ。サアこれから、俺が招待されてやらう。鬼の共喰だ、アハ、ハ、ハ、」

「さう言ふ聲は岩公ぢやないか、奴跛の癖しやがつて、巫山戲た態をさらすと、鬼彦が承知をせぬぞ」

作り聲にて、

「此方は岩公でも無い、鬼でも無い、物ぢや、物ぢや」

鬼彦「物とは何だ、化物と云ふ事か。夜がホンノリと明けかかつて居るのに、化物が出るナンテ、チツト時季が過ぎとるぞ。化け損ひの大馬鹿者奴が」

加米彦「アハ、ハ、ハ、實の所は加米彦さまだ。悦子姫さまが豊國姫の神様から命

令を受けて、今鬼彦、鬼虎の兩人改心の爲、糞壺へ陥めてあるから、グツグツし

て居ると凍て着いて了ふ。體は糞まぶれだ。早く往つて眞名井の水で體を清め、

此着物を着せてやれ」と仰有つて、生れてから見た事もない様な立派な着物を預

つて來たのだよ」

兩人一度に、

「ヤアそれは有難い」

鬼虎「流石は悦子姫さまだ。腕振り合ふも多生の縁、夢にも文珠堂で此鬼虎が、

悦子姫さまを、間違つて叩いたお蔭で、斯う云ふ結構な着物を頂戴するのだ。

叩かれて、丸う治まる、桶の底、

だ……オイ鬼彦、俺のお蔭だぞ」

鬼彦「加米彦さま、あなたは偉いものだ。サア早く着物を着せて下さいナ」

加米彦「待て待て、これから半里許り、其儘歩いて、眞名井ヶ原の鹽の溜りで體

を淨め、それから清の井戸で一週清め、三週目に大清の井戸で淨めた上で、着

物を着せて下さるのだ。今は持合せがないのだよ」

鬼彦「ナンだ。それまで體が続くだらうか、困った事だワイ」

斯かる所へ、岩公、勘公、櫟公の三人、息急き切つて現はれ來り、

「オイオイ鬼彦、鬼虎の兩人、まだコンナ所に居つたのか。大變だぞ。夜前は俺

達は半殺しに遇つて來たのだ。貴様も夜前泊つた位なら、麁殺しになる所だつた

よ、マアマア生命が有つてお芽出度う。……ナンダナンダ、裸ぢやないか。一體

着物はどうしたのだ」

鬼彦「着物かい、着物は神様に寄附して了つたワイ」

岩公「どこの神様に寄附したのだ」

鬼彦「雪隠の神様に……。これから裸、跣足で參るより仕方が無い。貴様も一

つ、摩利支天さまに、一枚脱いで寄附致さぬかい

岩公「ヤア本當に、兩人とも赤裸だなア。元氣な事だ。俺達の着物を寄附してや

りたいが、此方も着の身着の儘ぢや。山椒の木に飯粒ぢや、仕方が無い。マア行

く所まで行かうか

鬼虎「それだつて、裸で道中がなるものかい

岩公「なつてもならないでも仕方が無いワ。グツグツして居ると、夜前のお節さ

まが、おつつけ此處に出て来るぞ。コンナ姿を見つけれたら醜もない。サア行

かう行かう

鬼彦、鬼虎、岩、勘、櫟の五人は、夜の明けた雪路を、トボトボと進み行く。

家の内より加米彦の聲、

「オイオイ鬼虎、鬼彦。着物だ着物だ」

とボロボロの繼ぎ繼ぎだらけの着物を引つ抱へ加米彦がやつて来て、

「サア兔も角、當座凌ぎに、これなと着て行け」

鬼虎「ヤア、全然東海道以上だ、百ツギも二百ツギもやつた着物だ。
………エ、

仕方が無い。鬼彦、これでも無いより優しだ。拜借しようかい

「さうださうだ、寒い時に穢い物なし」

と手早く加米彦の手よりひつたくり、クルクルと身に纏ひ、

「ア、なんだか、ウチウチするぢやないか」

加米彦「定つた事ぢや。虱の本宅だ。サアサア進もう進もう」

と雪路を西へ西へと走りゆく。道端に小瀟洒とした綺麗な家が左側に建つて居る。

一人の綺麗な娘、戸口を開け、

「もうしもうし、あなた方は、眞名井ヶ嶽へ御参詣の方と見えますが、此雪路に

嘸お困りでせう。湯も沸いて居ります。どうぞ一服して行つて下さいませ。別に

お茶代の請求も致しません。今日は親の命日で、お茶や御飯のお接待を致して居

ります。サアサアどうぞ這入つて往て下さいませ」

鬼彦「ヤア捨てる神もあれば拾ふ神も有るとは能う言つた事だ。皆さま一服さし

て貰ひませうかな」

と鬼彦は早くも先に立ち、屋内に飛び込みたり。

「サアサア皆さま、お這入りなさいませ」

加米彦は、

「アイ御免よ」

と尻振り乍ら這入り、

「ヨ、此處の家は、外から見た割とは廣い家だ。……さうしてお娘、コンナ小

廣い家にお前一人居るのかい、随分險呑なものだなア。大江山の鬼雲彦の乾分、

鬼虎、鬼彦がやつて来て、お節女郎の様に搔攫へて歸ぬかも知れませぬぞ。氣を

付けなさいませや」

「ホ、ホ、鬼虎も、鬼彦も、今日の様に、善の途に墮落して仕舞へば、モウ駄

目ですよ。お節の家では斷られ、糞壺へは落ち込み、薦を着ては火に舐められ、

蝨だらけの着物を着て、ウンバラ、散バラ若布の行列、温褸の親分、雑巾屋の看

板も跣足で逃げると云ふ様な、立派な着物をお召しになつて、眞名井ヶ嶽へ參拜

する様になつては、モウ駄目ですワ、ホ、ホ、」

勘公「ヤア此奴ア妙だ。優しい顔をして居乍ら、口の達者な女だ」

娘「ママママ皆さま、ゆつくりなさいませ。併しポンポンと匂ふぢやありませんか、裏に溜池があります。あの池の外で、頭から水をかぶり、鬼彦、鬼虎さまは、洗濯をして来なさい。モシモシ岩さまとやら、あなた、此處に横槌が御座います。二人の髻を掴んで、溜池に突込み、石の上でキュウキュウと踏み潰し、此横槌でコンコンとこづいて充分に壓搾をかけ、火に焙つて、綺麗サツパリと洗濯をしてあげて下さいナ」

「馬鹿にしゃがる。着物と人間の體と一つにしられて彦も虎も堪まるものかい」
娘「キモノ弱い人は、キモノ弱いのも、おなじことぢや。一遍洗濯して、糊でも着けねば腰が立つまい。よつぽどよい腰拔野郎だからナ」

鬼彦「馬鹿にしゃがるない。貴様は一體何者だ」
女白き牙をニユツと出し、目をクルリと剥き、腮をしやくり乍ら、

「あてかいな、あてい……あの……おコンと云ふ者ですよ」

鬼彦「エイ、狐みたいな名の奴だ、大方……狐が瞞しとるのぢやないかな」

おコン「雪に閉され、誠にコン窮千萬、どうぞコン夜丈お泊め下されと、コン願

したが、平助爺に、コンと肱鐵砲を喰はされ、コンな事なら、悪い事するぢやなかつたのに、エーエ仕方がない、コン夜は雪の路を、コンパスの續く限り歩かうかと、二人はコン限り力限り走つた揚句に糞壺の中へコン倒し、コンな因果が古コンを尋ねても、又と一人あるものか……とコン惑の態、茅屋の中へ飛び込み、薦を被つて火に焙り、やつと安心する間もなく體に火が燃えつき、雪の上に轉げるやら小便桶へ陥るやら、コン難の最中に加米公の御親切な御志、蝨の宿の様な檻褸の錦を恵まれて、此處までやつて來たお前ぢやないか。是れから此オコンさまが、アンナ失敗を今後繰返さぬ様に、コンコンと説諭してあげよう。早く體を洗つて出て來なさい。炬燵へでも潛り込んで、ゆつくりと、おコンの話をお聞かつしやいッ

岩公「免も角も、此縁の端を貸して貰ひませう。二人の體の處置をつけなくては、どうする事も出來ませぬワイ」

鬼彦、鬼虎は、裏口の溜池にて、薄氷の張つた池水を掬ひ乍ら、ザブザブと御楔をやつて居る。二人は體を清め、ビリビリ震へ乍ら、

「ア、皆さま、お待たせしました。これで気分がサラリとした。併し困った事にはお召物の心配だ。どうしたら宜からうかなア」

おコン「ホ、ホ、ご心配なされますな。お二人様、お召物はチヤンと此處に用意致して御座います。悦子姫さまが前以てお預けになりました。サアサア御遠慮なしにお召し遊ばせ。……これが鬼彦様のお召物……此方が鬼虎さまのお召物ですよ」

鬼彦、矢庭にグルグルと身に纏ひ、

鬼彦「ヤア立派な物だ。これは正しく宣傳使の装束だ……ヤアナダ、妙な物が貼つてあるぞ。……エ……鬼彦を改名して、只今より彦安命と名を與ふ……ヤア有難い有難い、何だか鬼の字が癩に障つて仕方がなかつた。サア是れから彦安命の宣傳使だ。……オイ鬼虎、今日から俺の弟子にしてやらう。オツホン」

鬼虎「アハ、彦安命さま、誠に濟みませぬが、拙者も虎彦命と名を與ふ……としてあるのだ。五分五分だよ。サア勘、櫟、岩、只今より天下晴れての三五教の宣傳使だ。左様心得たが宜からうぞ」

第二章 魔の窟（六一三）

平助親子三人に聲かけられて鬼彦、鬼虎、岩、勘、櫟の一同は、フト氣がつけば野中の汚き雪隠を中央に兩手を合せ、一生懸命に祝詞を奏上し居たりける。

鬼彦「ア、馬鹿らしい、大きな顔して日中に歩けた態ぢやない哩。これと云ふ

も全く大江山の鬼雲彦に加擔し、所在惡を盡して來た天罰が報うて來たのでせう。

身魂の借錢濟しと思へば結構だが、何時の間にやら五人が五人とも生れ赤子のや

うに眞裸になり、禪一つ持たぬ無一物となつて仕舞ひました。男は裸百貫だ、サ

アこれから男としての眞劍の力を試す時だ、精神さへ確りして居れば少々の雪だ

つて感應へるものか、力士は寒中でも眞裸だ、サアサア皆さま往きませう」

と鬼彦は先に立つ。

岩公「何とマア、裸の行列と云ふものは、見つともないものだ。それにつけても

鬼彦は叮嚀な言葉を使ふかと思へば忽ち荒つぽい言葉になる、何ちらにか定めて

貰はないと吾々が應對するに於いても方針が定まらないからなア」

鬼彦「本守護神や、正守護神や、副守護神の言葉が混合して出るから仕方がありません。ませぬわいやい。オイ岩公、今暫く辛抱なされませ、此鬼彦も些と許り精神が落着を缺いで居るからなア」

と云ひつつ大股に雪路を跨げ山深く進みゆく。正月二十八日の太陽は晃々として輝き、徐々雪は解け初め、眞名井ヶ嶽より轉げ落つる雪崩の大塊は、幾十ともなく囂々と音を立て落下する其劍呑さ。忽ち落下し來る大雪塊に押潰され、お節は首から上を出して悲鳴をあげ、

「お助け お助け」と聲限りに叫び泣く。

鬼彦「オイ鬼虎、去年はお節さまを苦しめた、其お詫にあの雪塊を取り除けて命を助け、お詫をしやうぢやないか」

鬼虎「さうぢや、お詫をするのは今ぢや、今を措いてコンナ機會があるものか。

モシモシお節さま、今私がお助け致します、暫く待つて下さい。エイエイ固い雪塊だ、冷い奴だなア」

お節首を左右に振り、

「いゑいゑ假令死すとも鬼彦や鬼虎のお世話にはなりません、どうぞ外のお方、出てきて助けて下さいませ」

鬼彦「エ、何處迄も執念深いお節さまだナア、危急存亡の場合人嫌どころぢやあるまい。サア鬼虎貴様と二人、今がお詫のし時だ、サア来い一二三つ」

と雪塊にむかひ眞裸の體を打つける。さしもの大塊突けども押せどもビクともしない。

平助お櫛は泣き聲を振り絞り、

平助「ア、私達程因果なもの三千世界に又とあらうか、折角機嫌のよい姿を見てやつと蘇生の思ひをしたと思へば、一日経つや経たずの間に、又もや不慮の災難何うして之が生て居られう。オイお櫛、お前も私も是から娘と共に十萬億土の旅に出かけませう。サア用意ぢや、よいか」

お櫛「ハイハイ私も女の端くれ、親子三人此場で潔く命を果し、神界とやらに参りませう。コレお節、婆は一足先へ行く程にどうぞ悠くり後から来て下さい、六

道の辻で婆と爺とが待つて居ます、オンオンオン」

平助「これやこれやお榎、何事も運命の綱に操られて居るのだ。此期に及んで涙

は禁物だ、サア潔く」

と云ふより早く懐劍抜く手も見せず、吾と吾腹にぐつと突き立てむとする。鬼彦

は驚いて平助の利き腕を確と握り、

鬼彦「ヤア、お爺さま待つた待つた、死ぬのは早いぞ、死んで花實が咲くものか、

此世で安心をせずにして彼の世で安心が出来ると思ふか、マアマア待つた待つ

つた、短氣は損氣だ」

お榎「平助どのさらば」

と又もや短刀を抜くより早く喉に突き刺さむとする一刹那、鬼虎は吾を忘れてお

榎の利き腕グツと握り、

鬼虎「お婆アさま待つた待つた」

お榎「ヤア誰かと思へば大江山の鬼雲彦の乾兒であつた鬼虎だな、エ、汚らはし

い、構つて下さるな、婆の命を婆が捨てるのだ。お前に厘毛の損害を掛けるので

ない、放つて置いて下さい、入らぬお世話だ、あた汚らはしい、お前のやうな悪人に助けられて何うしてノメノメ此世に生て居られるものか、エ、放つて置いて下さい」

鬼虎、涙聲になつて、

「お榎さま何うしても私の罪は赦して下さいませぬか」

お榎「定つた事だ、死んでも許しやせぬ、假令ミロクの世界が來てもお前の恨は忘れるものか」

鬼虎「お榎さま、ソナナラ貴女の手にかけて、私を思ふ存分弄り殺しにして下さい。さうしたら貴女の恨は些とは晴れませう、さうして私の罪を忘れて下さいませ」

平助大聲に泣きながら、

「コラコラお榎、もう好い加減に愚癡を云うて置かぬかい、是丈前非を悔い善の魂に立ち復つた鬼彦、鬼虎の兩人、此上愚癡を零すと却つて此方が深い罪になるぞ。夫よりも潔く娘と共に神界の旅を致さうぢやないか、娑婆に執着を些とも残

さぬやうにして呉れ、ア、鬼彦、鬼虎兩人さま、貴方方の眞心は頑固一邊の平助も骨身に徹へました。決して決してもう此上は貴方を恨みませぬ、どうぞ手を放して下さい」

鬼彦「どうしてどうして貴方方を見殺しにしてなるものか、短氣を起さずに、も一度思ひ直して下さい、オイ鬼虎、お榎さまの腕を放すぢやないぞ、確り掴まへて居て呉れ、これやこれや岩公、勘、櫟、早くお節さまを救ひ出さぬか、何を愚圖々々致して居るのぢや」

岩公「最前から吾々三人が此通り雪塊除けに盡して居るのが分らぬか、サアサアお節さま、もう大分に軽くなつたらう、一寸動いて見て下さい」

お節「ハイハイ有難う御座います、息が切れさうにありました、追々とお蔭様で樂になつて來ました、も些し取り除けて下されば大丈夫助かりませう、もしモシお爺さま、お婆アさま、どうぞ確りして下さいませ、節はどうやら助けて貰へさうで御座います」

平助、お榎一時に、

「ヤアヤアお節助かるか、それは何よりぢや、お前が此世に生きて居るのなれば、爺や婆は、どうして此世を去つてなるものか、もう皆さま安心して下さい、死ねと仰有つても死ぬものぢやない、お前さまも鬼彦、鬼虎と云つて随分悪人だつたが、好う【そこ】まで改心が出来た。サアサア神様にお禮を申ませう」

岩公「モシモシ、お爺さま、お婆アさま、それや結構だがまだ此雪塊は容易にとれないのだ、お前さま等は祝詞を上げて下さい、これやこれや鬼彦、鬼虎、もはやお爺さまお婆アさまの方は安心だ、此方へ加勢だ加勢だ」

「おうさうだ」

と鬼彦、鬼虎は雪塊除けに全力を盡して居る。漸くにして雪塊は取り除けられ、お節はむくむくと起き上り、嫌らしき笑ひ聲、舌を四五寸許りノ口ノ口と出し、お節「キヤアツ キヤアツ キヤアツ キヤハ、ハ、ハ、」

と尻を引き捲くり、トントントンと山奥さして姿を隠したりける。

五人の男は肝を潰し腰を抜かさむ許りに、嫌らしさと寒さに慄うて居る。平助お櫓の二人は皺噎聲を張上げながら、

「オイお節、オーイオーイ、爺と婆とは此處に居るぞ、待つて呉れ待つて呉れ」と唖鳴りながら、雪崩の落下する谷道を危険を忘れて杖を力に倒けつ轉びつ上り行く。五人の裸男は二人の後を慕ひ、
「爺さま婆さま危ない危ない、待つた待つた、お節さまと見えたのは化物だった、命あつての物種だ、危ない危ない」
と聲を限りに後から追つかける。爺サンと婆サンは一生懸命無我夢中になつてお節の後を追つて行く。

お節は或谷川を左右に猿の如く飛び交ひながら、とある行き當つた岩石の前にピタリと倒れ、其儘姿は白煙、雪解けの雫の音は雨の如く梢よりポトリポトリと落ち下る。平助夫婦はハツと許り此場に打ち倒れ、前後も知らず泣き沈む。五人の裸男此場に現はれ、氣絶して居る平助お槽に其邊の雪を口に含ませ、一生懸命に神靈注射を行ひければ、老夫婦は漸くウンと息吹き返し、又もや「お節お節」と泣き叫ぶ。

鬼虎「ヤア此處は魔の巖窟だ、去年の今頃だったな、鬼雲彦の命によつて此巖窟

にお節さまを押し込め、固く出入出来ないやうにして置いたのは俺だ。其後鬼雲彦の大將チヨコチヨコとやつて来る筈だったが、お節の事を念頭から遺失して居たのか、未だ一回も此岩を接觸した痕跡がない、一年位の食料として勝栗が澤山入れてあれば滅多に飢死して居る筈も無からうし、水も天然に湧き出て居るから壽命さへあれば生て居るのだらう、最前のお節と想うたのは何でも妖怪變化であつた。サアサア爺さま婆アさま、此鬼彦、鬼虎が改心の證據に眞實のお節さまに遇はして上げやう。何卒これで日頃の恨を晴らして下さい」

平助「眞實の娘に遇はして下さるか、娘さへ無事に生て居れば、今迄の恨も何もすつかり忘れて了ひませう、ナアお榎、さうぢやないか」

お榎「どうぞ早う助けて下さい、眞實の娘が見たい哩なア、オーンオーン」と泣きそそる。鬼虎、鬼彦は四邊の手ごろの石を拾ひ、一イニウ三つと合圖しながら岩壁を一度に力限り撲つた。岩の戸は内に開いて中には眞暗の道がついて居る。

鬼彦「サア開きました、誰も這入らないと見えて随分エライ蜘蛛の巣だ、オイ岩

公、其邊の木の枝を折つて來い、さうして貴様蜘蛛の巢拂ひだ」

岩公「妙な巖窟もあつたものだ、よし來た」

と傍の常磐木の枝を折り取り、左右左と振りながら暗き巖窟の奥を目蒐けて進み入る。鬼虎は後振り返り、

鬼虎「お爺いさま、お婆アさま、巖窟の中は大變に危険で御座います、暫く此處に待つて居て下さい、お節さまを立派にお連れ申て歸つて來ます」

お楢「ハイハイ有難う、何卒一時も早う會はして下され」

平助「何卒皆さま頼みます」

鬼虎「承知しました」

と段々と奥へ進みつつ鬼彦に向ひ小さい聲で、

鬼虎「オイ鬼彦、此處へ押込めてからもう一年になるが、鬼雲彦の大將其後一度も此處に來て居ないやうだ、萬々一お節さまが死んで了つて居つたら、老人夫婦にどうして云ひ譯をしたら好からうなア、屹度夫婦は又喉突き騒ぎをやるに極つて居る。ハテ心配な事ぢやないか」

鬼彦「ナニ心配するにや及ぶまい、屹度神様が守つて居て下さるだらう。ソナ入らざる取越苦勞をするよりも、一刻も早う前進して安否を探ることにしようぢやないか。もし萬々一お節さまが死んで居たら、吾々も罪滅しに潔く割腹したらよいぢやないか」

岩公「オイ勘公、櫟公、何だか今日は怪體な日ぢやないか、彼方にも此方にも死ぬだの割腹だの國替だのと縁起の悪い事許り云ひよつて、俺達も何だか大變氣にかかり、穴へでも這入り度いやうになつて仕舞つた」

勘公「既に吾々は穴へ這入つて居るぢやないか、穴阿呆らしい」

一同「アハ、ハ、ハ、向ふに明かるい影が見えるぞ。大方彼處の邊りだらう、ナア

鬼彦、あの邊がお節さまの隠してある處でせう」

鬼彦「ウンさうだ、もう其處だ、急げ急げ」

と一行五人は岩彦を先頭に巖穴の幽かな光を目當てに進み行く。

(大正一一・四・二一 舊三・二五 加藤明子録)

第三章 生死不明（六一四）

眞名井ヶ嶽の山奥の、暗き岩窟に閉ぢ籠められし、丹波村の平助が孫娘お節は、色青褪め瘦衰へて、手足は針金の如く吹く呼吸も細り勝ち、涙片手に口説き言、他所の見る目も憐れなり。人里はなれ月日の光さへも通はぬ此の岩窟の奥深く、閉じこめられしお節は、初冬の霜に身を啣つ、秋野の蟲の斷末魔、悲しき聲を張り上げて、思ひを歌に任せつつ、悶々の情を慰めつつありける。

思へば去年の雪の空 春とは言へど未だ寒く

四方の山々雪積みて 野分烈しき夕暗に

吾家を尋ね出で来る 怪しの男二人連

數多の枉人門口に 忍ばせ置きて年老し

爺サン婆サンや妾まで 言葉巧に誑りつ

一間の内に鬼彦と 心の猛き鬼虎が

吾等を計る空寝入り
 水も眠れる丑満の
 鐘を合圖に起き出でて
 何の容赦も荒繩の
 思ひも寄らぬ強盜が
 憐れや爺さま婆アさまを
 罪も無いのに無残にも
 家の柱に縛り附け
 長い刃物を抜き放ち
 寶を渡せ金出せと
 退引ならぬ強談判
 爺やも婆アやも驚いて
 生命ばかりはお助けと
 聲も憐れに頼み入る
 若い時から苦勞して
 貯めた寶を奪ひ取り
 尚飽き足らぬ鬼共は
 何の容赦も情なや
 二人在はする目の前に
 思ひも寄らぬ横戀慕
 嫌と申さば老人夫婦
 刀の錆にして呉れむ
 お節如何にと詰めかくる
 妾は纖弱き乙女子の
 何の應答もなくばかり
 鬼や惡魔の瀾漫りて
 威猛り狂ふ世の中を
 清め助くる神々は

此世の中に無きものか

善は衰へ悪榮え

世は烏羽玉の眞の闇

やみやみ魔神に捕へられ

名も恐ろしき大江山

鬼雲彦の面前に

荒々しくも引き出され

絶え入る許りの思ひして

網代の駕籠に放り込まれ

目も廻ふ許りゆらゆらと

揺られて来る比治山の

北に聳ゆる眞名井嶽

雪積む山の谷の底

岩を開いて押しこまれ

黑白も分かぬ暗がりの

此巖窟に只一人

押しこめられて日を送る

扱も扱も世の中に

妾程因果があるものか

如何なる宿世の罪業か

廻りて茲に父母の

お顔も知らず慈悲深き

爺やと婆やに助けられ

花の蕾の最中を

霜にはうたれ荒風に

悩まされつつ味氣なき

岩窟の中の憂き住居

晝夜分かぬ身の宿世

救すくひ給たまへと天地あめつちの
 神かみに願ねがひを掛かけ巻まくも
 畏かしこき神かみの夢ゆめの告つげ
 日ひの出で神かみと現あれまして
 聲こゑおほ嚴そかに宣のらす様やう
 ア、愛あいらしきお節せつぢやう嬢ぢやう
 今いまに汝なんぢの此この憂うき目め
 晴はらし與あたへむ汝なが慕したふ
 爺ぢぢ、婆ばばさまに會あはさむと 詔のらせ給たまうと見みる中うちに
 忽たちまち夢ゆめは破やぶられて 吾わが身みは悲かなしき岩いは窟やどの
 中なかにくよくよ物もの案あんじ 此この世よに神かみが在ましまさば
 一ひと日も早はやく片かた時ときも 疾とく速すみけく親おやと娘この
 切せつなき思おもひを憐あはれみて 救すくはせ給たまへ天あま津つ神かみ
 國くに津つ神かみ等たち八や百ほ萬ろつ 萬よろの神かみの御お守ま護もりに
 天あまの岩いは戸との開ひらく如ごとく これの魔ま窟くつのすくすくに
 開ひらいて妾わらはを明あかるみに 救すくはせたまへ惟かむ神ながら
 御み靈たま幸さち倍は坐ましませよ 朝あさ日ひは照てるとも曇くもるとも
 月つきは盈みつとも虧かくるとも 假た令と大だい地ちは沈しづむとも

曲津の神は荒ぶとも 誠の神は世を救ふ

此神言を力とし 朝夕に吾宣りし

嚴の言靈何時しかに 一度に開く梅の花

春は來れど花咲かぬ 此岩窟の佗住居

憐れみ給へ百の神 此世を造りし神直日

心も廣き大直日 只何事も人の世は

直日に見直せ聞き直せ 身の過は宣り直せ

委曲に詳細に教へたる 三五教の神の教

ア、有難や尊しや 心の岩戸はさやさやに

蓮の花の匂ふ如 開いて空に美はしき

眞如の月は輝けど 又もや曇る胸の空

身は岩窟に囚はれて 空に輝く日月の

光も知らず降りしきる 涙の雨は何時迄も

比沼の眞名井の此岩窟 何時かは逃れ嚴靈

百の苦しみ瑞靈 三五の月の輝きて

思ひも深き親と子が 互に手に手を執り交はし

抱きて泣かむ時は何時 阿、惟神々々

靈幸倍坐しませよ 阿、惟神々々

靈幸倍坐しませよ

と幽かに女の謠ふ聲きこへ來たりぬ。

鬼彦「ヤア此處だ此處だ、久し振りでお節さまのお聲が聞えて居る。マア之で生

命だけは助かつたと云ふものだ、ナア鬼虎、先づ安心したが宜からうぜ」

鬼虎「何と細い嫌らしい聲ぢやないか、實際お節さまの聲だらうか、名に負ふ魔

の岩窟、何が化けて居るか分つたものぢや無い、とつくりと調べた上の事だよ」

鬼彦は、

「もしもし」

と岩穴を覗き、

「私わたくしで御座ごいます」

お節せつ、フツこのこゑと此聲おどろに驚き窓口まどぐちを見れば擬まがふ方かたなき鬼彦おにひこの顔かほ、お節せつは見るより、
「ヤア汝なんぢは大江山おほえやまの鬼雲彦おにくもひこが家來けらい鬼彦おにひこではないか、年とし老より夫婦ふうふの汗あせや膏あぶらを絞しぼつた
寶たからを奪うばひ取り、剩あまつさへ妾わらわを誘かどはか拐かし、かかる巖窟がんくつに長ながらくの間閉あひだぢこめ置おいた汝なんぢ惡神あくがみ
の眷屬けんぞく、此處ここへ來きたのは日頃ひごろ念ねんずる神様かみさまのお引ひき合あせ、さア覺悟かくごを致いたせ」
と云いふより早はやく有ありあふ岩石がんせきを右みぎ手に握にぎり、鬼彦おにひこの面めん部ぶを目め蒐がけて打うちつけたる
に、狙ねらひ外はづれて岩壁がんべきに中あたり、かたかたと音おとして巖窟がんくつ内に落おちた。お節せつは又またもや拾ひろ
ひ上あげ鬼彦おにひこの面めん部ぶを目め蒐がけて打うたむとするにぞ、鬼彦おにひこは驚おどろいて覗のぞいた顔かほを竦すくめ乍な
ら、

「モシモシお節せつさま、其腹そのはらだ立たちは御尤ごもつともだが、私わたくしは去き年ねんの鬼彦おにひことは雲泥うんでいの相違さうゐだ。
今いまは前ぜん非びを悔くい、お前まへを助たすけに來きたのだ、平助へいすけさまもお猶ならさまも岩窟いはとの入口いりぐちに待ま
つて御座ごる。さアさア開あけてあげようから出でて下ください」

お節せつ「能よくべらべらと囀さへづる汝なんぢが佞辨ねいべん、其手そのしゅ段だんにのるものか、早はやく此場このばを立たち去され」
鬼彦おにひこ「其御立腹そのごりつぷくは一應いちおう御尤ごもつともで御座ごいます、然しかし乍なら何時いつまでも此處ここに御座ごつて

も詮なき事、何はともあれ今岩戸を開けますから何卒お出まし下さい。アアア
旦悪い事をすれば何時までも悪い事をする様に云はれる哩、人間と云ふものは常
が大切だと云ふのは此處の事かなア、これこれ鬼虎、吾々許りにものを云はして
貴方は沈黙して居るのか、ヤア男らしくも無いメソメソ泣いて居るのだな、エー
じれつたい、泣くのなら又悠くり後で泣け、千騎一騎の場合だ、お前も一つ事情
をお節さまの得心の往く所まで打明けて呉れ、此岩戸を開けるのは易い事だが、
お節さまの諒解を得てからで無いと、開けるが最後出かけに如何な目に遭はされ
るか分つたものぢや無い、第一交渉が肝腎だよ

鬼虎「アア、仕方が無いな、此鬼虎の様な鬼の様な虎の様な名の付いた悪黨の
俺でも、今迄の悪業が記憶から浮かんで来て、心の鬼に五臓六腑を抉られる様だ、
アア、開けねばならず、開けてはならず、開けて悔しい玉手箱、お節さまに會
はず顔が如何してあらうか」

と聲を放つて泣き伏したり。

鬼彦「おい、岩公、貴様は無疵だ、俺に代つて一つ此穴から顔突き出し談判をし

て呉ないか、特別辨理公使だ、之が甘く往つたら貴様を勳一等にしてやるから」

岩公「勳一等でも何でも御免だ、迂闊首でも出して笠の臺でも引き抜かれて見よ、

よい面の皮だ、聖人君子は危きに近寄らずだ、マアやめとこかい」

鬼彦「エー、何奴も此奴も鬼味噌許りだ、強相な顔して居よつて膽玉の【ちよろ】

こい腰抜けだなア、オイ勳公、櫟公、貴様に交渉委員を任命する」

勳公「何を吐すのだい、此談判は鬼彦、鬼虎の避くべからざる義務があるのだ、

誰が之だけ辛い時節に人の責任までも引受けて危い事をする奴があるものか、ナ

ア櫟公」

櫟公「オ、さうだ、マアマア今日は日和が悪いから止めとこうかい」

鬼彦「エー、仕方がない、開けてやらう」

と合圖の岩壁をグツと押し開けば、お節は日頃鍛えて置いた岩壁で造つた鋭利な

石槍を逆手に持ち、鬼彦目蒐けて突きかかる。鬼彦は元來し隧道を生命から

逃び出す、岩公はお節の後より、無手と許り抱きとめ、

岩公「モシモシお節どの、マアマアお待ち下され、之には深い仔細が御座います」

「此期に及んで何の言譯、汝も鬼雲彦が一派の惡魔共、大神の神力を身に帯びたる丹波村のお節が武者振り、思ひ知れよ」

と振り返り突いてかかる。岩公は又もやトントンと元來し隧道を頭を打ち臂を岩壁に打ちつけ乍ら、倒けつ轉びつ出口の方へ走り行く。お節は四邊をキヨロキヨロ見廻しつつ、

「ヤア其方は擬ふ方なき鬼虎では無いか、克くも妾を苦しめよつたな、サアもう斯うなる上は百年目、お節が怨恨の刃、喰つて見よ」

と眞向に振り翳し飛びかからむとする其形相の凄じさ。

鬼虎「モシモシお節さま、惡かつた惡かつた、何卒許して下さいませ、之には深い、仔細がある」

お節「其言譯を聞く耳は持たぬ」

と突いてかかる。鬼虎は前後左右に巖窟内に體を躲し銳鋒を避けつつあつた。如何はしけむ、お節は巖に躓き其場に打ち倒れ悶絶したりけり。

鬼虎「ア、失敗つた、これや大變だ、おいおい勘公、櫟公、貴様は早く出口へ行

つて鬼彦、岩公に此次第を急報致せ。俺はお節さまが氣の付く様に介抱して居るから何卒早く行つて呉れ、おい崎嶇たる隧道の中、慌てて躓き怪我するな、早く行つて来い

「よし合點だ」

と勘公櫟公は一生懸命に出口に向つて驅出したり。鬼虎は叶はぬ時の神頼み、天津祝詞を奏上し天の數歌を聲高らかに奏上し居る。

一方口の岩窟の聲は出入口を兼ねたる岩窟の前の老夫婦を始め鬼彦、岩公等が耳に透き通る如く聞え來たりぬ。勘公、櫟公は岩窟の中より此場に現はれ、

「モシモシ鬼彦、岩公の大將、タ、タ、タ、大變だ、シ、シ、シ、死んだ、死んだ、死んだ、死んだ、死んだ」

平助「エ、何と仰有る、それは誰が死んだのだい、判然言はないのか」

勘公「これが如何して判然言はれやうかい、シ、シ、シ、死んだのぢや死んだのぢや、

アーン、アーン、アーン」

岩公「鬼虎が死んだのか」

勘公「シ、シ、死んだのは死んだのぢやが、しつかりは知らぬ哩、行つて見れや分る、もう此上言ふのは勘辨へて呉れ」

鬼彦「お節どのが死んだのぢや無いか」

勘公「シ、シ、知らぬ知らぬ、マアマア免も角二人の内一人が死んだのぢや」

平助「これこれお前達、此年寄を騷るのか、若しお節が死んでも居つたら年は老つてもまだ何處かに元氣がある、お前達の三人や五人、捻り潰してやるから、

さう覺悟を致せ」

勘公「それでも私丈は除外例でせうなア」

平助「何、何奴も此奴も皆殺しだ」

櫛公「皆殺しなら何程でも頂戴致します」

岩公「エー、ソナナ處かい、サアサア早く行かうぢやないか、愚圖々々して居る

と折角助けたお節さまの生命が危いぞ、モシモシ爺さま、何は免もあれ、奥へ行つて調べませう、サア來い、來れ」

と先に立つて走り行く。平助、お櫛はブツブツ呟き乍ら四人が後に隨いて行く。

鬼虎おにとらは一生いっしやう懸命けんめい神言かみごとを奏上そつじやうしウンウンと神靈しんれいの注射ちゅうしやを行つて居る、お節せつは漸やうやく息いき吹ふき返かへし顔かほふり上げ、見みれば日頃ひごろ怨恨うらみ重かさなる鬼虎おにとらが眞裸まっぱだかの儘まま兩手もろてを組くみ一生いっしやう懸命けんめいに祈願きぐわんして居る。

お節せつ「ヤア、訝いぶかしき汝なんぢの行動かうどう、極惡無道ごくあくぶだうの身みを以もつて殊勝しゆしやうらしく神かみを念ねんじ、妾わらはを詐いつはらむとするか、思おもひ知しれや」

と又またもや突ついてかかる。

鬼虎おにとら「マアマアマア、待まつて下ください、お節せつさま、之これには深ふかい理わけ由ゆがある、待まつた待まつた」

お節せつ「何なに、待まつたもあるものか」

と突つきかかるを、鬼虎おにとらは右みぎに左ひだりに體たいを躲かはし、

「お鎮しづまりお鎮しづまり」

と言いひつつ逃にげ廻まはる。此處ここへ轉ころげる様やうに這はい入いつて來きた平助へいすけお櫓ならは、

「ヤアお前まへはお節せつじゃないか」

お節せつ「ヤア、爺ぢいさまか、婆ばあさまか、如何どうして此處ここへお居ゐでになりましたえ」

「ヤ、お節、會ひ度かつたわいなア」

「ヤ、能う、マア無事で居て呉れた」

と三人互に抱き付き前足を忘れて嬉し涙にかき暮れる。暫時あつて平助夫婦の證言によりお節はやつと安心の上、改めて祝詞を奏上し一行八人此岩窟を立ち出で、五人の裸男と共に道を左にとり眞名井ヶ嶽の豊國姫の出現場を指して登り行く。

(大正一一・四・二一 舊三・二五 北村隆光録)

第四章 羽化登仙〔六一五〕

名さへ恐ろしき魔の岩窟よりお節を救ひ出し、鬼彦一行五人は裸のまま、比治山嵐に吹かれ、震ひ震ひ平助親子を先に立て、雪解の山坂を登り行く。

岩公「ア、平助さま、お槽さま、年寄りの身で、此山坂をお上りになるのは、大抵の事ぢや有りますまい。お節さまも永い間、岩の中に押し込められ、足も弱つ

たでせう。どうぞ、吾々は若い者、あなた方を負はして下さいませぬかナア」

平助「イエイ工滅相な、ソナ事をする、参詣つたが参詣つたになりませぬ。

人様のお世話になつて行く位なら、婆アと二人が炬燵の中から拜みて居りますわ」

岩公「これはしたり平助さま、それもさうだが、吾々を助けると思つて、負はれ

て下さい。實の事を云へば、赤裸で風に當られ、何程元氣な私達でも、辛抱が出

來ませぬ、負はして下さらば、體も暖くなり、又お前さま等も樂に參れると云ふ

ものだ。此れが一擧兩得、私も喜び、あなた方も樂に參れると云ふものぢや。神

様は好んで苦勞をせよとは仰有らぬ。チツとでも樂に信神が出来るのを、お喜び

なさるのだから、どうぞ瘦馬に乗ると思つて、私の背中にとまつて下さいな」

平助「お前の背中は宿屋ぢやあるまいし、………鳥かなぞの様にトマル事が出来

るか。あまり人を馬鹿にするものぢやない」

岩公「ヤア是れは是れは失言致しました。どうぞ三人さま共、御馬の御用を仰せ

付け下さいませれば、有難う存じます」

平助「コレコレお槽、お節、大分キツイ坂ぢや。裸馬に乗ると思つて、乗つてや

らうかい」

お樞「アハ、ハ、ハ、二本足の馬に乗るのはお爺サン、ちつと劍呑ぢやないかい」

平助「ナアニ、此奴ア六本足だ。本當の馬より大丈夫かも知れぬ」

岩公「おぢいさま、六本足とはソラどう言ふものだ。三人一緒に勘定しられては、

チツと困るデ……」

平助「ナニお前、三人寄れば十八本だ。お前一人で六本ぢや。肉體の足が二本と、

副守護神の四足と合はしたら、六本になるぢやないかい」

鬼彦「アハ、ハ、ハ、馬鹿にしよる。俺達を獸類扱にするのだなア」

平助「定まつた事だよ。狐とも、狸とも、鬼とも分らぬ代物だ。六本足と言うて

貰うのはまだ結構ぢや」

鬼彦「エツ、寒いのに仕様もない事を言つて、冷かして呉れないツ……ナア鬼

虎、寒いぢやないか」

鬼虎「ウン、大分に能く感じますなア、……もしもおぢいさま、お婆アさま、

どうぞ吾々を助けると思つて、背中に乗つて下さい……ア、寒いさむい、お助

けだ」

平助「ア、それならば、お櫓や、お節、乗つてやろうかい。大分寒さうぢや。チツと汗を掻かしてやつたら、温もつてよからう。これも神様参りの善根ぢやと思つて、少々苦しいても辛抱してやらう。其代りにお前達、落す事はならぬぞ、落した。だが最後神罰が當るから、鄭重にお伴するが良いワ」

「ヤア早速のお聞届け、鬼彦、鬼虎、身に取り、歡喜雀躍の至りで御座います」
平助「コレ、彦に、虎、誰がお前の様な、意地癖の悪いジャジャ馬に乗るものか、わしの乗るのは岩馬ぢや。婆アは勘馬の背中に、お節は櫓馬の背中に乗つて往くのだよ。大きに、御親切有難う」

「どうしても吾々には、御思召が御座いませぬか」

平助「エー、何程金を呉れたつて、お前等の様な者に乗つて堪るかい。體が汚れますワイ。一寸の蟲も五分の魂だ。酷い目に遇はされて、負うて貰つた位で、恨みを晴らす様な腰拔があつてたまるものか。何處までも、お前の御世話にやなりませぬワイナ」

鬼虎「アア、執心の深いお老爺さまだ。併しこれも身から出た錆だ。……エー
仕方がない、寒い寒い、體も何も氷結しさうだ。比治山峠に於て、首尾能く凍死
するのかなア……オイ鬼彦、一つ……モウ仕方がないから、裸を幸ひ、相撲でも
取つて、體でも温めやうぢやないか」

「オウさうぢや。良い所へ氣が付いた」

と二人は少し廣い所に佇み、兩方から力を籠めて、押合ひを始め出した。あまり
力を入れすぎ、ヨロヨロと、鬼彦が蹠跟く途端に、二人は眞裸の儘、雜木茂れる
急坂をかすり乍ら、谷底へ落ち込みにける。平助は背中を負はれ乍ら、
平助「アア罰は目の前じゃ。あまり惡黨な事をする、アンナものぢや。神様

は正直ぢやなア。……オイ岩公、貴様も彼奴等の……もとは乾兒ぢやつたらう。

今日は俺のお蔭で温い目に會はして貰うて、さぞ満足ぢやらう。アハ、ハ、ハ、

岩公「コレコレぢいさま、お前さまも好い加減に打解けたらどうだい。あれ丈鬼
彦や、鬼虎の哥兄が改心して、一生懸命に謝罪つて居るのに、お前さまはどこま
でも好い氣になつて、苦めようとするのか……イヤ恥をかかすのか。斯うなると、

此岩公も却て二人の方に同情したくなつて來た。エー平助ヂイ奴がツ……谷底へ
放り込みてやらうか。好い氣になりよつて、あまりだ。傲慢不遜な糞老爺奴が……

……

平助「コラコラ岩公、滅多な事を致すまいぞ。コンナ所へ放られようものなら、

それこそ一たまりもない、俺の生命は風前の燈火だ。氣を付けて行かぬかい。……

：第一貴様の足は長短があつて、乗心地が悪い。其跛馬に乗つてやつて居るのに、

何ぢや、其恩を忘れよつて、御託吐すと云ふ事が有るものか。グズグズ云うと、

鬢の毛をひつぱつてやらうか」

岩公「アイタ、コラぢいさま、ソナ所を引つ張られると、痛いワイ」

平助「痛い様に引つ張るのだ。サアしつかりと上らぬか、……モツとひつぱら

うか」

岩公「オイ勘公、櫟公、どうぢや、大變都合が好い所が有る。三人一度に此處か

ら轉げたるか。あまり劫腹ぢやないか、此糞老爺奴、馬鹿にしゃがる。裸一貫の

荒男を掴まへて、爺、婆アや阿魔女に、コミワラれて堪まるものかい。此處まで、

吾々も善を盡し、親切を盡して來たのだ。最早勘忍袋の緒が切れた。鬼彦、鬼虎の哥兄は今頃は谷底に落ちて、ドンナ目に遭つてるか知れやしないぞ。此奴等三人を一緒こたに谷底へ放り込んで、俺等も一緒に、哥兄と心中しやうぢやないか」

勘公「オウさうぢや、俺もモウむかつて來た。此坂を婆アを背中に乗せて、御苦勞さまとも言うて貰はずに、恩に着せられ、おまけに悪口までつかれて堪つたものぢや無い、いつその事、一イニウ三ツでやつたるかい……アイタ、……」

コラコラ婆アさま、酷い事をするない。鬢の毛を無茶苦茶にひつぱりよつて……」

お檣「曳かいでかい曳かいでかい、此馬は手綱が無いから、手綱の代りに、鬢なと引かねば、どうして馬が動くものか。シイ、シート……ドード……ハイハイ」

勘公「エーツ、怪體の悪い……愈四足扱ひにいられて了つた。……オイ檣公、貴様はどうだ。一イニウ三ツで、谷底へゴロンとやらうぢやないか。貴様も賛成ぢやらう」

檣公「どうしてどうして、是れが放されるものか。寒うて堪らない所を温かうして貰つて、汗の出るのも三人のお蔭だ。ソナ事を言うて冥加に盡きるぞ。罰が

當らうぞい……」

勘公「ア、貴様はよつ程目力一、の十ぢやな。お節の若い娘に跨つて貰ひ、氣分が良からうが、俺は皺苦茶だらけの、骨の堅い婆アを背中に負うて、温い事も、なんにも有りやしないワ。喃、岩公……」

岩公「オウさうぢや、まだ貴様等は婆アでも女だから好いが、俺の身になつて見い、堅い堅いコンパスを、ニユウと前の方へ突出しよつて、前高の山路、歩けたものぢやないワ。エー、大分に體も温うなつた。……オイ老爺に、婆ア、モウ下りて貰ひませうかい」

平助「ア、もう下して下さるか。それは有難い。酷い所はモウ濟みたし、此からは平地なり、前下がりがり路だ。目を塞いどつても、モウ往ける……アー苦しい事ぢやつた。其代りお前達は又寒いぞ。昔の地金を出して、俺達の着物を追剥でもしやせぬかな」

岩公「ア、老爺さま、情無い事を言つて呉れな。改心した以上は、塵片一本だつて、他人の物を盗る様な根性が出るものかいナ」

平助「それでもなア、婆ア、此奴等の改心と云ふものは、當にならぬものぢや。

婆ア、しつかりして居れよ」

お櫛「さうともさうとも、老爺さまお前も確りしなさい、コレコレお節や、お前も氣を附けぬと云うと、何時追剥に早變りするかも知れたものぢやない。背に腹は替へられぬと云つて、年寄りや、女子を幸ひに、追剥をするかも分つたものぢやないワ」

此時、鬼虎、鬼彦は、谷の底からガサガサと這ひ上がり來たり、

岩公「ヤア彦に虎か、貴様は谷底で、今頃は五體ズタズタに破壊して了つたぢやらうと思つて居たのに、まだ死なずに歸つて來たか、マア結構々々、サア祝ひに此處で一服でもしやうかい」

「一服も可いが、斯う風のある所では、寒うて休む氣にもならぬ。體さへ動かし居れば暖かいから、ボツボツ行くことにしやうかい」

此時何處ともなく微妙の音樂聞え來たり。一行八人は思はず耳を倚て聞き入る。忽ち空中に聲あり、

『岩公、勘公、櫛公、眞裸で嘸寒いであらう、今天より暖かき衣裳を與へてやらう。之を身に着けて、潔く眞名井ヶ原の奥に進むが宜からう』

鬼彦、鬼虎一度に、

『モシモシ、空中の聲の神様、吾々二人も眞裸で御座います。どうぞお見落しな

さらぬ様に……同じ事なら、モウ二人分與へて下さいませ』

空中の聲『鬼虎、鬼彦の衣裳は、追つて詮議の上、……與へるとも、與へぬと

も、決定せない。今暫く辛抱致すが良からう』

何處ともなく、立派なる宣傳使の服三着、此場に風に揺られて下り來り、三人

の身體に惟神的に密着した。

岩公『ヤア有難い有難い、時節は待たねばならぬものぢや。……オイ勘に、櫛よ、

立派な服ぢやないか。これさへ有れば、宙でも翔てる様になるだらう、天から降

つた天の羽衣では有るまいかなア。……もしもし平助さま、お婆アさま、お節さ

ま、偉う御心配をかけました。お蔭様で、此通り立派な天の羽衣を頂戴致しまし

た』

平助「お前等は、悪人ぢや悪人ぢやと思つて居つたが、……ホンに立派な衣裳を神様から貰ひなさつた。モウこれから、決して決してお前さまに口應へは致さぬ。どうぞ赦して下され」

三人の着けたる装束は、見る見る羽衣の如くに變化し、岩、勘、櫛の顔は忽ち天女の姿となり、空中を前後左右に飛びまわり乍ら、眞名井ヶ原の奥を目蒐けて、悠々と翔り行く。鬼彦、鬼虎、平助、お櫛、お節の五人は、此光景を打仰ぎ、呆然として控へ居る。暫くあつて、お節は聲を揚げて泣き出したれば、平助、お櫛は驚いて、

「コレヤコレヤお節、どうしたどうした、腹でも痛いのか。何を泣く……」
と左右より、老爺と婆アとは獅噛み付き、顔色變へて問ひかける。お節は涙を拭ひ乍ら、

「お祖父さま、お祖母さま、どうぞ改心して下さいませ。あの様な荒くれ男の岩さま、勘さま、櫛さまは大神様の御心に叶ひ、あの立派な平和の女神となつて、神様の御用にお立ちなさつた。妾は女の身であり乍ら、改心が足らぬと見えて、

神様の御用に立てて下さらぬ。どうぞ、あなた二人は、今迄の執拗な心をサラリと拂ひ捨て、惟神の心になつて下さい。さうでなければ、妾は神様にお仕へする事が出来ませぬ」

と又もや「ワツ」と許りに泣き沈む。此時天上に聲あり、

「鬼彦、鬼虎、今天より下す羽衣を汝に與ふ。汝が改心の誠は、愈天に通じたり」
鬼彦、鬼虎は飛び立つ許り打喜び、兩人大地に平伏し、

「ハハア、ハツ」

と言つた限り、嬉し涙に掻き暮れて居る。二人は不圖顔をあぐれば、えも謂はれぬ麗しき羽衣、地上一二尺離れた所に浮游して居る。手早く拾ひ上げむとする刹那、ピタリと二人の體に密着した。追々羽衣は擴大し、自然に身體は浮上り、二人は空中を前後左右に飛揚しながら、

「平助さま、お楢さま、お節さま、左様ならお先へ参ります」

と空中を悠悠として、眞名井ヶ嶽の靈地に向つて翔り行く。後に三人は呆然として、此光景を物をも言はずに見詰め居たりけり。

平助「アア人間と云ふ者は、譯の分らぬものぢやなア、俺の様な善人は、斯うして山の上で寒い風に曝され、娘は瘦衰へ、親子三人やうやう此處まで出て来る事は來たが、五人の大江山の眷屬共は又、どうしたものぢや。アンナ立派な衣裳を天から頂きよつて、羽化登仙、自由自在の身となりよつた。神様もあまりぢやあまりぢや、アンナ男が天人に成れるのなら、俺達親子三人も、立派な天人にして下さつたら良かりさうなものぢやないか。アア此れもヤツパリ、身魂の因縁性來で、何時までも出世が出來ぬのかなア」

お檀「おやぢドン何事も神様の思召通りより行くものぢやない。人間の目から惡に見えても善の身魂もあり、人間が勝手に善ぢや善ぢやと思つて、自惚て居ると、何時の間にやら邪道に落ちて苦しむと云ふ事ぢや、去年お節を奪られてから、二人が泣きの涙に暮らしたのも、若い間から欲ばかりして、金を蓄め、人を泣かして來た報いで、金はぼつたくられ、一年の間も泣いて暮したのぢや。今迄の事を、胸に手を當てて考へて見れば、人こそ、形の上で殺さぬが、藪醫者の様に、無慈悲な事をして、何程人の心を殺して來たか、分つたものぢやない、おやぢど

の、お前も若い中から、鬼の平助、澁柿の平助と言はれて来たのぢやから、コンナ憂目に遭うのは當然だよ。親の罰が子に報うて、可愛いお節が、一年が間、コンナ目に遭うたのぢや。誰を恨める事も無い。みな自分の罪障が報うて来たのぢや、アンアンアン」

平助「俺が常平生、食ふ物も食はず、欲に金を蓄めたのも、みなお節が可愛いはかりぢや、どうぞしてお節を一生樂に暮さしてやりたいと思つた爲に、チツとは無慈悲な事も行つて来たが、それぢやと云うて、別に俺が美味しい物一遍食つたのでもなし、身欲と云ふ事は一つもして居らぬぢやないか」

お節「それでも、おやぢドン、ヤツパリ身欲になるのぢや。他人の子には辛く當り、團子一片與るでもなし、何も彼も、お節お節と、身臍ばつかりしとつて、天罰で一年の苦しみを受けたのぢや。そこで神様が此通り、善と惡との鑑を見せて下さつたのぢや。これから綺麗サツパリと心を容れ替へて下されや、婆アも唯今限り改心をする。親の甘茶が毒になつて、お節の體もあまり丈夫ではない。コンナ纖弱い體を此世に遺して、年取つて夫婦が幽界とやらへ行く時に、後に心が

残る様な事では行く所へも行けない。今の間に改心し、お節の身體が丈夫になる様に、眞名井の神様へ、心から誓ひをして來ませう』
と三人は、雪積む路をボツボツと、眞名井ヶ原の豊國姫命が出現場指して、杖を力に進み行く。

因に、鬼彦、鬼虎、其他三人の羽化登仙せしは、其實肉體にては、徹底的改心も出來ず、且又神業に参加する資格無ければ、神界の御慈悲に依り、國替（凍死）せしめ、天國に救ひ神業に参加せしめ給ひたるなり。五人の肉の宮は、神の御慈悲に依つて、平助親子の知らぬ間に、或土中へ深く埋められ、雪崩に壓せられ、鬼彦、鬼虎に救ひ出されたお節は、其實鬼武彦の眷屬の白狐が所爲なりき。又夜中お節を送つて來た悦子姫は其實は、白狐旭明神の化身なりき。お節を隠したる岩窟は、鬼彦、鬼虎の兩人ならでは、救ひ出す事が出來なかつたのである。それは岩窟を開くに就て、一つの目標を知つて居る者は、此兩人と鬼雲彦より外になかつたから、鬼武彦の計らひに依つて、此處まで兩人を引寄せ、お節を救ひ出さしめ給うたのである。又途中に五人の男を裸にした娘のおコンは、白狐旭の眷屬

神しんの化身けしんであつた。曩さきに文珠堂もんじゅだうにて別わかれたる悦子姫よしこひめ、及び平助へいすけの門口かどぐちにて別わかれたる音彦おとひこ、青彦あをひこ、加米彦かめひこは眞名井ヶ嶽まなゐがだけの聖地せいちに既すでに到着たうちやくし居ゐたりしなり。

(大正一一・四・二一 舊三・二五 松村眞澄録)

第五章 誘惑婆いっわくばば〔六一六〕

平助へいすけは、お櫛なら、お節せつと共に崎嶇きくたる山路やまみちを心細こころほそげにとぼとぼと進すすみ行く。春日はるひに照てらされて日向邊ひなたべりの坂道さかみちは雪解ゆきとけ、山やまの肌はだを現あらはして居ゐる。斯かかる處ところへ蓑笠着みのかさきた一人ひとりの婆ばば、若い娘わかむすめを二人伴ふたりともなひ、行手ゆくてに立たち塞ふさがり、婆ばば「これはこれは、お爺ぢいさま、お婆ばばアさま、青白あをしろい瘦やせた娘むすめを連つれて何處どこへ行くのぢや」

平助へいすけ「ハイハイ、お前まへさまは何處どこのお方かたか知らぬが、私わたくしは眞名井ヶ原まなゐがはらの、今度現こんどあらはれなかつた結構けつこうな神様かみさまに、お禮詣れいまゐりに行くのぢや、どうぞ其處そこを退のいて下くだされ」

婆ばば「お前まへさま、眞名井ヶ原まなゐがはらへ御禮詣おれいまゐりに行くのぢやと云うたな、アンナ處ところへ行いつて一體いったい何をなにするのぢや、あの神かみは惡神あくがみぢやぞ」

平助へいすけ「惡神あくがみでも何なんでも構かまうて下くださるな、信仰しんかうは自由じゆうだ、私の心こころで私わたくしが拜をがむのぢや、何處どこの婆ばばアか知らぬけれど、人ひとの信仰しんかうを落おとささうと思おもうて、コンナ山やまの中なかへ出でしや張ばつて、よい物もの好きずもあればあるものぢやワイ」

婆ばば「はてさて困こまつた人達ひとたちだ、可憐かわいさうなものだナア。良藥りやうやくは口くちに苦にがし、利益りえきになる事ことを云いへば嫌きらはれる世よの中なかだ、お前まへさま、これから先さきに行ゆかうものなら命いのちがないぞへ、命いのちを捨すてても信神しんじんをするのかい」

平助へいすけ「誰人だれが命いのちまで放ほかして信神しんじんする物好ものずきがあるものか、長命ながいきがしたさにお參詣まゐりするのぢや。眞名井ヶ原まなゐがはらの豐國姫とよくにひめの神様かみさまと云いつたら、それはそれは結構けつこうな、命いのちの神様かみさまぢや。お前まへも一つ詣まゐつてお蔭かげを頂いただいてはどうだい、何時いつ迄まで生いて居ゐても生い満まん足あせぬ此世このよの中なかだ。サアサア往ゆかう往ゆかう」

婆ばば「マアマアお爺ぢイさま、一服いっぷくしなさい、此處ここを少すこし横よこへ寄よると小ちひさい家いへがある、其處そこが私わたしの修業場しうげふばぢや、お前達まへたちのやうな瑞みづの靈みたまに呆とぼけて出でてくる亡者まうじゃを濟度さいどしや

うと思つて、俄「にはかに修行場しうぎやうばを拵こしらへたのだ、喰くはず嫌きらひは信用あてにならぬものぢや、マア兔とに角かくこの婆ばあさまに随ついて御出おいでなさい」

平助へいすけ「オイお櫛なら、何どうせう、この婆ばあさまの云いふ通り、大分だいぶん足あしも疲つかれた。一寸ちよつと一服いつぶくして話はなしを聞きくだけ聞きいて見みようかなア」

お櫛なら「お爺ぢいさま、お前まへはそれだから困こまると云いふのぢや、直ちきに人ひとの口車くちぐるまに乗のつて、ソナ事ことで信神しんじんが出來できるものか、私わたしが何時いつも意見いけんすると、仕様しやうのない婆ばあの老妻らうばし心んで吐ぬかす事ことは聞きく耳持みもためと、二ふたつ目めには頑張ぐわんばりなさるが、些ちつとは此この婆ばあの云いふ事ことも聞ききなさい、お前まへも餘あんまり老翁らうやうしん心んが勝過かちすぎて居をる。何處どこの婆ばあさまか知しらぬけれど、私わたしより些ちつと若わかいと思おもうて早はや乗り氣きになつて御座ござるが、嫌いやぢや嫌いやぢや、私わたしはどうしても、ソナ處ところへは行ゆかぬ、それよりも早はやく眞名まな井ゐさまに參詣さんけいして御禮おれいを申まをさねばなるまい、サアサアお節せつ行ゆかう行ゆかう」

平助へいすけ「婆ばあアがさう云いつても、お節せつお前まへはどうだ、一寸ちよつと寄よつて見みる氣きはないか」

お節せつ「お爺ぢいさま、道草みちぐさを喰くはずにトツトと參まゐりませうよ」

婆ばあ「これはこれはお婆ばあアさまと云いひ、娘むすめさまと云いひ、何なんと云いふ不心得ふこころえな事ことだい、

夫や親の言葉を背くと云ふ事があるものか、大方お前さまは三五教の信者であらう

お節「尤も妾は三五教の信者で御座います、お爺いさまお婆アさまは無宗教者、妾は大江山のバラモン教の大將に誘拐され、巖窟の中に閉ぢ込められ苦しみ悶えて居りました。其處へ有難い三五教の神様が夢枕に立つて下さいまして、宣傳歌を教へて下さつた、其宣傳歌を唱へて居ると、間もなく悪者が改心を致しまして、助けに来て呉れました。世の中に何の神様が尊いと云うても、三五教の神様位有難い神様はありません、私は三五教を守護遊ばす豊國姫の神様が、今度眞名井ヶ原に御出現になつたので、お禮詣りに行く所で御座います、どうぞ神詣りの途中で邪魔して下さいますな、お話があれば下向の途中に寛ると承はりませう」

婆「サアそれがいかぬのだよ、三五教は今高天原をおつ放り出された素盞鳴尊と云ふ奴が大將をして居るのだ、悪けれやこそ結構な處を逐出されたのぢやないか、お前さま達もさうぢやらう、柔順しい自分の兄弟を誰が逐出すものか、親を泣かし、兄弟を泣かし、【ヤンチャ】の有り切りを盡し、近所は申すに及ばず、

其邊中に迷惑をかける極道息子は何程可愛いと云うても、世間の手前家に置いておくこと云ふ事は出来まいがな。それと同じ事に、伊邪諾の大神様や、姉の神様が愛想をつかし、世間に濟まぬと云うて切つても切れぬ姉弟の中を放り出された位だもの、酢でも蒟蒥でも行く代物ぢやない、その素盞鳴尊が采配を振つて居る三五教へ迷ひ込むとは何と云ふお前達は没分曉漢ぢやいなア、三五教の眞實の事が聞きたけれや、この婆が篤りと説明して上げる、サアサア何と云つても連れて行く、來なされ來なされ」

お節「假令お爺いさま、お婆アさまが行くと仰有つても妾だけはよう参りませぬ」
婆「エ、分らぬ娘じやなア、これこの通り綺麗な二人の娘が、此婆の言ふ事を心から納得して、朝夕忠實に仕へて居るのぢや、新しい女の流行る時節にお前さまは又何とした舊い頭腦ぢや、それもその筈一年許りも世間見ずに、岩の穴へ押込められて居たのだから世間の様子も分るまい、世の中は随分進みて居るぞえ、些と確りして此お婆アさまの云ふ事を聞きなされ、斯う見えてもこの婆は、若い時からドンナ事にも經驗を積みて來た苦勞人の黒姫ぢや、苦勞なしに誠の花は咲か

ぬぞえ」

お節「お説は御尤もで御座いませうが、入らぬ御節介、何と仰【せつ】けられまして、折角ながら應じ兼ねます、入らぬ御節介止めて下さいませ」

黒姫「エイ我が強い女ぢやなア。青瓢箪に屁吸はしたやうな顔をしやがつて、よ

うまあツベコベと理屈を囀る小娘だ、イヤ我羅苦多娘ぢや、もしもしお爺いさま、

お前も年が寄つてコンナ【やんぢや】娘を持つて居ては末が案じられる、もつと

眞面目な眞實の身魂になつて、お前さま夫婦の安心の出来るやうに教育して上げ

るから、サアサアあそこ迄来て下さい、この通り二人の娘さまは淑やかなものだ、

これも全く私の教育がよいからぢやぞえ」

平助「エ、喧しいワイ、娘がお轉婆にならうと、何うならうと貴様等のお世話に

ならぬ哩、サアサアお節、コンナ糞婆に係り合つて居つたら日が暮れる、サアサ

ア行かう行かう」

お櫛「モシモシお爺いさま、さう云つたものぢやない、一つお前聞いたらどうぞ

や、後生のためになるかも知れぬぞえ」

此時前方より宣傳歌を歌ひながら遣つて来る二人の宣傳使があつた。お節は此
聲に力を得、宣傳歌に合して、

「朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

誠の力は世を救ふ

と手を打ち踊り出したれば、黒姫は前後の宣傳歌の板挟みとなり、

黒姫「エイエイ、折も折肝腎の所へ又もや我羅苦多宣傳使奴が来よつて頭が痛い
哩。亡國の聲を出しよつて、ア、胸が苦しい、サアサアお爺いさまにお婆アさ
ま、アンナ奴に見付かつたら大變だ、其「ヤンチャ」娘も早く私の後へついて来
るのだよ」

お櫛「サアサア平助さま、お前この方の後に随いて行かう、怖い者が出て来るさ
うな」

平助「お節の話聞いて、三五教と云ふのがある事を聞いたが、何だか神様のや

うな聲だ、俺は此聲を聞くと益々眞名井ヶ原の神様が有難くなつて来たワイ」

黒姫「エイエイ仕方のない耄碌許りぢやなア、誠一つで助けてやらうと思へば、一生懸命に嫌がつて滅亡の道に飛んで行かうとする。嗚呼、縁なき衆生は濟度し難しとは、能く云うたものだ。エ、氣分の悪い、宣傳歌が段々近づいて来る、これこれ清さま、照さま、早く早く」

と急ぎ立て、傍の木の茂みに手早く姿を隠したり。

此場に現はれたる二人の宣傳使は音彦と青彦なりける。

「ヤアお前さまは丹波村のお爺いさま、お婆アさまに娘さまぢやな、夜前は岩公や、勘公、櫟公が豪い御世話になつたさうですナア。悦子姫様が太變に御待兼です、サアサア行きませう」

平助「イ、エ、何う致しまして、誠に不都合な家でお禮を云つて貰うと却て心苦しう御座います、神様の御蔭で一年振りに、大事な大事なお節の顔を見る事が出来ました。これこれお櫛、お節、此方は神様の御使様だ、サアサアちやつと御禮を申さぬか」

お櫛なら 貴方あなたは神様かみさまの御使おつかひ、何も申まをませぬ、有難ありがたう御座ございますす」

と涙なみだぐむ。

お節せつ 神様かみさまの御蔭おかげで助たすけて貰もらひました、何分なにぶん宜敷よろしく御願おねがひ致いたしますす」

音彦おとひこ 今此處いまここに何なんだか人影ひとかげが現あらはれて、クサクサと云いつて居ゐたやうですが、何處どこ

へ行きゆましたか」

お節せつ 〇ハイ黒姫くろひめと云いふ婆アばあさまがで出きて來きて、二人ふたりの綺麗きれいな娘むすめさまと共ともに私等わたくしら親おやこ子

の者ものに眞名まな井ヶ原がはらに詣まゐるな、此方こつちへ來こいと云いつて道みちを塞ふさぎ困こまつて居ゐました、其處そこ

へ貴方あなたがたの宣傳歌せんでんかが聞きえましたので、……とうとう何處どこかへ姿すがたを隠かくしました、ア、

良いい所ところへ來きて下くださいまして親おやこ子三人さんにんが助たすかりました。これと云いふのも神様かみさまの御引おひき

合はせで御座ございますす」

音彦おとひこ 〇ヤア何なんと仰あふせられます、黒姫くろひめがで出きて來きましたか、どこまでも執拗しつえうな奴やつぢや

ナア、ハテ何處どこへ行きゆきよつたか知しらぬぬ」

お節せつ 〇今此林いまこのはやしの中なかをコソコソと下くだつて行きゆきましたよよ」

音彦おとひこ 〇何どうも仕方しかたのない奴やつぢやなア、兔とも角かくも早はやく御參詣おまゐり致いたしませう、悦よし子こ姫ひめ様さま

が貴方のお出を大變お待ち兼ねで、吾々はお迎ひに參つたのです、サア行きませう。

と五人は勢よく西へ西へと辿り行く。

(大正一一・四・二一 舊三・二五 加藤明子録)

第六章 瑞の寶座(六一七)

樹木鬱蒼として生茂れる四方山に包まれたる清淨の境域に、水晶の如き水は潺々として流れ、處々に青み立ちたる清泉幾つとなく散在して居る。中空には容色麗しき天津乙女の七八人、微妙の音樂につれて右往左往に舞ひ狂ひ、迦陵頻伽、鳳凰、孔雀の瑞鳥相交はりて前後左右に飛び交ふ様は、天國淨土の大祭日も斯くやと思はるる許りの壯觀なりき。苔生す美はしき巖の上に容色端麗にして威儀儼然たる一人の女性、日の丸の扇を兩手に持ちて唄ひ居れり。

自轉倒島は松の國

堅磐常磐に搖ぎなく

御代は平らに安らかに

國も豊に治まりて

天下泰平國土成就

五穀成熟山青く

水清く實に豊國姫の

神の命の知らず世は

天津御空の神國か

常世の春の永久に

榮え久しき松の御代

天津神たち國津神

萬の神等始めとし

百の民草押し竝べて

歡ぎ賑ふミロクの世

天津乙女は天上に

錦の袖を翻し

鳥は萬代囀ひ舞ふ

天と地との水鏡

眞如の月を浮べつつ

神素盞鳴の大神の

此世を清め洗ひます

瑞の靈は彌赫耀に

輝き渡る大御代の

譽目出度き三五の

神の教の遠近に

眞名井ヶ原と鳴り響く

豊國姫の神靈

神素盞鳴の瑞靈

野立の彦や野立姫

暗夜を照らす日の出別

一度に開く木の花の

咲耶の姫の御神姿

青雲高き富士の山

轟き鳴戸瀬戸の海

深き恵みの神の露

潤ふ世こそ樂しけれ

潤ふ世こそ樂しけれ

春とは言へど尚寒き

四方の山々樹々の雪

纏ひて謳ふ君が御代

君と臣とは睦び合ひ

青人草も服ひて

世は永久に榮え行く

國治立の大神の

表に現はれ知らず世を

松竹梅の永久に

待つ間の長き鶴の首

萬代祝ぐ緑毛の

龜の齡の限りなく

三五教の神の教

千代に榮えよ永久に

幾億年の末迄も

動かぬ御代と進み行け

變はらぬ御代と開け行け

教の道は開け行く

御代の扇の末廣く
神の御風に靡く世を

來たさせ給へ惟神
靈幸倍坐し坐世よ

ア、惟神惟神
靈の幸を永久に

世人の上に悉く
蒙らせ給へ大御神

豊國姫の神靈
千代に八千代に祈ぎ奉る

と自ら謠ひ自ら舞ひつつあるのは三五教の宣傳使悦子姫なりき。
音彦は立ち上り、

高天原を追はれて
地教の山に伊邪那美の

尊に會はせ給ひつつ
名も高國別と現はれし

活津彦根と諸共に
山河渡り野路を越え

高山四方に廻らせる
西藏國を言向けて

フサの國をば横斷し
ウブスナ山の頂に

齋苑の宮居を建て給ひ
熊野樟日の命をば

守護まもりの神かみと定めさだめつつつ
 神かむ素す蓋さ鳴の大神おほかみは
 八洲やしまの國くにを悉ことごとく
 廻めぐり給たまひて今いま此こ處こに
 自おの轉ころ倒しま島しまに渡わたりまし
 由ゆ良らの港みなとの國くに司つかさ
 秋山あきやま彦ひこの神かむ館やかたに
 暫しば時し息いきをば休やすませつつ
 聖せい地ちを指さして出いで給たまひ
 國くに武たけ彦ひこの大神おほかみに
 神しん政せい成じやう就じゆの經けい綸りんを
 神かむ議みりはかかに議はらせつつ
 東あづまを指さして出いで給たまふ
 後あとに殘のこりし英ひでこ子ひめ姫め
 萬よろづ代よ祝いはふ龜かめ彦ひこの
 神かみの命みことは大江おほえ山やま
 曲まがの猛たけびを鎮しづめむと
 悅よしこ子この姫ひめを伴ともひて
 劍けん尖さき山やまの谷たにの底そこ
 由ゆい緒しよも深ふかき靈れい泉せんに
 魂たまを清きよめて皇すめ神かみの
 珍うづの御み舍あらか仕つかへまし
 悅よしこ子この姫ひめは青あを彦ひこを
 伴ともなひ再ふたび大江おほえ山やまの
 魔ま窟くつヶ原がはらに來きて見みれば
 心こころ汚きたき黑くろ姫ひめの
 辻つじ榎つま合あはぬ繰くり言ことに
 言こと向むけ兼かねて進すすみ來くる

心も清き雪の道

天の橋立後に見て

駒に鞭つ膝栗毛

此音彦も諸共に

悦子の姫の後を追ひ

眞名井ヶ原に来て見れば

聞きしに勝る神の園

天の眞名井と名にし負ふ

清き流れに身褌して

瑞の靈となり代り

四方の國々島々に

羽振りを利用かす曲神を

言むけ向和し神國の

守護の神と現はれて

瑞の靈に神習ひ

御代永久に守るべし

ア、勇ましし吾心

ア、美はしき神の庭

神より生れし神の子の

務めを盡すは此時ぞ

神の力を世に廣く

輝き照らすは此時ぞ

ア、惟神々々

靈幸倍坐世よ

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも

神の大道は變へざらめ

誠まことの道みちは外はづさざれ 容みめも貌かたちも悦よしこひめ子ひめ姫め
聖ひじりの御みよ代よに青あをひこ彦ひこや 萬よろづよ代いは祝いはふ加かめひこ米ひこ彦の
身みたま魂まて照てらすは今いまなるぞ 勇いさみ進すすみて皇すみかみ神の
珍うづの御みわぎ業ぎに仕つかへなむ 珍うづの御みわぎ業ぎに仕つかへなむ
ア、惟かむながらかむながら神々々々々 御みたま靈さち幸はへ倍ましませ坐せよ

音おとひこ彦このうたの此この歌うたに悦よしこひめ子ひめ姫めを始はじめ一いちどう同どうは勇いさみ立たち、豊とよくにひめ國こくに姫ひめの時とき々とき神しんし姿しを現あらはし給たまうて
ふ、中ちゅう央あつの石いしの寶ほう座ざに向むかつて天あまつ津つ祝のり詞とを奏そうじやう上じやうし、宣せん傳でん歌かを謠うたひ終をはる。折をりしも息いきせ
ききつて走はしり來きたる加かめひこ米ひこ彦は、

ハ悦よしこひめ子ひめ姫め様さま、音おとひこ彦ひこさま、青あをひこ彦ひこさま、其その他たの御ごれんちう連ちう中さま様さま、御ごようじん用じん心しんなされませ、
只ただいま今いまウラナイ教けつの魔まがみ神みの大たいしやう將じやう株かぶなる黒くろ姫ひめは、何いつ時つの閒まにやら數あまた多たの眷けんぞく族ぞくを驅かり集あつ
め、此この地ちに向むかつて攻せめ寄よせ、貴あなた方がた等とを十と重へ二に十じゅう重じゅうに取とり捲まき、靈れい肉にくともしに殲せんめつ滅めつせし
めむとの計けいりや略かく整せいへ、時ときならず此この場ばに向むかつて進しんげき撃げきし來きたる形けい勢せい歴れき然ぜんたるもので御ご座ざい
ますれば、別べつ條じょうはありませぬが其そのお考かんがえで居あて下ください。假たとへ令くろ黒ひめ姫め幾いくせん千せん萬まんの曲まが神かみ

を引率れ押寄せ來るとも、此加米彦が圓滿清朗なる言靈の發射に依つて、一人も
残らず言向け和すは案の内、必ず共に御油斷あるな」
と息を喘ませ物語る。

音彦「アハ、ハ、ハ、黒姫の奴、百計盡きて今度は死物狂ひになりよつたな、小人
窮すれば亂すとかや。ヤア之は面白い面白い、それに就いても俄に偉い元氣にな
つたものだナア」

加米彦「承はれば高姫の肝煎りにて、フサの國より高山彦と云ふ勇將、數多の軍
勢を引き率れ來り、黒姫と結婚の式を擧げ勢力を合して大團體を作り、一擧に素
盞鳴尊の根據地たる、眞名井ヶ原を攻略せむとの彼等が計畫と承はる、必ず必ず
御油斷あるな」

音彦「アハ、ハ、ハ、又しても又しても、飛んで火に入る夏の蟲か、憐れな者だな。
青彦、汝は加米彦と共に、言靈を以て寄せ來る敵を言向け和せ、吾は悦子姫様と
共に豊國姫の降臨を仰ぎ神勅を乞はむ」

「委細承知仕りました。吾々二人ある限り假令雲霞の如き大軍一時に攻め寄せ來

るとも、言靈の速射砲を以て麿殺しに仕らむ、ア、面白し面白し」

と勇み喜ぶその健氣さ。悦子姫は聲を掛け、

「ヤア加米彦殿、青彦殿、妾は皇大神の深き御威靈を賜り、最早神變自由の神業を修得したれば、天下に恐るるものは何物もなし。汝等妾に心惹かれず力限り言

靈を以て奮戦せよ」

加米彦、青彦一度に頭を下げ地上に兩手をつき、

「委細承知仕りました、何分宜敷御願ひ申す」

と勇み進みて此場を立退かむとする。時しもあれ、加米彦の急報に違はず近づき來たる黒姫が軍勢、高山彦を先頭に旗鼓堂々と此方に向つて進み來る物々しさ。

加米彦、青彦は寄せ來る高山彦の軍勢に向ひ、

「ヤア高山彦、御參なれ、身の程知らぬ馬鹿者共、某が言靈の速射砲にかかつて

斃るな」

高山彦は馬背に跨り乍ら、

「ヤア汝は噂に聞く木端武者の加米彦とやら、その廣言は後に致せ、ヤアヤア者

共、加米彦、青彦に向つて進撃せよ」

常彦、菊若、夏彦、富彦、岩高の大將株は高山彦の指圖の許に、各々數多の部

下を引率れ、二人の周圍をバラバラと取り圍み、

「サア加米彦、青彦、其他の奴輩、もう斯うなつては叶ふまい、此方が刃の錆と

ならむよりは、一時も早く心を改め素盞鳴尊の邪教を捨ててウライ教の誠の道

に歸順致すか、神は汝等を憐れみ給ふぞ、我を折り降參致せば、如何に反對せし

惡の身魂も赦して遣はす、サア返答は如何じや、如何に汝勇猛なりとて多勢に無

勢、最早汝が運の盡、返答如何に覺悟は如何ぢや」

と四方八方より抜刀を揃へ攻めかかる、加米彦、青彦は一度に高笑ひ、

「アハ、、、、心も黒い色も眞黒々の黒助の黒姫に加擔致す馬鹿者共、假令幾萬

人攻め來る共蠅螂の斧を揮つて龍車に向ふにも等しき奴輩、吾言靈の神力を見よ」

と云ふより早く雙手を組み一生懸命に神靈の注射をサーチライトの如く指頭より

發射し、右に左に向つて振り廻せば、數多の寄せ手は俄に頭痛み、眩暈ひ、舌つ

り、身體或は強直し或は痲痺し、ウンウンと呻聲を立てて此場にバタリと倒れた

り。黒姫は此體を見て高山彦の馬に跨り、馬上に二人抱き合ひ乍ら雲を霞と逃
行く可笑しさ。加米彦は打笑ひ、

「アハ、ハ、ハ、青彦殿、扱ても扱ても愉快な事では御座らぬか、吾々誠の神の教
を傳ふる宣傳使に向ひ、傍若無人にも凶器を携へ攻め來り、脆くも吾言靈の發射
にザツクバラン、身體竦み忽ち地上に倒れて藻掻く可笑しさ、それに付けても一
層面白きは黒姫、高山彦の兩人、味方を見捨て逃げ行く狼狽へさ加減、何と愉快
では御座らぬか」

青彦「アハ、ハ、ハ、實に愉快ですな、矢張三五教は違ひますよ」

加米彦「貴方も、もう高姫のウラナイ教には、よもや後戻りは成されませうな
ア」

青彦「假令大地が覆へるとも變つてなりませうか」

加米彦「サア、何とも分らぬ、まだお前さまの言靈には少し許り濁りがある、そ
の濁りの分がまだウラナイ教に執着心があるのだ」

青彦「殺生な事を言つて下さるな、其濁りはウラナイ教の信仰の情力でせう。も

う暫らくお待ち下さらば本當の言靈が出る様になりませう」

加米彦「それは兔も角、悦子姫様、音彦さまがお待ち兼ねでせう、サアサア早く

霊場へ引き返しませう」

と先に立つて行く。悦子姫は音彦の審神の許に豊國姫の神の御降臨の最中なりける。

音彦「只今悦子姫の肉の宮に懸らせ給ふ大神は何れの神に坐しますぞ、仰ぎ願は

くば御名を名乗らせ給へ、某は三五教の宣傳使音彦の審神者に御座います、神界

の思召、何卒委細に吾等に仰せ聞けられ下されますれば有難う御座います」

神懸者「我は豊雲野尊、又の御名豊國姫の神なるぞ、國治立の大神と共に一旦地

底の國に身を潛め、再び地教の山に現はれて、大海原に漂へる國土を修理固成な

しつ時時の至るを待ち居たりしに、天運循環して天津神より此聖地を我鎮座所と

神定め給ひたり。我は此地に靈魂を止め自轉倒島はいふも更なり、大八洲の國々

島々に我靈魂を配り置きて世を永久に守らむ。汝は之より鬼雲彦を使役しつつあ

りし八岐大蛇の片割れ鬼ヶ城山に姿を隠し時を窺ひ、聖地を蹂躪せむとしつつあ

れば一日も早く此場を立ち去り、加米彦、青彦を引率れ此比治山の峰傳ひに鬼ヶ城山に向へよ、我は汝が影身に添ひ、太しき功勳を永久に立てさせむ、必ず案じ煩ふな、假令幾千萬の曲神攻め來るとも屈するな、恐るるな、神を力に誠を杖に善く戦へ、誠の銚を執つて敵を言向け和せよ、又此聖地は我靈魂永久に守りあれば後に心を残す事なく一刻も早く此處を立ち出でよ。加米彦、青彦、汝等も音彦と共に鬼ヶ城に向つて進撃せよ」

音彦「委細承知仕りました、いざ之よりは悦子姫様を先頭に吾々一同時に移さず、八岐大蛇の退治に立ち向ひませう、何卒々々御守護を仰ぎ奉る」

豊國姫「何事も神に任せ汝等が力のあらむ限り誠を盡せよ」

と云ひ残し神あがり給ひければ、悦子姫は初めて正氣に復り、

「ア、有難し有難し、大神の御降臨、サア音彦殿、その他御一同様、鬼ヶ城に時を移さず神勅のまにまに向ひませう」

「委細承知仕りました、左様ならば之より参りませう」

加米彦「サア平助、お櫓、お節どの、御苦勞でありました、之でお別れ致しませ

う

平助 『私達は之から貴方等に別れて後は如何致しませう、只今の如く數多の軍勢押し寄せ來らば、吾々は如何とも防ぎ戰ふ事は出來ませぬ、何卒吾々も一緒に連れて行つて下さいませぬかナア』

音彦 『ヤ、それはなりませぬ、然し乍ら如何なる敵も御心配遊ばすな、叶はぬ時は三五教の祝詞を奏上し宣傳歌をお謡ひなさい。さすれば如何なる強敵も雲を霞と逃げ去つて仕舞ひます、之が神歌の功力であります。左様なら、親爺どの、婆アさま娘子、御縁があらば又御目に懸らう』

と左右に分れ比治山の嶺傳ひに南を指して宣傳歌を謡ひつつ一行四人は進み行く。平助親子三人は名残を惜みつつ、トボトボと家路を指して歸り行く。

(大正一一・四・二一 舊三・二五 北村隆光録)

第二篇 千態萬様

第七章 枯尾花（六一八）

味方みかたの人数にんずうも大江山おほえやま
 岩窟いはやの中に黒姫くろひめは 五十路いそぢの坂さかを越こえ乍なら
 齒はさへ落おちたる秋あきの野のの 梢淋こすゑさびしき返かへり咲ざき
 此世このよにアキの霜しもの髪かみ コテコテ塗ぬつた黒漆くろうるし
 俄作にはがづくりの夕鴉ゆふがらす カワイカワイと皺しはが枯がれた
 聲張こゑはり上あげてウラナイの 道みちを傳つたふる空元氣からげんき
 天狗てんぐの鼻はなの高たか山彦やまひこを 三世さんぜの夫つまと定さだめてゆ
 流石女さすがをんなの恥はづかしげに 顔かほに紅葉もみぢを散ちらしつつ

黒地に白粉ペツタリと 生地を祕した曲津面

口喧しき燕や 朝な夕なにチユウチユウと

雀百まで牡鳥を 忘れかねてか婿欲しと

あこがれ居たる片相手 星を頂月を踏み

日にち毎日山坂を 駆け廻りつつ通ひ来る

男の数は限りなく 蓼喰ふ蟲も好き好きと

酷い婆アの皺面に 惚けて出て来る浅間しさ

広い様でも狭いは世間 色は眞黒黒姫の

心に叶うた高山彦の 夕力か鳶か知らね共

烏の婿と選まれて 怪しき名に負ふ大江山

魔窟ヶ原の穴覗き 奥へ奥へと進み入る

一コクニコクと迫り来る 三國一の花婿を

取った祝ひの黒姫が 嬉しき便りを菊若や

心頑固な岩高や 人の爺を寅若の

情容赦も夏彦や 富彦、常彦諸共に
飲めよ騒げの大酒宴 岩屋の中は蜂の巣の
一度に破れし如くなり。

黒姫は皺苦茶だらけの垢黒い顔に、白い物をコテコテに塗り、鐵倉の上塗みた
様な、眞白な厚化粧、白髪は烏の濡羽色に染め、梅の花を散らした派手な襦袢を
羽織り、三國一の婿の來るを、今や遅しと、太い短い首筋を細長く延ばして、蜥
蜴が天井を覗いた様なスタイルで、入口の岩窟を覗き込み、年の寄つた嗚れ聲に
色を付け、ワザと音曲に慣れた若い聲を出し、

「コレコレ夏彦、常彦、まだお客さまは見えぬかな。お前は御苦勞だが、一寸そ
こまで迎へに往つて來て下さらぬか。由良の湊までは、フサの國から、天の鳥船
に乗つてお越しなのだから、轟々と音が聞えたら、それが高山彦さまの一行だ。
空に氣をつけ足許にも氣を付けて往て來て下さい」

夏彦「ハイハイ承知致しました。遠方の事とは云ひ乍ら、随分暇の要る事ですな

ア。サア常彦、お迎へに行つて來うぢやないか」

常彦「黒姫さま、今日はお芽出度う。ソナラ往て來ませうか」

黒姫「何ぢや常彦、改まつて、お芽出度うもあつたものか。あまり年寄りが婿を貰うと思つて冷やかすものぢやない。サアサア トツトと往て來なさい」

常彦「ソナラ、何と言つて挨拶をしたら好いのですか。今日は芽出たいのぢやありませんか」

黒姫「芽出たいと云へば芽出たいのぢやが、ナニもう妾は、五十の坂を越えて、誰が好みて婿を貰うたりするものか。これと云ふのも、神様の教を擴げる爲に、

此黒姫の體を犠牲にして、天下國家の爲に盡すのだよ。お芽出たうと云ふ代りに御苦勞様と言ひなされ」

常彦「これはこれは五苦勞の四苦勞、眞黒々助の黒姫様、十苦勞さまで御座います」

黒姫「エーエーお前は此黒姫を馬鹿にするのかい。十苦勞と云ふ事があるものか。あまりヒヨトくりなさるな」

常彦「イ工滅相な、あなたも天下の爲に犠牲に御成りなさるのは五苦勞さまぢや。又此常彦が三國一の婿さまを、斯う日の暮になつてから、細い山路を迎ひに行くのも、ヤツパリ五苦勞さまぢや。お前さまの五苦勞と私の五苦勞と、日韓併合して十苦勞様と云うたのですよ。アハ、ハ、ハ、ハ、」

夏彦「常彦、行かうかい」

と、岩穴をニユツと覗き、

「ヤア占た占た、モウ行かいても可い」

常彦「行かでも良いとは、ソラ何だい、高山彦さまが見えたのかい」

夏彦「きまつた事だ。モシモシ黒姫さま、お喜びなさいませ。偉い勢で澤山な家來を伴つて見えましたよ」

黒姫「それはそれは御苦勞な事ぢや。どうぞ穴の口まで迎ひに行て下され。あまり這入り口が小さいので、行過されてはお困りだからなア」

夏彦は肩から上をニユツと出し、高山彦の一行の近付き来るを待ち居たる。

高山彦「此處は黒姫の住家と聞えたる魔窟ヶ原ぢやないか。モウ誰か迎ひに来て

居さうなものだに、何をして居るのだらうな」

虎若「ヤア御大將様、此魔窟ヶ原は随分廣い所と聞きました。何れ先方から遣つ

て來られませうが、何分豫定とは早く着いたものですから、先方も如才なく準備

はやつて居られませうが、つい遅くなつたのでせう。御馳走一つ拵へるにも斯う

云ふ不便な土地、何事も三五教ぢやないが、見直し聞直し、御機嫌を直してモウ

一息お進み下さいませ」

高山彦「それはさうだが、如何に黒姫、部下が無いと云つても、二十人や三十人

は有りさうなものだ。三人や五人迎ひに來したつて良いぢやないか。縁談は飯炊

く間にも冷ると云ふ事が有る。あまり寒いので、冷たのぢやあるまいか、ナア虎

若」

虎若「トラ、ワカリませぬ。何分此通り、あちらにも此方にも雪が溜つて居りま

すから随分冷る事でせう。私も何だか體が寒くなつて來た。フサの國を出た時は

随分暖かであつたが、空中を航行した時の寒さ、それに又此自轉倒島へ着いてか

らの寒さと云つたら、骨身に徹えますワ」

高山彦は苦蟲を喰つた様な不機嫌な顔をし乍ら、爪先上りの雪路を進み来る。

雪の一面に積つた地の中から、夏彦は首丈を出して、

「コレハコレハ高山彦のお出で、サアサアお這入り下さいませ。黒姫さまが大變にお待兼で御座います。あなたも遙々と國家の爲に犠牲になつて下さいまして有難う御座います」

虎若「ヤア何だ、コンナ所に首が一つ落ちて、物言つて居やがる。……ハ、ア此

奴ア、大江山の化州だな……オイ化州、這入れと言つても、蚯蚓ぢやあるまいし、

何處から這入るのぢやい。入口が無いぢやないか。貴様の體は如何したのぢや。

松露か何ぞの様に頭ばつかりで活てる筈もあるまいし、怪體な代物ぢやなア」

夏彦「黒姫さまは高山彦さまに、お惚け遊ばして首つ丈陥つて御座るが、此夏彦

は首は外へ出して、體丈はまつて御座るのだ。サアサア不都合な這入口の様だが、

中は立派な御座敷、用心の爲にワザと入口が細うしてある。高山彦さま、どうぞ

お這入り下さいませ。一人づつ這入つて貰へば、何程大きな男でも引つ掛らずに

這入れます」

と言ふより早く夏彦は窟内に姿を隠しける。

虎若「ヤア妙だ。見た割とは大きな洞が開いて居る。ヤア階段もついて居る。サ

ア高山彦さま、御案内致しませう」

虎若を先頭に、高山彦は數多の従者と共に、ゾロゾロと岩窟の中に潜り入る。

黒姫は此時既に奥の間に忍び込み、鏡の前で口を開けたり、目を剥いたり、鼻を

摘んで見たり、顔の整理に餘念なかりける。夏彦は此場に走り來り、

「モシモシ、高山彦の御大將が見えました。どうぞ早く此方へお越し下さいませ」

黒姫「エー氣の利かぬ事ぢやなア。何とか云つて、お茶でも出して、口の間で休

まして置くのだよ。それまでに化粧をチヤンと整へて、型ばかりの祝言をせなく

てはならぬ。菊若、岩高は何をして居るのだ。料理の用意は出來たか。お茶でも

獻げて世間話でもして待つて貰ふのだよ」

夏彦「今日は芽出度い婚禮、それにお茶をあげては、茶々無茶苦になりやしませ

ぬか。今日はお水を進げたらどうでせう」

黒姫「エー茶ア茶ア言ひなさるな。茶が良いのだ。水をあげると水臭くなると可

かぬから……」

夏彦「ハ、ア、茶ア茶アと茶ツつく積りで、茶を吞ませと仰有るのかなア……茶、承知致しました」

黒姫「エーグツグツ言はずに、あちらへ行つて、高山彦様御一同のお相手になるのだよ。こつちの準備が出来たら、祝言の杯にかかる様にして置きなさい。……

アア人を使へば苦を使ふとは、能う言つたものだ。男ばかりで、女手の無いのも……ア困つたものだ。清サン、照サンと云ふ二人の若い女は有つたけれども、

これは眞名井ヶ原の隠れ家に置いてあるなり、斯う云ふ時に女が居らぬと便利が悪い。お酒の酌一つするにも、男ばかりでは角ばつて面白くない。併し乍ら清

サン、照サンは十人竝優れた美しい女、折角貰うた婿どのを横取しられちゃ大變だと思つて、伴れて來なかつたが、安心な代りには便利が悪いワイ。サアサアこ

れで若うなつて來た。化粧と云ふものは偉いものだナア。昔から女は化物だと云ふが……われと吾手に見惚れる様になつた。如何に色男の高山彦でも、此姿を見

たら飛び付くであらう。現在女の自分でさへも、自分の姿に見惚れるのだもの……

… ヤツパリ靈魂みたまが良いと見える。ア—ア惟神靈幸倍坐世かむながらたまちはへませ、惟神靈幸倍坐世かむながらたまちはへませ。…
… コレコレ常彦つねひこ… オツトドツコイ、コン十年の寄つた婆聲ばばこゑを出しては愛想あいさうを盡つ
かされてはならぬ。端唄はうたや淨瑠璃じやうるりで鍛きたへて置いた十七八の娘むすめの聲こゑを使つかはねばなる
まい、… コレコレ夏彦なつひこ、用意よういが出来たよ。これ夏彦なつひこ、一寸此方ちよつとこちらへお越し」
夏彦なつひこ「エツ、何だなん、妙な聲めづかしいこゑがするぞ。黒姫くろひめさま、何時いつの間まにか若い照サンわがてる、清サ
ンを引ひぱつて来たきと見える。アンナ別嬪べつびんを連つれて来たきたら、婿むこを横取よこどりりに仕しられて
了しまうがな…」

黒姫くろひめ「コレコレ夏彦なつひこサン、早はやう来きなさらぬかいな」

夏彦なつひこ「婆ばばアと違ちがうて、娘むすめの聲こゑは何處どこともなしに氣分きぶんが好よいワイ。今晚こんばん黒姫くろひめと高山たかやま
彦ひこの婆組ばばぐみが婚禮こんれいをする。後あとは照サンてると夏彦なつひこサンの婚禮こんれいだ。これ丈澤山だけたくさんに男をとこも居を
のに、あの優やさしい聲こゑで夏彦なつひこサンと言いひやがるのは、餘よつ程ほど思召おほしめしが有あると見みえるワ
イ。どうれ、一ひとつ、襟えりでも直なほして、お目めに掛からうかい」

目めを擦こすり、鼻はなをほぜくり、唇くちびるを舐なめ、襟えりの合あせ目めをキチンとし、帶おびから袴はかままで
検あらため、

「ヤアこれで天晴れ色男だ……エツヘン」

足音を變へ乍ら、稍反り返りて、色男然と澄まし顔、一間の障子をガラリと開

け、

「今お呼びとめになつたのは、照サンで御座いますか、何用に御座います……」

黒姫「お前は夏彦ぢやないか。何ぢや其濟ました顔は……照サンぢやないかテ……」

夜も晝も照サンに……照の女に現を抜かしよつて、わしの云うた事が耳へ這入ら

ぬのか」

夏彦「それでも若い女の聲がしましたもの、若い女と言へば、今の所では照サン、

清サンより無いぢやありませんか」

黒姫「照や清は眞名井ヶ嶽の隠れ家に置いてあるぢやないか。何をとぼけて居る

のぢや。黒姫が呼びたのですよ」

夏彦「へエー、何と若い聲が出るものですか」

黒姫「きまつた事ぢや。言靈の練習がしてあるから、老爺の聲でも、婆の聲でも、

十七八の女の聲でも、赤兒の聲でも、鳶でも、鳥でも、猫でも、鼠でも、自由自

在の言靈が使へるのですよ」

夏彦「ア、ハハー、さうですか、さうすると今晚は、鼠の鳴聲を聞かして貰はうと儘ですな、アハ、ハ、ハ、」

黒姫「エーエー喧しいワイ。早うお客さまのお相手をして、それからソレ……レイの用意をするのよ」

夏彦「レイの用意だつて……何の事だか分りませぬがなア」

黒姫「レイの上にコンが付くのぢや。アタ恥しい。良い加減に氣を利かしたらどうぢや」

夏彦「霜降り頭に黒ン坊を着けて、鍋墨の様な顔に白粉を付けて、華美な着物を着ると、ヤツパリ浦若い娘の様な氣になつて、恥かしくなるものかいなア。恥かしい事と言つたら知らぬ黒姫ぢやと思つて居つたのに、流石は女だ。恥かしいと仰有る、アツハ、ハ、ハ、」

其處へ常彦現はれ來り、
黒姫様、萬事萬端用意が整ひました。サアどうぞお越し下さいませ」

黒姫はつと立ちあがり、姿見鏡の前に、腰を揺り、尻を叩き、羽ばたきし乍ら、
稍空向気味になり、すまし込み、仕舞でも舞う様な足附で、ソロリソロリと婚禮
の間に進み行く。

黒姫、高山彦の結婚式は無事に終結した。三々九度の杯、神前結婚の模様等は
略しておきます。

黒姫は結婚を祝する爲、長袖淑やかに、自ら歌ひ自ら舞ふ。日頃鍛へし腕前、
聲調と云ひ、身振りと云ひ、足の運び方、手の操り方、實に巧妙を極め、出色の
ものなりける。

黒姫「色は匂へど散りぬるを」
「吾が世誰ぞ常ならむ」

「有爲の奥山今日越えて」
「浅き夢見しゑひもせず」

昨日や「きやう」(京)の飛鳥川
清く流れて行末は

善も悪きも浪速江の
綿帽子隠したツノ國の

春の景色に紛ふなる
花の容顔月の眉

年は幾つか白雲の
二八の春の優姿

皺は寄つても村肝の
心の色は稚櫻姫

神の命の御教を
朝な夕なに畏みて

仕へ奉りし甲斐ありて
色香つつしむ一昔

花は紅、葉は緑
手折り難きは高山彦の

空に咲きたる梅の花
時節は待たにやならぬもの

天は變りて地となり
地は上りて天となる

さしもに高き高山彦の
吾背の命の遅ざくら

手折る今日こそ芽出度けれ
疝聲高き高姫の

朝な夕なに口角を
磨きすまして泡飛ばし

宣る言靈も水の泡
アワぬ昔は兔も角も

會うた此世の嬉しさは
假令天地が變るとも

替へてはならぬ妹と背の
嬉しき道の此旅出

旅は憂いもの辛いもの
辛いと言つても夫婦連

閑荒ぶ山路も 霜の劍を抜きかざす

浅茅ヶ原も何のその 夫婦手に手を取りかわし

互に睦ぶ二人仲 二世の夫とは誰が言うた

五百世までも夫婦ぞと 世の諺に言ふものを

坊ツチヤン育ちの緯役が 世間をミツの御靈とて

譯の分らぬ事を言ふ 表は表、裏は裏

假令雪隠の水つきと 分らぬ奴が吐くとも

斯うなる上は是非もない 雪隠千年萬年も

浮世に浮いて瓢箪の 胸の邊りに締めくくり

縁の糸をしつかりと 呼吸を合して結び昆布

骨も砕けし蛸入道 烏賊に世人は騒ぐとも

登り詰めたは吾戀路 成就鯛の今日の宵

善いも悪いも門外漢の 容喙すべき事でない

高山彦の吾夫よ 千軍萬馬の功を經し

苦勞くらうに苦勞くらうを重かさねたる すべてみちの道みちにクロトなる
 此この黒くろ姫ひめと末すえ永ながく 世しよ帶たい駿するが河がの富ふ士じの山やま
 解とけて嬉うれしき夏なつの雪ゆき 白しろき肌はだを露あらはして
 薰かほり初そめたる兄この花はなの 一いち度どに開ひらく樂たのしみは
 神かむい伊い奘ざ諾なの大神おほかみが 妹いもの命みことと諸もろ共ともに
 天あまの瓊ぬほ矛こをかき下おろし コヲロコヲロかに搔なき鳴なして
 山やま河か草くさ木き百ももの神かみ 生うみ出いでませし其その如ごとく
 汝なれは左ひだりへ妾わしは右みぎ 右みぎと左ひだりの呼い吸あ合あせ
 明あかす誠まことに裏うらは無ない ウラナイ教けうの神かみの道みち
 國くに治は立たちの大神おほかみの 開ひらき給たまひし三五あななひの
 神かみの教をしへも今いまは早はや 瑞みづの御み靈たまの混まぜ返かへし
 穴あな有あり教けうといよいよこなりこにこける 愈いよいよこ是これこからこ比ひ治ぢ山やまの
 峰みねの續つづきの比ひ沼ぬ眞ま名な井い 豊とよ國くに姫ひめの現あらはれし
 珍うづの寶はう座ざを蹂じう躑りんし 誠まこと一ひとつこのウラナイの

神かみの教をしへを永久とことはに 夫婦ふうふうの呼吸いきを合せあはつつ
 立たてねば置おかぬ經たての教のり 稚櫻わかざくら姫ひめの神かみさへも
 花はなの色香いろかに踏ふみ迷まよひ 心こころを紊みだして散ちり給たまふ
 其その古事ふるごとに神習かむならひ 此この黒姫くろひめも愼つつしみて
 神かみの御跡みあとを追おひまつる 五十路いそぢの坂さかを越こえ乍ながら
 浮ういた婆ばばアと笑わらふ奴やつ 世間せけん知らずの閒拔まぬけ者もの
 さはさり乍ながら夏彦なつひこよ 岩高彦いはたかひこよ常彦つねひこよ
 色々いろ話を菊若きくわかよ 妾わらはに習ならつて過あやまつな
 年としを老とつての夫持をつともつ 妾わたしは深ふかい因縁いんねんの
 綱つなにからまれ是ぜ非ひもなく 神かみの御爲おんため國くにの爲ため
 ウラナイ教けうの御爲おんために 心こころにもなき夫つまを持もつ
 陽氣やうき浮氣うはきで黒姫くろひめが コンナ騒さわぎをするものか
 直日なほひに見直みなほし聞直ききなほし 善言ぜんげん美詞びしに宣のり直なほし
 必かならず惡口わるくち言いふでない 後あとになつたら皆判みなわか明かる

神かみの奥おくには奥おくが有ある 其その又また奥おくには奥おくがある

昔むかしの昔むかしのさる昔むかし マひと一ひとつ昔むかしのまだ昔むかし

まだも昔むかしの大昔おほむかし 神かみの定さだめた因縁いんねんの

魂たまと魂たまとの真釣まつり合あひ 晴はれて扇あふぎの末すゑ廣ひろく

仰あふげよ仰あふげ神心かみこころ 心こころ一ひとつの持もちやうで

此この黒姫くろひめの言いふ事ことは 善ぜんに見みえたり又また惡あくに

見みえて居をるかも知しれないが 身魂みたまの曇くもつた人間にんげんが

心こころ驕たかぶりツベコベと 構かまひ立たてをばするでない

總すべて細工さいくは流々りゅうりゅうぢや 仕上しあげた所ところを見てお呉くれ

身魂みたまの因縁いんねん性來しやうらいの 大根本だいこつぽんの根本こつぽんを

知しつたる神かみは外ほかに無ない 日ひの出神でのかみの生宮いきみやと

定さだまりきつた高姫たかひめや 永ながらく海うみの底そこの國くに

お住居すまゐなされた龍宮りゅうぐうの 乙姫おとひめさまの肉にくの宮みや

此この黒姫くろひめと唯ただ二人ふたり 要いらぬ屁理屈へりくつ言いはぬもの

心も清きモチヅキの
音に耳をば澄ましつつ

三五の月の清らかな
心の鏡をみがきあげ

ウラナイ教の御仕組
何も言はずに見て御座れ

今は言ふべき時でない
言はぬは云ふに彌勝る

高山彦や黒姫の
婚禮したのも理由がある

人閒心で因縁が
どうして分らう筈はない

朝日は照るとも曇るとも
月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも
此因縁は人の身の

窺ひ知らるる事でない
今に五六七の世が來れば

唯一厘の神界の
仕組をあげて見せてやる

それ迄喧しう言ふでない
口を慎み、ギユツと締め

瑞の御靈にとぼけたる
譯の分らぬ人民は

高山彦や黒姫の
此結婚を彼此と

口を極めて誹るだらう
譏らば誹れ、言はば言へ

妾わたしの心こころは神かみぞ知る

神かみの御おん爲ため國くにの爲ため

お道みちの爲ために黒姫くろひめが

盡つくす誠まことを逸いち早く

世界せかいの者ものに知しらせたい

吁あゝ、惟かむながらかむながら
惟あゝ神かみ々々ながら

御靈みたま幸さち倍はへましませよ

ア、惟かむながらかむながら
惟あゝ神かみ々々ながら

そろうて酒さけをば飲のむがヨイ

ヨイヨイヨイトサア

ヨイトサノサツサ

黒姫くろひめは調子てうしに乗のつて踊をどり狂くるひ、汗あせをタラタラ流ながし、
白粉おしろいをはがし、顔かほ一面いちめん繩なは暖のれ
簾れんを下さげたる如ごとくなりにける。高山たかやま彦ひこは立たちあがり、祝歌しゆくかを唄うたふ。

フサの都みやこに生うまれ出いで

浮世うきよの風かぜに揉もまれつつ

妻子つまこを捨すてて遙々はるばると

ウラナイ教けうの大元おほもとの

北山村きたやまむらに來きて見みれば

鼻高はなたか々と高姫たかひめが

天地てんちの道理だうりを説とき聞きかす

支離滅裂しりめつれつの繰言くりごとを

厭いやな事ことぢやと耳みみ押おさへ
三日みつ四よつ日かと經たつ内うちに

腹はらの蟲むし奴めが何時いつの間まか
グレッツと變かはつてウラナイの

神かみの教をしへが面おも白しろく
聞きけば聽きく程ほど味あぢがで出でる

牛うしに牽ひかれて善ぜん光くわう寺じ
爺ぢサン婆ばサンが參まゐる様やうに

何時いつの間まにやらウラナイの
教をしへの擒とりこと成なり果はてて

朝あさな夕ゆふなの水みづ垢ごう離り
蛙かはづの様やうな行ぎやうをして

嬉うれし嬉うれしの日ひを送おくる
盲めくらんぼ聾あつの集あつまりし

ウラナイ教けうの大おほ元もとは
目めあき一人ひとりの高たか山やま彦ひこが

天あま津つ空そらより降くだり來きし
天てん女にょの様やうに敬うやまはれ

持もて囃はやされて高たか姫ひめの
鋭すどき眼め鏡がねに叶かなうたか

拔ばつ擢てされて黒くろ姫ひめが
夫つまとなれとの御ご託たく宣せん

斷ことわりするも何なんとやら
枯かれ木きに花はなも咲さくためし

地ぢ獄ごくの上うへを飛とぶ様やうに
膽たん力りよく据すゑて高たか姫ひめに

承しょう知ちの旨むねを答こたふれば
高たか姫ひめさまも雀こをど躍りし

これで妾も安心と

數多の家來を差しまわし

み空を翔ける磐船を

數多準備ひフサの國ゆ

唸りを立てて中空に

思ひがけなき高上り

高山彦や低山の

空を掠めて渡り來る

大海原の島々も

數多越えつつ悠々と

風に揺られて下り來る

由良の湊の廣野原

イヨイヨ無事に着陸し

虎若富彦伴ひて

大江の山を探りつつ

魔窟ヶ原に來て見れば

見渡す限り銀世界

妻の住家は何處ぞと

眼白黒黒姫の

岩戸を守る夏彦が

首から先を突出して

ヤア婿さまか婿さまか

黒姫さまのお待兼ね

遠慮は要らぬサア早く

お這入りなされと先に立ち

頭を隠して段階

ヒヨコリヒヨコリと下り行く

虎若、富彦先に立ち

高山彦を伴なひて
内はホラホラ岩窟に

潜りて見れば此は如何に
名は黒姫と聞きつれど

聞きしに違ふ白い顔
夢に牡丹餅食た様な

嬉しき契の今日の宵
年は二八か二九からぬ

姿優しき此ナイス
幾久しくも末永く

鴛鴦の衾の睦び合ひ
浮きつ沈みつ世を渡る

今日の結縁ぞ樂しけれ
月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも
高山彦と黒姫の

妹背の中は何時までも
いや常永に變らざれ

八洲の國は廣くとも
女の數は多くとも

女房にするは唯一人
神の結びし此縁

睦び親しむ玉椿
八千代の春を迎へつつ

ウラナイ教の神の憲
四方の國々宣り傳へ

神政成就の神業に
仕へ奉りて麗しき

尊き御代を彌勒の世

彌勒三會の曉の

鐘は鳴るとも破れるとも

二人の中は變らまじ

あゝ惟神々々

御靈幸はひまませよ

と謠つて、大きな圖體をドスンとおろした其機會に、杯も、徳利も、一二尺飛び上り、俄に舞踏を演じ、思はぬ餘興を添へにける。夏彦は、くの字に曲つた腰を、三つ四つ握り拳にて打ち乍ら、土杯を右手に捧げ、オツチヨコチヨイのチヨイ腰になつて、自ら謠ひ、自ら踊り始めける。

ア、芽出たい芽出たいお芽出たい 年は老つても色の道

忘れられぬと見えまする

娘や孫のある中に

田舎の雪隠の水漬か

ババアが浮いてうき散らし

顔に白粉コテコテと

雀のお宿のお婆アさま

高い山から雄ノ鳥を

言葉巧に誘て來て

言ふな言ふなと吾々の
舌切雀のお芽出たさ

夜さりも晝もチヨンチヨンと
皺のよつたる機を織る

八夕の見る目は堪らない
雀百までをソンドリを

忘れぬ例は聞いて居る
私も男のはしぢやもの

相手が欲しい欲しいわいな
戀路に迷うと云ふ事は

可愛い男に米
走かけた事ぢやげな

圖蟹が泡を福の神
恵比須大黒ニコニコと

腹を抱へて踊り出す
辨天さまの眞似をして

顔コテコテと撫塗り立て
月が重なりや布袋腹

膨れて困るは目のあたり
それでも私は黙つてる

長い頭の壽老人さま
高山彦を婿に持ち

まるビシヤモンを叩き付け
上を下への大戦

大洪水に流されて
天變地妖の大騒動

黑白も分かぬ暗の夜に
思はぬ地震が揺るである

地震雷火の車ぢしんがみなりひくるま 變れば變る世の中ぢやかはればかはるよなか

娘や孫のある人がむすめまごひと 烏の婿に鷹を取りからすむこたか

目を光らして是からはめひかこれ 天が下なる有象無象をあめしたうぞむぞ

何の容赦も荒鷹のなんようしやあらたか 勢猛き山の神いきほむたけやまかみ

苦勞重なる黒姫のくろうかさくろひめ 行末こそはお芽出たいゆくすゑ

あゝなつかしや夏彦のなつひこ 夢寐にも忘れぬ照さまはむびわす

どうして御座るか比治山のござひぢやま 黒姫さまの隠家にくろひめかくれが

肱を枕に寝て御座るひぢまくねござ アゝなつかしやなつかしや

高山彦や黒姫のたかやまひこくろひめ 今日けふの慶事けいじを見るにつけ

心にかかるとは照さまのこころ 比治山ひぢやま 峠たうげの獨寝ぢやひとりね

コンナ所を見せられてところ 羨けなり涙なみだがポロポロと

私は零こぼれて來たわいなわしこぼきてきたわいな アゝ惟かむながらかむながら神々々

ホんに叶かなはぬ事ことぢやわいかな 叶かなはぬ時ときの神かみ頼だのみ

比沼ひぬの眞ま名な井ゐの神かみさまにひと 一つひとつ願ねがひを掛かけて見みよう

ウラナイ教けうに入いつてより 早十年はやじふねんになるけれど

神かみの教をしへの信徒まめひとは 女をんなに眼まなこ呉くれなよと

高姫たかひめさまや黒姫くろひめの 何時いつも厳きびしきお警告いましめ

それに何なんぞや今日けふは又また 黒姫くろひめさまが身みを扮や装つし

天女てんによの様に化ばけかはり 返かへり咲ざきとは何なんの事こと

黒姫くろひめさまが口癖くちぐせに 裏うらと表おもてがある教をしへ

奥おくの奥おくには奥おくがあると 言いうて居ゐたのは此この事ことか

俺おれはあんまり神かみさまに 呆ほうけて居をつて馬鹿ばかを見みた

馬鹿ばかしやうぢき正直なつひこの夏彦なつひこも 此このれから心こころを改かい悪あくし

今いままで堪こらへた戀こひの道みち 土手どてを切きらしてやつて見みる

サア常彦つねひこよ岩高いはたかよ 何時いつも話はなしを菊若きくわかの

若い奴等やつらは俺おれの後あとを 慕したうて出でて來こひ比治山ひぢやまの

照てるさま、清きよさま潜ひそむ家やに 肱ひぢてつぱう鐵砲てつぱうを覺悟かくごして

訪たづねて行ゆかうサア行ゆかう 高山彦たかやまひこや黒姫くろひめの

今日の結婚済みたなら
私はお暇を頂かう

グツグツしてると年が老る
若い盛りは二度とない

皺苦茶爺イになつてから
如何に女房を探しても

適当な奴は有りはせぬ
時遅れては一大事

花の盛りの吾々は
今から心を取直し

女房持つて潔く
體主靈従の有丈を

盡して暮すが一生の
各自の得ぢやトツクリと

思案定めて行かうかいの
サアサ往かうではないかいナ

ドッコイシヨウ ドッコイシヨウ
ウントコドッコイ黒姫さま

ヤットコドッコイ高山彦の
長い頭のゲホウさま

ドッコイシヨのドッコイシヨ

と自暴自棄になつて、一生懸命に不平を漏らし躍り狂ふ。常彦、岩高、菊若も、夏彦の唄に同意を表し、杯を投げ、爛徳利を破り、什器を踏み碎き、酔にまぎら

し亂癡氣騒ぎに其夜を徹かしけるが、流石の黒姫も結婚の祝ひの夜とて一言もツ
ブやかず、夏彦等が亂暴をなす儘に任せ居たりける。

明くれば正月二十七日、黒姫は、高山彦其他の面々を一間に招き、比沼の眞名
井の豊國姫が出現場なる、瑞の寶座を占領せむことを提議し、満場一致可決の結
果、猫も杓子も脛腰の立つ者全部を引連れ、高山彦は駒に跨り、眞名井ヶ原指し
て驀地に進撃し、茲に正月二十八日の大攻撃を開始し、青彦、加米彦が言靈に、
散々な目に會ひ散り散りバラバラに、再び魔窟ヶ原の岩窟に引返し、第二の作戦
計畫に着手したりける。嗚呼、黒姫一派は如何なる手段を以て、眞名井ヶ原の聖
場を占領せむとするにや。

(大正一一・四・二二 舊三・二六 松村眞澄録)

第八章 蚯蚓の囁(六一九)

黒姫、高山彦の發議により、愈眞名井ヶ原の瑞の寶座を蹂躪し、あはよくば占領せむとの計畫は定まつた。黒姫夫婦は婚禮の後片付に忙殺を極めて居る。三軍の將と定つた夏彦、常彦、岩高、菊若の四人は入口の間に胡坐をかき、出發に先だち種々の不平談に花を咲かし居たりける。

常彦「人間と云ふものは身勝手のものぢやないか、石部金吉金兜押しても突いても此信仰は動かぬ、神政成就する迄は男のやうなものは傍へも寄せぬ、三十珊の大砲で男と云ふ男は片端から肱鐵砲を喰はすのだ、お前達も神政成就迄は若いと云うても決して女などに目を呉れてはならぬぞ、若い者が女に目を呉れるやうな事では神界の經綸が成就せぬと、明けても暮れても口癖のやうに、長い煙管をポーンと叩いて皺苦茶面をして、厳しいお説教を始めて御座つたが、昨夜の態つたら見られたものぢやない、雪達磨がお天道様の光に解けたやうに、相好を崩しよつて、「モシ高山彦の吾夫様」ナンテ、團栗眼を細うしよつて何を吐しよつたやら、譯の分つたものぢやない、俺やもう嫌になつて仕舞つたワ」

岩高「定つた事ぢや、女に男はつきものだ。茶碗に箸、鑿に槌、杵に臼、何と云

つたつて此世の中は男女が揃はねば物事成就せぬのだ、二本の手と二本の足があつて人間は自由自在に働けるやうなものだ、三十後家は立つても四十後家は立たぬと云ふ事があるぢやないか

常彦「四十後家なら仕方が無いが彼奴は五十後家ぢやないか、コレコレ常さま、お前は因縁の身靈ぢやによつて、何うしても三十になるまで女房を持つてはいけませんぬぞえ、人間は三十にして立つと云ふ事があるなぞと云よるが、此時節に三十にして立つ奴は碌なものぢやない、俺等は既に既に十六七から立つて居るのぢや、今思うと立つものは腹ばかりぢや」

夏彦「貴様等は何を下らぬ事を云うて居るのだ、高姫さまだつて餘り大きな聲では云はれぬが、何々と何々し、又と、し、夫は夫は口でこそ立派に道心堅固のやうに云うて居るが、口と心と行ひの揃つた奴はウライナイ教には一匹もありやしないワ、俺も魔我彦や、蝶蜷別や高姫に限つてソナ事はあるまい、言行心一致だと初の程は信じて居たが、此の頃は何うやら怪しくなつて來たやうだ、本當に氣張る精も無くなつて了つた。今迄は二つ目には黒姫の奴、夏彦何うせう、

常彦何うせう、岩高、菊若、斯うしたら好からうかなアと吐しよつて、一から十迄、ピンからキリ迄相談をかけたものだが、昨日から天候激變、ケロリと吾々を念頭から磨滅しよつて、箸の倒けた事まで、ナアもし高山彦さま、これもしこちの人、何うしませう、斯うした方が宜敷くは御座いますまいかと、皺面にペツタリコと白いものをつけよつて、田螺のやうな齒を剥き出し、酒許り飲ひよつて、俺達には一つ飲めとも云ひよりやせむ、かう天候が激變すると何時俺達の頭の上に雷鳴が轟き、暴風が襲來するか分つたものぢやない、俺はホトホトウライ教の真相が分つて愛想が盡きたよ。今更三五教へ入信うと云つた所で、力一ぱい高姫や黒姫の言葉の尻について、素盞鳴尊の惡口雜言をふれ廻して來たものだから、どうせ三五教の連中の耳へ入つて居るに違ひない、さうすれば三五教へ入信る譯にも行かず、ウライナイ教に居ても面白くはなし、厄介者扱のやうな態度を見せられ、苦しい方へ許り廻されて本當に珠算盤があはぬぢやないか、何時迄もコンナ事をして居ると身魂の身代限をしなくてはならぬやうになつて了ふ、今の中に各自に身魂の土臺を確り固めて置かうではないか。よい程扱き使はれて肝腎の時に

なつてから、お前は何うしても改心が出来ぬ、身魂の因縁が悪いナンテ勝手な理屈を云つてお拂ひ箱にせられては約らぬぢやないか」

常彦「それやさうだ。高姫は變性男子の系統ぢやと聞いた許りに、變性女子の身魂より餘程立派な宣傳使日の出神の生宮だと思つて今迄ついて來たのだ。併し日の出神もよい加減なものだ。各自ウラナイ教脱退の覺悟をしやうではないか」

菊若「オイ、ソナナ大きな聲で云うと奥へ聞えるぞ、靜にせぬかい」

夏彦「ナニ、今日は何程大きな聲で云つたところで俺達の聲は黒姫の耳に入るものか、耳へ入るものは高山彦の聲許りだ、俺達の聲が耳に入る程注意を拂つて呉れる程親切があるなら、もとよりソナナ問題は提起しないのぢや、乞食の蝨ぢやないが口の先で俺達を旨く殺しよつて、今迄旨く使つて居たのだ、随分氣に入つたと見え、枯れて松葉の二人連、蝨の卵ぢやないが彼奴ア死んでも離れつこは無

いぞ、アハ、ハ、ハ、」

岩高「併し、そろそろ眞名井ヶ嶽に出發の時刻が近よつて來たが、お前達は出陣する考へか」

夏彦「否と云つたつて仕方が無いぢやないか、ウライナイ教けうに居ゐる以上いじやうは否いやでも應おうでも出陣しゅつじんせねばなるまい、併しかしながら根ねつかから葉はつかから氣乗きのりがしなくなつて來た、仕方しかたが無いから形式的おじやうもくに出陣しゅつじんし、態わざと三五教あななひけうに負まけて逃にげてやらうぢやないか、さうすれば黒姫くろひめは申まをすに及およばず、高姫たかひめもちつとは胸むねに手てを當あてて考かんがへるだらう、高山彦たかやまひこだつて愛想あいさうをつかして黒姫くろひめを捨すてて去いぬかも知しれぬぞ。今いまこそ花婿はなむこが來たのだと思おもつて上品じやひんぶつて、大きな鰐わに口くちを無理むりにおちよぼ口くちをしやがつて、高尚かうじやうらしく見みせて居ゐるが、暫しばくすると地金ぢがねを出だして、又また女をんなだてら大勢おほぜいの中なかで、サイダーやビールの喇叭らつぱ飲のみをやらかすやうになるのは定きまつてゐる。鍍金めつきした金屬きんぞくが何時いつま迄でも剥はげぬ道理だうりはない、俺達おれたちもウライナイ教けうの信者しんじやと云いふ鍍金めつきを今迄いままで塗ぬつて居ゐたが、もう耐たまらなくなつて、そろそろ剥はげかけたぢやないか、アハ、ハ、ハ、」

斯かる所ところへ虎若とらわかと富彦とみひこの兩人りやうにん現あらはれ來り、

虎とら、富とみ「ヤア四天王してんわうの大將方たいしやうがた、高山彦たかやまひこ、黒姫様くろひめさまの御命令ごめいれいで御座ござる、一時いちじも早はやく眞ま名あ井がヶ原はに向むかつて出陣しゅつじんの用意よういめされ」

と云いひ捨すてて此場このばを急いそぎ立たち去さりにけり。

夏彦「エ、何だ、馬鹿にしてゐる。昨日来た許りの虎若、富彦を使つて吾々に命令を傳へるナンテ、あまり吾々を輕蔑し過ぎて居るぢやないか、如何に氣に入つた高山彦の連れて来た家來ぢやと云つて、古參者の吾々を放つて置き勝手に新參者に命令を下し、吾々を一段下に下しよつたな、これだから好い加減に見切らねばならぬと云ふのだよ」

常彦「ア、仕方がない、兔も角も形式なりと出陣する事にしやうかい」

黒姫は突然此場に現はれて、

「これこれ夏彦、常彦、お前今何を云つてゐらしたの」

常彦「ハイ、眞名井ヶ嶽に出陣の用意をしやうと申て居りました」

黒姫「それは御苦勞ぢやつたが、其次を聞かして下さい、其次は何と仰つた」

常彦「ハイハイ、次は矢張其次で御座いますナ」

黒姫「天に口あり、壁に耳と云ふ事をお前達は知らぬか、最前から四人の話は初

めから終迄、次の間に隠れて聞いて居りました。随分高山さまや黒姫の事を褒め

て下さつたな」

四人一時に頭を掻いて、

「イヤ何滅相も御座いませぬ、つい酒に酔うて口が迂りました、どうぞ神直日大直日に見直し聞き直して下さいませ」

「お前酔うたと云ふが、何時酒を飲みたのだい」

夏彦「ハイ、酒を飲みたのは貴女と高山さまと祝言の杯をなされました時……ぢ

やかから其爲に酔が廻つてつい脱線致しました」

黒姫「馬鹿な事を云ひなさるな、酒も飲まぬに酔が廻り、管捲く奴が何處にある

ものか、それやお前達、本眞劍で云つたのだらう、サアサアウライ教はお前さ

ま達のやうな没分曉漢に居て貰へば邪魔になる、サアサア今日限り何處へなりと

行つて下さい。エイエイ、お前達の「しやつ」面を見るのも汚らはしい」

夏彦「そらさうでせう、好きな顔が目の前にちらついて来たものだから、吾々の

「しやつ」面は見るのも嫌になりましただらう」

黒姫「エ、入らぬ事を云ひなさるな、サアとつとと去んだり去んだり、ウライナイ教では暇を出され、三五教では肱鐵を食はされ、野良犬のやうに彼方にうろうる、

此方にうろうる、終には棍棒で頭の一つも撲はされて、キヤンキヤンと云うて又元のウラナイ教に尾を振つて歸つて來ねばならぬやうにならねばならぬ事は見え透いて居るわ、ウラナイ教の太元の大橋越えてまだ先に行方分らず後戻り、慢心すると其通り、白米に粉の混つたやうに、謝罪つて歸つて來ても隅の方に小さくなつて居るのを見るのが氣の毒ぢや、今の中に改心をしてこの黒姫の云ふ事を聞きなされ、黒姫は口でかう厳しく云つても、心の中は、花も實もある誠一途の情深い性來ぢや、誠生粹の水晶玉の選り抜きの日本魂の持主ぢやぞえ、サアどうぢや、確り返答しなさい、夏彦の昨夜の歌は何ぢや、目出度い時だと思つて辛抱して居れば好い氣になつて悪口たらだら、大抵の者だつたらあの時に摘み出して仕舞ふのぢやけれど、神様のお道の誠の奥を悟つた此黒姫は、心が廣いから松吹く風と聞き流して許して居たのだ、それに又もや四人の大將株が燕の親方のやうに知らぬ者の半分も知らぬ癖に何を云ふのだい。お前達に誠の神の大御心が分つて耐るものか、知らにや知らぬで黙言つて居なさい」

夏彦「ハイハイ、誠に申譯がありません、何卒今度に限り見直し聞き直して下さ

いませ

黒姫「此度に限つて許して置く、此後に於て、一口でも半口でも、高山さまや黒姫の事を云はうものなら、夫こそ叩き拂にするからさう思ひなさい、サアサア常彦、菊若、岩高愈出陣の用意だ、高山彦の御大將はもはや出陣の準備が整うたぞへ」

四人一度に、

「ハイ確に承知仕りました」

茲に黒姫、高山彦は一族郎黨を集め、旗鼓堂々と眞名井ヶ原に向つて進撃したが、加米彦、青彦の言靈に脆くも打ち破られ、蜘蛛の子を散らすが如く四方に散亂したりけり。

ウラナイ教の鍵鑰を握つて居た黒姫の部下四天王と頼みたる夏彦、岩高、菊若、常彦の閣僚は黒姫結婚以來上下の統一を缺ぎ、自然三五教に向つて其思想は暗遷黙移しつつありき。其の爲め、折角の眞名井ヶ原の攻撃も味方の四天王より故意と崩解し、黒姫が神力を籠めたる神算鬼謀の作戦計畫も殆ど畫餅に歸し終りたる

なりき。嗚呼人心を收攬せむとするの難き、到底巧言令色權謀術數等の虚偽行動をもつて左右すべからざるを知るに足る。之に反して三五教は一つの包藏もなく手段もなく、唯々至誠至實をもつて神業に奉仕し、ミロクの精神を惟神的に發揮するのみ。されば人心は期せずして三五教に集まり、日に夜に其數を増加し、何時とはなしに天下の大勢力となりぬ。ウラナイ教は廣い大八洲國に於て直接に信徒を集めたるもの唯一人もなく、唯々三五教に歸順したる未熟の信者に對し、巧言令色をもつて誘引し、且つ變性男子の系統より出でたる高姫を唯一の看板となし世を欺くのみにして、根底の弱き事、砂上に建てたる樓閣の如く、其剥脱し易き事炭團に着せたる金箔の如く、豆腐の如く、一つの要もなく唯辨に任し表面を糊塗するのみ、其説く所恰も賣藥屋の效能書の如く、名のみあつて其實なく、有名無實、有害無益の贅物とは、所謂ウラナイ教の代名詞であらうと迄取沙汰されけり。されど執拗なる高姫、黒姫は少しも屈せず……女の一心岩でも突貫く、非が邪でも邪が非でも假令太陽西天より昇る世ありとも、一旦思ひ詰めたる心の中の決心は、幾千萬度生れ代り死代り生死往來の旅を重ねるとも、いつかないつか

な摧けてならうか……との大磐石心、固まりきつた女の片意地、張合もなき次第なり。

黒姫は力と頼む青彦の三五教に歸順せし事を日夜に惜み、如何にもして再びウラナイ教の謀主たらしめむと、千思萬慮の結果、フサの國より高山彦に従ひ來れる虎若、富彦に命じ、青彦が日夜に念頭を離れざるお節を説きつけ、お節より青彦が信仰を落させむものと肝膽を碎きつつありける。

(大正一一・四・二二 舊三・二六 加藤明子録)

第九章 大逆轉〔六二〇〕

比沼の眞名井ヶ原に現はれ給ふ豊國姫の瑞の寶座に詣でたる平助親子三人は、珍の聖地を踏みしめて心も勇み、意氣揚々と歸り來る。雪積む道を苦にもせず、杖を曳きつつ漸う荒屋の門口に着きにけり。

平助「お蔭で無事に下向が出来た。サアサアお櫓、早うお湯を沸かしてくれ、足でも洗つて悠くり休まうぢやないか」

お節「イエイエ、お爺さま、妾が湯を沸かします。お婆アさま、何卒お休み下さいませ」

お櫓「イヤイヤ、お前は永らく彼の様な暗い穴の中に閉ぢ籠められて居つたのだから、火を焚いて目が悪くなるといかぬ、此婆が焚きますから、サアサア親爺どの、水を汲みて下され」

お節「お爺さま、妾が水を汲みます、何卒お休み下さい」

平助「イヤイヤお前は身體が弱つてる、此爺が汲みてやるから湯が沸く迄、マアマアゆつくりして居るがよい」

爺は撥釣瓶を覺束なげに何回も右左にブリンブリンと振り廻し漸う半分ばかり汲み上げ、汲み上げては手桶に移し又汲み上げては手桶に移し、サアサアお櫓、水が汲めた、早う沸かしてくれ、アア年が寄ると水も碌に汲

めはせないワ」

お榎「老ては子に従へと云ふ事がある、何でお節に汲ましなさらぬのぢや、それだからお前は何時も我が強いと言ふのぢや、若し腰の骨でも折つたら如何なさる、お前の難儀許りぢや無い、婆もお節も總體の難儀ぢやないか」

平助「エー八釜しう云ふない、何程年が寄つても水位は提げ【えで】かい」

と手桶に一杯盛つた水を、ヨロヨロと提げ乍ら、庭の滑石に滑つてスツテンドウと仰向にひつくり覆り、

「アイタ、ウンウン」

と呻つたきり庭の真中に打つ倒れける。お榎、お節は驚き、氣も狂亂し、爺の頭

部足部に走り寄り、

お榎「お爺さま、オーイオーイ、氣をつけなさいのう」

お節も、

「お爺さまお爺さま」

と泣き猛る。

お榎「アアア、如何しても此奴はいかぬ、サアサアお節、もう斯うなつては神様

をお願するより仕方がない、お前は三五教とやらの歌を知つてるさうぢや、何卒早く歌つて爺さまの息を吹き返して下され」

お節「ハイハイ、承知致しました、お婆さま早くお爺さまに氣を注けて下さい、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、百、千、萬」

と三四回繰返せば、平助は漸く呼吸を吹き返し、

「アア、えらい事ぢやつた、天は青く山も野も緑の色を帯び、種々の美しい花は處狭きまで咲き匂ひ、何とも云へぬ美しい大鳥小鳥は涼しい聲を出して、常世の春を歌ひ、其邊處一面の花庭、何とも云へぬ綺麗な綺麗な田圃道を進み行くと、向ふの方に何とも云へぬ立派な三重の塔が見えた。其塔は上から下まで黄金作り、それに日輪様がキラキラと輝いて何とも云へぬ爽快な思ひに充され、一時も早く其處へ行き度い様な氣がして杖を力に一生懸命に驅出すと、遠い遠い後の山より幽に聞ゆるお櫓の聲、續いて可愛らしいお節の聲がフツと耳に這入つたので、ア、折角コンナ綺麗な處に来て居るのに何故馬鹿娘が俺を呼び止めるのか、ア、情ない奴ぢや、然し乍ら久し振りで會うた娘、何時もならば頑張つて呼び止めた位に

後戻りする平助ぢやないが、あまり娘が可愛い聲で悲し相に呼ぶものだから、フツと立ち止まり聞いて居れば、誰だか知らぬが俺の年を一つ二つ三と數へ出し、終には百千萬と呼びて居る。ア、俺は見慣れぬ結構な處へ來て居るが、之はヒヨツとしたら神界を旅行してゐるのではあるまいか、まだまだ七十や、そこいらで神界へ來るのぢやない、百千萬の年を現界で苦勞せなくてはコンナ結構な處へは來られぬのぢやと思ふ刹那に氣がつけば、水だらけの庭に打つ倒れて居つたのか、ア、情ない情ない、コンナ事なら後戻りをせなかつた方が良かったに、又娑婆で一息苦勞をせにやならぬかいな

お櫛「コレコレ親爺どの、それやお前何を云ふのだい、二世も三世も先の世かけても誓うた夫婦の仲、此婆一人を娑婆に残して置いて、お前ばつかり極樂へ行つて濟むのかいなア」

平助「ア、さうだつたな、あまり結構な處でお前の事は何時の間にやら念頭を去つて居たよ、然し乍ら目をまはして夢を見て居つたのだ、夢物語を捉へてさう眞劍に怒つて貰うては困るぢや無いか、ア、お節か、何卒二人寄つて俺の身體を介

抱して寢床を敷いて休まして呉れ、何だか腰の具合が變だから
お櫛、お節は涙乍ら寢床を拵へ足の掃除もそこに平助を抱へて床に休ませ
たるが、それより平助は發熱し毎日日にち嚙言を云ひ半月ばかり經て遂に歸幽し
たりける。お櫛、お節は死骸に取り着き號泣し漸く野邊の送りも濟ませ其後二人
は日課の様に朝晝晩と三回常磐木の枝を折つては供へ水を持ち搬びて亡き人の靈
を慰めて居たり。お櫛婆アは爺に先立たれ、娘のお節を力に面白からぬ月日を送
り居たりけり。

然るにお節は平助の歸幽した頃より身體益々瘦衰へ又もや床にべつたり着き嚙
言さへ言ふ様になりければ、婆は堪まり兼ね一生懸命に眞名井ヶ原に跣參詣を初
め彼の比治山峠を登りつめると例の黒姫が白壁の様に皺苦茶顔をコテコテ塗り立
て花を欺く妙齡の照子、清子の二人と共に前方に立ち塞がり、
黒姫「これこれ、お婆さま、お前は此間此處を通つた親子三人連れの婆さまぢや
ないか。又しても又しても素盞鳴尊の惡神の教を迷信して眞名井山へ詣るのだな
お櫛「ハイハイ左様で御座います、力と頼む親爺どのは神様に詣つて歸るが早い

か庭で打ち倒けて、それが原因となり夜晝苦しみた揚句、到頭あの世の人となつて仕舞ひました、オーン、オンオンと泣き崩れる。黒姫はニヤリと笑ひ、
「さうぢやるさうぢやる、アンナ處へ俺の親切を無にして詣るものだから、瑞の靈の悪神に大切な生命をとられて仕舞うたのぢや。ようまアお前胸に手を當てて考へて見なさい、神様へ詣るのは倒けて死ぬのが目的ぢやあるまい、千年も萬年も長生して孫から曾孫、玄孫まで生みて、百年も二百年も長生出来る様に詣るのぢやないか、それに何の事ぢや、神様に詣つて歸るなりウンと、疊の上ならまだしもだが庭の眞中に糞蛙を打つ付けた様にフン伸びて、おまけに水迄被つて寂滅する様な信心が何になるかいな、それぢやから彼れ程俺が親切に止めたのぢや、土臺お前の親爺は屁の様な名でも仲々我が強いから罰は靦面ぢや。愚圖々々して居るとお前の娘まで生命をとられ、終にはお前も死んで仕舞ふぞや、メソメソと何程泣いたつて後の後悔先に立たずぢや、エーもう死んだ爺は仕方が無いとして、お前丈けなりと長生するやうに綺麗薩張と改心して、三五教の神を河へでも流し、

結構な結構なウラナイ教の誠の良の金神様をお祭りなされ、何時迄も頑張つて居るとド偉い事が出来ませ、大方お前の娘も青い顔して居つたが、今頃は三つ兒が痺瘡を病みた様にヒーヒー云うて朝から晩まで、ひしつて居るだらう」

お櫓「ハイハイ仰しやる通り爺さまと云ひ、大切の孫娘は何だか知らぬが日に日に身體は瘦る、日向に氷が溶ける様に息の音まで細つて行きます。私も親爺どのに先立たれ、力と思ふ孫娘は何時死ぬやら分らぬ様な大病に罹り、其上耳は遠くなり腰は曲り、足は碌に動きませぬ。ア、コンナ事なら親爺どのと一緒に死んだが「まし」ぢやつたと、昨夕も一人そつと墓へ参り「親爺どの、何卒私も早う呼びに來て下さい、浮世が嫌になつた、お前と一緒にあの世で暮りたいから」と一生懸命に頼みて居りましたら、死んでも正念があると見えまして、親爺の姿が墓の中からポツと現はれ「お前は女房のお櫓か、能う云うて呉れた、ソナナラ俺が之から冥途へ連れて行つてやらう」と嫌らしい顔して云ひました。私も俄に死ぬのが嫌になり「今度の今度の其今度、十年二十年三十年、百年経つた其上に迎ひに來て下され」と吃驚して倒けつ轉びつ吾家へ歸つて見れば、娘のお節が何だか

知らぬが青彦々と夢中になつて嫌らしい聲を出して居ります。親爺どのの墓では青い火に蒼い面を見せられ生命から逃げて来れば、一人の娘は熱に浮かされて青彦々と夢中になつて呻いて居る、如何して之が堪りませうかいな、アーン、アンアン、ウーン、ウンウン」
と泣き崩れ居る。

黒姫「何、お前の娘のお節が青彦々と呼びて居るか、それは偉いものぢや、お前は俺の言ふ事を聞いてウライナイ教になりなさい、そしたら娘の病氣は千に一も助かるかも知れませぬよ、お前も死に度い死に度いと云つても、サア今となれば矢張死ぬのが嫌だらう、千年も万年も長生の出来るウライナイ教の神様を信心しなさい、之から俺がお前の宅へ行つて、三五教の神様が祭つてあれば放り出し、ウライナイ教の大神様を祭つて上げよう」
お櫛「イエイエ、まだ三五教の神様は祭つて御座いませぬ、娘のお節が助けられたと云ふので信心をして居るので御座います、恰度幸ひお前さまが来て祭つて下されば娘の病氣は癒るだらうし、俺も長生が出来ませうから、一時も早く頼みま

すわいな、ウン、ウン、ウン、ウン（泣聲）

黒姫「よしよし祭つては上げるが、さう軽々しう結構な神様だから、荷物を持ち運ぶ様にはいけません、マアお節どのにも篤り云ひ聞かし、三五教を思ひ断らした其上で祭つて上げ様かい、サアサ之より早く比沼の眞名井の瑞の寶座とやらを拜みて來なさい、さうして又歸つて庭に大の字になつて……オホ、

お櫛「イエエ如何して如何して、貴女のお話を聞いた上は誰が眞名井等へ詣りませうか、あの時にも俺はお前さまの話を書いて耳を傾け改心しかけて居つたのだが、昔氣質の親爺どのなり娘のお節が聞かぬものだから仕方なしに詣りました、あの時貴女の仰しやる通りにして置けば宜かつたのに、親爺どのも取り返しならぬ下手をしたものぢやわいな、アーン、アンアン」

黒姫「サア婆さま、決心がきまつたら仕方がない、俺が特別待遇で出張してあげよう、お前は餘程型の良いお方ぢや、俺に直接來て貰うと云ふ様な事は滅多に無いぞえ」

お櫛「ハイハイ、お勿體ない、有難う御座います、お蔭様でお節の病氣も本復致

しませう、何分宜しくお頼み申しますなぶんよろ たのまを」

黒姫くろひめ「アア、生神様になると忙しいものだ、たつた一人の娘でも皆天地の神みなてんち かみの

分靈わけみたまに違ちがひはない、一視同仁いつしどうじん、至仁至愛しじんしあいの心こころを出だして助たすけて上あげようかい、サア

サア照てるさま、清きよさま、お前まへも一いつしよ緒しよに跟ついて來くるのだよ、これこれお榎ならさま、嬉うれし

いかい」

お榎なら「ハイハイ、有難ありがたう御座ございます、ソナラ之これから私わたしが御案内ごあんない致いたませう」

黒姫くろひめ「よしよし行いつてあげよう、お前まへは餘よつ程ほど幸福しあはせもの者ものぢや、もう之これで眞名井山まなゐさんを

思おもひ切きつたぢやらうな」

お榎なら「ヘイヘイ、誰たれが眞名井山まなゐさんなぞへ参まゐりますものか」

と先さきに立たつて行ゆく。黒姫くろひめはしすましたりと北叟ほくそ笑えみ乍ながら二人ふたりの娘むすめを伴ともなひ丹波村たんばむらの

婆ばばが伏屋ふせやを指さして意氣揚々いきやうやうと進すすみ行ゆく。

(大正一一・四・二二 舊三・二六 北村隆光録)

第一〇章 四百種病（六二一）

眞名井ヶ原の珍の寶座に參拜せむと、息せき切つて進み行きたるお櫛は、「ゆくり」なくもウラナイ教の鍵鑰を握れる女豪傑黒姫に説き伏せられ、「くれりと心機一變し、手の掌足の裏を覆して、スタスタと黒姫一行を伴ひ、漸く丹波村の伏屋に着きにける。

お櫛「モシモシ、ウラナイ教の大將様、此處が私の荒屋で御座います。サアサアどうぞお這入り下さいませ。嗚お疲勞でせう」

黒姫「ナニ、これしきの雪道で疲勞るやうな事で、三千世界の神界の御用が出来ますものか、ウラナイ教にはソナ弱蟲は居りませぬ、オホ、々々」

お櫛「どうぞ氣をつけてお這入り下さい、大江山の鬼落しが掘つて御座いますから、ウカウカ這入ると大變な事が出来致します。サアサア私の通る處を足をきめて通つて下され、一足でも外を歩くと、陥穽へ落ち込みますから」

黒姫「ナント用心の良い事だナア、ア、感心々々、何と云うても比沼の眞名井に

瑞の靈の惡神が現はれる世の中ぢやから、この位の注意はして置かなりますまい。サアサア、照さま、清さま、私の後を踏みて來るのだよ」

お榎「モウ大丈夫で御座います。サアサアどうぞお上り下さいませ」

黒姫「ハ、ア、平助どのはこの井戸の水を汲みて倒けたのだな。ホンニホンニ危なさうな井戸ぢや。お婆アさま、お前も随分年をとつて居るから氣を付けなされよ」

お榎「有難う御座います。娘も嘸喜ぶことで御座いませう」

お節は夢中になつて、

「青彦さま、青彦さま」

と呼んで居る。

黒姫「ドレドレ、これから神さまへ御祈念をして上げよう。それについても一つ妾の話を篤りと聞いた上の事だ。お婆アさま、聞きますかな」

お榎「有難い神さまのお話、どうぞ聞かして下さいませ」

黒姫「この娘の病氣は、全體「けつたい」な病ぢや。病氣には四百種病というて

澤山たくさんな病やまひがある。其中そのなかでも百種ひやくいろの病やまひは放ほつて置おいても癒なほる。あとの百種ひやくいろは薬くすりと醫いし者やとで全快ぜんくわいする。又またあとの百種ひやくいろは、神かみさまぢや無いなと癒なほらぬのぢや。そして、あとの百種ひやくいろは神かみさまでも醫者いしやでも薬くすりでも癒なほりはせぬ。これを四百種病しひやくしゆびやうと云いふのだ。

この娘むすめは第三番目だいさんばんめに言いうた神信心かみしんじんで無なければ到底癒たうていなほらぬ。お醫者いしやさまでも有馬ありまの湯ゆでもと云いふ怪體けつたいな粹すめな病氣びやうきぢや、青彦あをひこ々と云いふのは、大方妾おほかたわたくしの使つかつて居ゐるウラナイ教けうの宣傳使せんでんし、今いまは三五教あななひけうに呆ほうけて、この間あひだも音彦おとひことやらの後あとについてウロついて居ゐた男をとこぢや。この娘むすめが快よくなつたら青彦あをひこを養子やうしに貰もらひ、娘むすめから青彦あをひこを説ときつけて、又また舊もとのウラナイ教けうに逆戻りぎやくもとさせる神様かみさまのお仕組しぐみの病氣びやうきに違ちがひない。お婆ばアさま、これを良よく承知しやうちして居ゐて貰もらはぬと癒なほす事ことは出で来きぬぞい」

お檜なら「ハイハイ、ドンナ事ことでも生命いのちさへ助たすけて下くだされば承うけたまはります」

黒姫くろひめ「サア、これから日ひの出神様でのかみさまのお筆先ふでさきを頂いたくから聞ききなされ、このお節せつの守しゆ護神ごじんにも讀よみて聞きかして改心かいしん致いたさせねば、三五教あななひけうの惡守護神あくしゆごじんが憑ついて居をるから、追おひ出だす爲ために結構けつこうな御筆先おふでさきを聞きかして上あげよう。謹つしみて聞ききなされや」

筆先ふでさき「變性男子へんじやうなんしの系統ひつぽうの御身魂おんみたま、日ひの出での神かみの生宮いきみや、常世姫命とこよひめのみことと現あらはれて、高姫たかひめ

の肉體を藉りて、三千世界の世の初まりの、根本の根本の、身魂の因縁性來から、大先祖がどう成つて居ると云ふ事を明白に説いて聞かす筆先であるぞよ。變性男子は經の御役、誠生粹の正眞の大和魂、一分一厘違へられぬ御役であるぞよ。毛筋の横巾も變性男子の系統の肉體に憑つて書いた事は間違ひは無いぞよ。三千世界の立替大立直しの根本の結構な御筆先であるぞよ。變性女子の身魂は緯の御用であるぞよ。緯はサトクが落ちたり、絲が切れたり、色々致すから當にならぬ惡のやり方であるから、變性女子の書いた筆先も、申す事も、行状も眞實に致すでないぞよ。一つ一つ審神を致さねば、ドエライ目に會はされるぞよ。女子の御役は惡役で、氣の毒な御用であるぞよ。身魂の因縁性來で、善と思つて致す事が皆惡になるぞよ。善にも強い惡にも強い常世姫の筆先、耳を浚へて確り聞いて下されよ。毛筋も違はぬ誠一つの、生粹の大和魂の、日の出神の生宮の常世姫命の性來、金毛九尾の惡神を、一旦キユウと腹に締め込みて改心させる御役であるぞよ。それに就いても黒姫の御用、誠に結構な御役であるぞよ。龍宮の乙姫さまがお鎮まり遊ばして御座るぞよ。魔我彦には日の出神の分靈、柔道正宗が守護致

すぞよ。蝶蜋別には大廣木正宗の守護であるぞよ。此神一度筆先に出したら、何時になりても違ひは致さぬぞよ。違ふ様にあるのはその人の心が違うからだぞよ。唐と日本の戦ひが始まるぞよ。日の出神の教は日本の教であるぞよ。變性女子の教はカラの教であるぞよ。變性男子の筆先と、日の出神の筆先とをよつく調べて見て下されよ。さうしたら變性女子の因縁がすつくり判りて來て、ドンナ者でも愛想をつかして逃げて去ぬぞよ。アフォンと致さなならぬぞよ。常世姫の御魂の憑るこの肉體は、昔の昔のさる昔、またも昔のその昔、モ一つ昔の大昔から、此世の御用さす爲に、天の大神が地の底に八百萬の神に判らぬ様に隠して置かれた誠一つの結構な生身魂であるから、世界の人民が疑ふのは無理なき事であるぞよ。神の奥には奥があり、その又奥には奥があるぞよ。三千年の深い仕組であるから、人民の智慧や學では、ソウ着々と判る筈は無いぞよ。今迄の腹の中の塵埃をすつくりと吐き出して誠正眞の生粹の大和魂に成りて下さらぬと、誠のお蔭を取り外すぞよ。アフォンと致して眩暈が來るぞよ。何程變性女子が鯨になりて耐りても、誠の神には叶はぬぞよ。此の肉體は元を査せば、變性男子の生粹の身魂から生れ

て来た女豪傑、若い時分から男子女と綽名を取った、天狗の鼻の高姫であるぞよ。
今はフサの國の北山村のウラナイ教の太元の、神の誠の柱であるぞよ。此世を水晶に立直す爲に、永い間隠してありた結構な身魂であるぞよ。世界の人民よ、改心致されよ。誠程結構は無いぞよ。苦勞の花が咲くのであるぞよ。苦勞無しにお蔭を取らうと致して、變性男子の系統を抱き込みて、我身の我で遣らうと致したらスコタンを喰うぞよ。開いた口がすばまらぬ、牛の糞が天下を取るとは、今度の譬であるぞよ。神の申す事をきかずに遣つて見よれ、十萬億土の地獄の釜のドン底へ落して了ふぞよ、神界、幽界、現界の誠の救ひ主は、變性男子と日の出神の生宮とであるぞよ。女子の身魂は此世の紊れた遣り方を見せるお役、天の岩戸を閉める御苦勞なかけ替への無い身魂であるぞよ。これも身魂の因縁性來で、昔の因縁が廻つて來たのであるから、神を恨めて下さるなよ。吾身の因縁を恨みて置こうより仕方が無いぞよ。天にも地にもかけ替への無い日の出神の生宮が、三千世界の神、佛事、守護神、人民に氣をつけて置くぞよ。改心さへ出來て、この常世姫の申す事が判りたら、如何な事でも叶へてやるぞよ。病位は屁でも無いぞ

よ。魂を磨いて改心なされ。常世姫が氣をつけた上にも氣を付けるぞよ。俄信心
間に合はん。信心は正勝の時の杖に成るぞよ。一時も早く身魂の洗濯いたして、
神に縋りて下されよ。昔は神はものは言はなかつたぞよ。時節來りて良の金神世
に現はれて、三千世界の立替へ立直しを遊ばすについて、第一番に、御改心なさ
れたのが龍宮の乙姫様であるぞよ。この龍宮の乙姫様は、黒姫の肉體にお鎮まり
遊ばして、日夜に神界の御苦勞に成りて居るから、粗末に思うたら、神の氣ざわ
りに成るぞよ。高姫の肉體は元の性來が勿體なくも天の大神様の直々の分靈であ
るから、日の出神が引つ添うて、世の立替の地となつて、千騎一騎の御活動を遊
ばす御役となりたぞよ。金勝要の大神、坤金神も、一寸我が強いぞよ。早く改心
なさらぬと、神界の御用が遅れるぞよ。神界の御用が遅れると、それ丈、神も人
民も難儀を致すから、早く改心致して、變性男子と常世姫の御魂の宿りて居る日
の出神の生宮の申す事を聞いて下されよ。きかな聞くやうに致して改心させるぞ
よ。三五教は神の氣障りがあるから、神は仕組を變へて此の肉體に御用をさして
居るぞよ。神力と智慧學との力比べ、常世姫の神力が強いが、變性女子の智慧學

が強いが、神と學との力比べであるぞよ。神の道には舊道と新道と道が二筋拵へてありて、何の道へ行きよるかと思つて、神がジツと見て居れば、新道へ喜びて行きよるが仕舞にはバツタリ行當りて了つて、又もとの舊道へ復つて來ねば成らぬ様に成つて了つぞよ。大橋越えて未だ先へ、行方判らぬ後戻り、慢神すると其通り、早く改心致さぬと、青い顔してシヨゲ返り白米に朶が混つた様にして居るのを見るのが、此の常世姫が辛いから、腹が立つ程氣を付けてやるが、變性女子が我が強つて、慢神致して居るから、神ももう助けやうが無いぞよ。もう勘忍袋がきれたぞよ。それにつけては皆の者、變性女子の申すこと、一々審神を致してかからぬと、アフンと致す事が出來致すぞよ。常世姫の憑る肉體を侮りて居ると、スコタン喰う事が出來るから、クドウ申して氣をつけて置くぞよ」

と嚴の御魂の筆先の拔萃した高姫の書いた神諭を、聲高々と讀み聞かして居る。お櫛は疊に頭を擦りつけ、ブルブルと慄ひ泣きに泣いて居る。お節は發熱甚しく、益々「青彦青彦」と夢中になつて叫びはじめたり。黒姫は清子、照子の二人に向ひ、

「サアサア妾が今お筆先を拜讀いたから、今度はお前さまがウラナイ教の宣傳歌を謠ふのぢや、サアサア早う、言ひ損ひの無いやうに謠ひなされ」
二人はハイと答へて座を起ち、病に苦しむお節の枕邊に廻り、聲張上げて、

朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも ウラナイ教は世を救ふ

常世の國の常世姫 昔の神代のそのままの

大和魂の生粹で 日の出神の生宮と

現はれ出でたる高姫の 身魂にかかりて筆をとり

三千世界の梅の花 一度に開くことのよし

委曲に詳細に説き諭す たとへ大地は沈むとも

月日は西から昇るとも 日の出神の生宮が

書いた筆先言うたこと 毛筋の横巾ちがはぬぞ

違ふと思ふは其人の 心間違ひある故ぞ

昔の神代の折からに 世界のために苦勞した

高姫、黒姫、魔我彦や 高山彦や 蝶蜋別

いづの身魂と現はれて 龍宮さまの御守護で

此世の寶を掘り上げて 北山村にウライナイの

神の教の射場を建て 世界の人を教へ行く

實にも尊き神の代の 其の根本の因縁を

どこどこ迄も説き諭す 常世の姫のお筆先

昔々の神代から 隠しおいたる生身魂

日の出神の生魂で 唐も日本も悉く

悪の仕組をとり調べ 四方の國々島々に

漏れなく知らす神の道 いづの身魂の御教

變性男子の御身魂 善の身魂の生粹ぞ

變性女子の瑞身魂 悪の鏡と定まりた

善は苦勞が永けれど 悪の苦勞は短いぞ

悪あくの道みち行ゆきや歩あるきよい 善ぜんの道みち程ほど險けはしいぞ

險けはしい道みちを喜よろこびて 歩あるいて行ゆけば末すゑ遂つひに

誠まことも開ひらく神かみの國くに 廣ひろい道みちをば喜よろこびて

進すすみて行ゆけば末すゑつひに 八や夕ゆふと詰つまつて茨いばらむら

針はりに身からだ體たをひつ搔かいて 逆さか轉とん倒ぼりを皆みなうつて

チリチリ舞まひをしたとて 聞きかずに行やるならやつて見みよ

誠まことの神かみの申まをすうち 千せん騎き一いつ騎きの大おほ峠たうげ

善ぜんと悪あくとの立たて別わけの 常とこよ世よの姫ひめの生いき宮みやと

變へん性じやう女子によしをふり捨すてて 日ひの出で神かみの御おん經しぐ綸み

現あらはれ出いでたる高たか姫ひめの 日ひの出で神かみの御おん經しぐ綸み

萬まん劫ごふ末まつ代だい芳かんばしき 名なを殘のこさうと思おもふなら

ウラナイ教けうの神かみの道みち 一ひと日ひも早はやく片かた時ときも

先さきを争あらそひ歩あゆめかし 畏かしこき神かみのウラナイの

誠まこと一ひとつつの根こ本ほんの 毛け筋すぢも違ちがはぬこの教をしへ

神かみの奥おくには奥おくがある
その又また奥おくには奥おくがある

大國おほくに常立とこたち大神おほかみの
三千年さんぜんねんの御仕組おんしぐみ

隅すみから隅すみまで悟さとつたる
あの高たか姫ひめの生宮いきみやは

三千世界さんぜんせかいの寶物たからもの
廣ひろい世界せかいの人民じんみんよ

今いまぢや早はやぢやと早鐘はやがねを
撞ついて知しらする常世とこよ姫ひめ

暗やみに迷まようた身魂みたまをば
日ひの出での守護しゆごに助たすけむと

朝あさな夕ゆふなに一筋ひとすぢに
誠まことの教傳をしへつたへ行ゆく

常世とこよの姫ひめの眞心まごころは
善ぜんの鑑かがみぢや世よの鑑かがみ

誠まことの鑑かがみはここにある
身魂みたまを清きよめて出でて來きたら

三千世界さんぜんせかいが見みえすくぞ
鎮魂ちんこん歸神きしんを【せい】出だして

變性へんじやう女子によしに倣ならふより
神かみから出だしたこの鏡かがみ

一ひとつ覗のぞいて見みるがよい
三千世界さんぜんせかいの有様ありさまは

一ひと目めに見みえるこの教をしへ
ウラナイ教けうは世よを救すくふ

誠まことの道みちの神かむばしら
日ひの出神でのかみの生宮いきみやが

三千世界の太柱　　グツと握つて居る程に
世界の事は何なりと　　常世でなけりや判りやせぬ
眞名井の神が何偉い　　瑞の身魂が何怖い
怖いと云うたら吾心　　心一つのウラナイ教
心も身をも大神に　　捧げて祈れよく祈れ
祈る誠は神心　　あゝ惟神々々
身魂幸倍坐しませよ

と謠ひ了れば、お節は益々苦しみ悶え、遂にはキヤアキヤアと怪しき聲を振り絞
り、冷汗は瀧の如く流れ出で、容態は刻々に危険状態に入りける。
お櫛「モシモシ皆さま、御親切に拜みて下さいまして有難う御座いますが、お前
さまが此處へ御座つてから、お節の病氣は樂になるかと思へば、一息々々、苦し
さうに成つて来る、コラマア何うしたら宜しいのだ。オーンオーンオーン」
黒姫「コレコレお婆アさま、勿體ない事を言ひなさるな。これ程結構な日の出神

の生宮の御筆先を讀みて聞かし、結構な結構な結構な宣傳歌まで唱へて、夫れで惡うな
つて死ぬ様な事があつたら、神さまのお蔭やと思ひなされ。妾ぢやとて何うして
一刻も早う樂に仕て上げたい、生命を助けて上げたいと思へばこそ、コンナ山路
を雪踏み分けて遙々と來たのぢやないか。コンナ纖弱い妙齡の娘を二人まで連れ
て此處へ來たのも、神から言へば淺からぬ因縁ぢや。何うなるも斯うなるも神様
の思召、假令お節さまが國替なさつた處が、別に悔むにも及ばぬ、如才の無い神
さまが、結構な處へ遣つて下さつて、神界の立派な御用をさして下さるのぢや。
お前さまの達者を守り、この家を守護する守り神として下さるのぢや。勿體ない、
何を不足さうに、吠面をかわくのぢやい、何うなつても諦めが肝腎ぢやぞへ」
お榎「ハイハイ、有難う御座います。然し乍ら妾の生命を取つて、どうぞお節を
助けて下さいませ。それがお願いで御座います」
黒姫「ハテサテ判らぬ方ぢやなア。何程偉い神さまぢやとて、お前の生命とお節
さまの生命と交換が出来るものか。ソナ無茶な事を言ひなさるな」
お節の容態は益々危篤に成つて來る。黒姫は何とは無しに落ち着かぬ様子にて、

「コレコレ照さま、清さま、今日けふは神界しんかいに大變たいへんな御用ごようがある。サア歸かへりませう。コレコレお婆おばアさま心配しんぱいなさるな。氣きを確しつり持もつて居ゐなさいよ。私わしは神界しんかいの御用ごようが急せくから、今日けふはこれでお暇いとま致します」

お榎なら「モシモシお節せつは助たすかりませうか、助たすかりませうか」

黒姫くろひめ「いづれ樂らくになるわいな。屹きつ度と癒なほる、安あん心しんなされ」

お榎なら「樂らくに成なるとはあの世よへ往ゆく事ことぢやありませんか、癒なほると仰おつ有しやるのは、靈れい壇だんへ御魂みたまに成なつて直なほると云いふ謎なぞではありませんまいか」

黒姫くろひめ「ア、神界しんかいの御用ごようが忙いそしい。照てるさま、清きよさま、サアサアお出いで」

と雲くもを霞かすみと比治山ひぢやまの彼方あなたを指さしてバラバラと走はせ歸かへり行く。あとにお榎ならはワツと許ばかり泣なき伏ふしぬ。

(大正一一・四・二二 舊三・二六 東尾吉雄録)

空^{そら}ドンヨリと、灰^は色^{いろ}の雲^{くも}に包^{つつ}まれ、血^ち腥^{なま}さき風^{かぜ}吹^ふき荒^{すさ}む萱^か野^やケ原^がを、瘦^{やせ}た女^{をんな}の
一^{ひとり}人^た旅^び、三^あ五^な教^{ひけう}の宣^{せん}傳^{でん}歌^かを幽^{かす}かに歌^{うた}ひ乍^{なが}ら、心^{こころ}ほそぼそ進^{すす}み來^{きた}る。困^{こがらし}すさぶ辻^{つじ}堂^{だう}
の側^{そば}に立^{たち}寄^より眺^{なが}むれば、堂^{だう}の後^{うしろ}の戸^とを開^{ひら}き、現^{あら}はれ出^いでたる雲^{くも}突^つく許^{ばか}りの裸^{らたい}體^{たい}の
男^{をとこ}、齒^はをガチガチ言^いはせ乍^{なが}ら、
「オーお節^{せつ}か、能^よう出^でて來^きやがった。比^ひ治^ぢ山^や峠^{たうげ}で赤^ま裸^{つぱだか}になつた俺^{おれたち}達^{たち}を附^つけ込^こみ、
四^よ足^{あし}扱^{あつかひ}をしやがつた事^{こと}を覺^{おぼ}えて居^をるだらう。俺^{おれ}は其^{その}時^{とき}に癩^{しやく}に障^{さわ}り……エー谷^{たに}底^{そこ}へ
老^{ぢぢい}爺^いも婆^{ばば}アも貴^き様^{さま}も一^{いっ}緒^{しょ}に放^ほり込^こみてやらうと思^{おも}うては見^みたが、又^{また}思^{おも}ひ直^{なほ}し、神^{かみ}
様^{さま}が怖^{おそ}ろしうなつて、忍^こ耐^らへてやつた。間^まもなく肉^{にく}體^{たい}は寒^{さむ}さに凍^こえ、血^ちは動^{うご}かな
くなつて、已^やむを得^えず、厭^{いや}な冥^{めい}土^とへ出^でて來^きたのだ。貴^き様^{さま}の爲^{ため}に死^しんだのではない
が、あまり貴^き様^{さま}たち親^{おや}子^こが業^{ごう}託^{たく}を言^いやがるので、むかついた、其^{その}時^{とき}の妄^{もう}念^{ねん}が今^{いま}に
遺^{のこ}つて此^{この}通^{とほ}り、貴^き様^{さま}等^ら親^{おや}子^こ三^{さん}人^{にん}の生^{いの}命^ちを取^とつてやらうと思^{おも}ひ、五^ご人^{にん}の靈^{れい}が四^{よつ}辻^{つじ}に
待^まち伏^ふせて、お前^{まへ}達^{たち}親^{おや}子^この者^{もの}を地^ぢ獄^{じやく}へ落^おしてやらうと待^まつて居^をるのだ。サア此^{この}處^こ
へ來^きたのは運^{うん}の盡^つき、首^{くび}をひき千^ち切^ぎつて恨^{うら}みを晴^はらしてやらう」
お節^{せつ}「これはこれは皆^{みな}さま、お腹^{はら}が立^たつたでせう。併^{しか}し乍^{なが}ら頑^{ぐわん}固^こな爺^{おやぢ}の申^{まを}した事^{こと}、

決して、妾があなた方を虐待したのではありません。妾は櫛サンが負はして呉れ
いと仰有つたので負うて貰つた丈の事、どうか勘辨して下さいませ」

岩公「エーソナ勘辨が出来る様な靈なら、コンナ地獄の八丁目にブラついてる
ものかい、此處はどこぢやと思つて居る、善悪の標準も無ければ、慈悲も情も無
い、怨みと嫉みの荒野ヶ原ぢや。エーグツグツ吐すな。オイオイ皆の者、此奴を
叩き延ばせ、手足を引きむしれツ」

お節は進退惟谷まり、聲を限りに、

「どなたか来て下さいなア。どうぞ纖弱き妾をお助け下さいませ。惟神靈幸倍坐

世惟神靈幸倍坐世」

と一生懸命に念じ居る。此場に忽然と現はれた一人の色の青白い優男、いきなり
五人の裸男に向ひ、大麻を左右左に打振れば、裸男は、

「ヤア、飛ンでも無い奴が出て來やがった。オイ勘公、櫛公、岩公、鬼虎、
鬼彦に續けツ」

と一生懸命に逃げ行かむとする。一人の男五人に向ひ「ウン」と靈縛を加へたる

に、五人は足を踏ん張つた儘、化石の様になつて了ひ、目を剥き、舌を二ヨロ二ヨロと出し、涙を瀧の如く流してふるえ居る。

男「ホーあなたは丹波村のお節さまぢや有りませぬか。どうしてコンナ所へ踏ん迷うてお出でなさいました。私は三五教の青彦と申す宣傳使で御座います。大神様の命に依り、鬼ヶ城の魔神に對し、言靈戦に出かけて居る最中で御座いますが、あなたが、惟神靈幸倍坐世と仰有つた聲に曳かされ、體が引きつけられる様に、此處へ飛んで來ました。サアサ、コンナ所に居つては大變です。早く現界へお歸りなさい」

お節「あなたは噂に聞いた三五教の青彦さまで御座いますか。あなたも亦幽界へ何時お越し遊ばしたの……」

青彦「イエエ私の肉體は唯今、悦子姫様、加米彦、音彦等と共に大活動をやつて居ります。一寸肉體の休息の隙間に、和魂がやつて來たのですよ」
お節「アア左様で御座いますか。危ない所をお助け下さいまして有難う御座います。併しあの五人の裸さまを助けて上げて下さいナ」

青彦「アお節さま、感心だ、あれ丈酷い目に會ひかけて居つた亡者を、助けてやつて呉れいと仰有るのか。その心なればこそ、再び現界へ歸る事が出来すよ」
お節「あの五人の方も現界へ返して上げる譯にゆけませぬか」
青彦「あれは駄目ですよ。五人の男の本守護神は、既に立派な天人となつて昇天し、天の羽衣を身に着けて、眞名井ヶ原の豊國姫様のお側にご用をして居りますよ。彼奴はああ見えても、副守護神の鬼の靈だから、幽界でモウちつと業を曝し、瞋恚の心を消滅させねば、浮かぶ事は出来ない。併し乍ら靈縛は解いてやりませう」

青彦は五人に向ひ、聲も涼しく、

青彦「一二三四五六七八九十百千萬」

と數歌を二回繰返せば、五人の裸男は身體元の如くなり、青彦が前に犬突這となり、

五人「コレはコレは青彦様、能う助けて下さいました。結構な神歌をお聞かせ下さいまして是れで私の修羅の妄執もサラリと解けました。此後は決して決してお

節さまの肉體に祟りは致しませぬ。私も是れから結構な神となりて、神界に救はれます」

と涙を垂らして泣き入るにぞ、青彦は、

「ア、結構だ。お前達は私と一緒に祝詞を奏上しなさい」

鬼「有難う御座います。オイオイ皆の連中、青彦の宣傳使について、祝詞をあげ

ませうかい」

茲に青彦は神言を奏上し始めた。お節を始め五人の裸男は、両手を合せ、青彦

と共に神言を奏上し終るや、五人の姿は見る見る麗しき牡丹の様な花と變じ、暖

かき風に吹かれて、フワリフワリと、天上高く姿を隠したりける。

青彦「サアお節どの、あなたもお歸りなさい。又現界でお目にかかりませう」

と言葉を残し、青彦は麗しき光玉となりて、南方の天に姿を隠した。お節は今ま

で苦しかりし身體俄に爽快を覚え、えも言はれぬ音楽の響聞ゆると見る間に正氣

づき、四邊を見れば、婆アのお櫓が枕許に坐つて、お節の手をシツカと握り締め、

泣き居たりける。

お節「お婆アさまでは御座いませぬか」

お櫛「ヤアお節、氣が付いたか、嬉しい嬉しい。これと云ふも、全く神様のお蔭、ウラナイ教の黒姫といふ婆アが遣つて来て、筆先とやらを讀みて聞かし、宣傳歌とやらを唄ふが最後、お前の病氣は漸々と悪くなり、到頭締切れて了ひ、妾も氣が氣でならず、又氣を取り直し、眞名井ヶ原の豊國姫の神様、素盞鳴神様を一生懸命に念じて居ました。さうすると、段々冷たうなつて居たお前の體に温みが出て来て、青白い顔は追々に赤味を増し、細い息をしだすかと見れば、お蔭で物を言ふ様になつて呉れた。ア、有難い有難い、眞名井ヶ原に現はれませる大神様……」

と婆アは嬉し泣きに泣き入りぬ。お節は日一日と快方に向い、四五日過ぎて、炊事萬端の手傳ひを健々しく立働かるる迄になり、モウ二三日経てば、婆アさまと共に、眞名井ヶ原の寶座にお禮參詣をなさむと、親子相談の最中、門の戸を押開けて、中を覗き込む二三人の人影有り、よく見れば黒姫、夏彦、常彦の三人なりける。

黒姫「ヤアお婆アさま、何故、娘が全快したら、御禮參詣に出て來ぬのだい」
お榎「お前は黒姫ぢやないか。お節の病氣を癒してやるなぞと、偉相な頬を叩
きよつて、どうぞやつたい。長たらしい譯の分らぬ筆先とやら云ふものを勿體振
つて讀み、其上に若い娘の口から千遍歌とか、萬遍歌とかいふものを耳が痛い程
囀つて、娘は見る見る様子が悪うなるばかり、蟲の息になつて、何時死ぬか知
れぬと云ふ所を見濟まし、神界に御用が有るの何のと言つてコソコソと逃げたぢ
やないか、あまり偉相な事を言ふものぢやないワイ。矢張り、ウラナイ教の神は、
ガラクタ神の、貧乏神の、死神の、腰抜け神ぢや。モウモウ死んだつて、ウラナ
イ教を信仰するものかい。……エー工汚らはしい、病神、早う、歸りて呉れ歸り
て呉れ。折角快うなつたお節が又悪なると困る。サア早う早う、歸りたり歸りた
り」
黒姫「コレコレ婆アさま、お前ソレヤ大變な取違ぢや。妾が御祈念をしてやつた
お蔭で助かつたのぢやないか。其時にはチツと悪うても……悪うなるのが、快う
なる兆ぢや。峠を一つ越えるのにも、苦しい目をして、登り詰めたら、後は降り

坂ぢや。何時までも、蛇の生殺の様に、お節ドンを苦しめて置くのは可哀相ぢやから、此黒姫が神力で峠まで送つてやつたから、其お蔭でお節さまが危ない生命を助かつたのぢやないか。生命を助けて貰うて小言を云ふと、又罰が當らうぞい」

お榎「巧い事言ふない、ソナ瞞しを喰ふ様な婆アぢやないぞ。あんまり甘う見て貰うまいかい。若い時は鬼娘のお榎とまで言はれた、酔いも甘いも、人の心の奥底まで、一目見たら知つて居る此お榎ぢやぞえ」

黒姫「婆アさま、お前チツと逆上せて居るのぢやないかいナ。マア能う氣を落ちて着けて、妾の言ふ事を一通り聞いて下されや」

お榎「アア五月蠅いツ、聞かぬ聞かぬ。トツトと歸りて下され。…お節ウ、箒を貸し……あの婆アを掃き出してやるのだ。黒いとも、白いとも分らぬ様な面をしゃがつて、力も無い癖に、口先で誤魔化さうと思つても、ソナ事に誤魔化されるお榎婆アぢやないぞや」

黒姫「お榎さま、能う聞いて下さいや。時計が一つ潰れても、根本から直さうと思へば、一旦中の機械をスツパリ解體して了ひ、それから修繕をせねば、完全に

直るものぢやない。恰度大病になると其通りぢや。お節さまの體の中の機械を、
神様が一遍引き抜いて、更に組立てて下さつたのぢや。譯を知らぬ素人は、時計
の機械を解體するとバラバラになるものだから、其時計が以前より悪うなつた様
に思つて怒るものぢやが、一旦バラバラに爲なくては完全な修繕は出来ぬ様なも
ので、大病になるとスツカリ機械の入れ替を、神様がなさるのぢや。其時はチツ
ト容態が悪うなるのは當然ぢや。そこをお前さまが眺めて、却て悪うなつた様に
思つて居るのが根本の間違ぢや。悪うなつたお蔭で、今の様なピンピンした體に
なつたのぢや。罰の當つた………何を叱言を云ふのぢやい。ウライナイ教の神様に、
お節さまも一緒に御禮を申しなされ」
お節「黒姫さまとやら、御親切に仰有つて下さいますが、妾はどう考へても、ウ
ライナイ教は蟲が好きませぬ。ウの字を聞いても、頭が痛うなります。それよりも
三五教の青彦さまと云ふ宣傳使に、半日なりと御説教が聽かして欲しいワイナ」
黒姫「三五教の青彦と云ふ奴は、妾の弟子ぢや。彼奴は妾の片腕ぢやが、此頃三
五教へ間者となつて妾が入れておいたのぢや。青彦が偉いなら其大將の妾は尚の

事、神徳が澤山有る筈ぢや。サアサアま一遍拜みてあげよう」

お榎、お節、一時に、

「イヤイヤ一時も早う歸つて下さい」

黒姫「ハ、ハ、ハ、盲と云ふ者は仕方の無いものぢや。何程現當利益を神様がお見

せなさつても、お神徳をお神徳と思はぬ盲聾にかけたら、取り付く島も有つたも

のぢやない。……コレコレ夏彦、常彦、お前チツと言はぬかいなア。唾か何ぞの

様に、此黒姫ばかりに骨を折らして、知らぬ顔の半兵衛をきめ込むとは、何の

態ぢや。チト確りしなさらぬか」

夏彦「誰に説教をして宜いか、サツパリ見當が取れませぬワイ」

黒姫「見當が取れぬとは、ソラ何を言ふのぢや。折角お神徳を貰うた此家の娘の

お節や、お榎婆アさまを捉まへて、言向和せと云ふのぢやないか。何をグツグツ

して居なさる」

常彦「私は最前から、兩方の話を、中立地帯に身を置いて、觀望して居れば、ど

うやら黒姫さまの方が、道理が間違つとる様な氣が致しますので、お氣の毒で、

あなたに恥をかかす譯にもゆかず、沈黙を守つて居る方が、雙方の安全だと思つて扣へて居りました」

黒姫「エー二人共譯の分らぬ代物ぢやなア」

夏彦「神の裏には裏があり、奥には奥が有る位ならば、耳が蛸になる程聞いて居りますワイ。今までは何でも彼でも、あなたの仰有る通り盲従して來ましたが、今日のように民衆運動が盛んになつて來ては、今迄の様な嚴格な階級制度は駄目ですよ。今日のウラナイ教で、あなたの言ふ事を本當に信じ、本當に實行する者は、高山彦さまタツタ一人、又高山彦さまの命令に服従する者は、黒姫さまタツタ一人と云ふ今日のウラナイ教の形勢、何でも彼でも盲従して居ると、同僚の奴に馬鹿にしられますワイ。私も今日限りお暇を頂きます。……お前さまと手を切つた上は、師匠でもなければ弟子でもない。アカの他人も同様ぢや。吾々二人は、今のお言葉で、心の底から愛想が盡きました。どうぞ御免下さいませ」

黒姫「ソレヤ、夏彦、常彦、藪から棒を突出した様に、何を言ふのだい。暇を呉れなら、やらぬ事もないが、今迄の黒姫とは違ひますぞゑ。勿體なくも高山彦の

命みことの奥方おくがた、女をんなと思おもひ侮あなごつての雑言無禮ざふごんぶれい、容赦ようしやは致いたさぬぞや㊦

斯かく争あうそふ所ところへ、宣傳歌せんでんかを謠うたひ乍ながら入いり來きたるは、青彦あをひこなりける。黒姫くろひめは青彦あをひこを
見みるなり、胸倉むなぐらをグツと取とり、

「コレやお前まへは青彦あをひこぢやないか。何なんの事ことぢや。結構けつこうなウラナイ教けうを棄すてて、嘘うそで固かためた三五教あななひけうの宣傳使せんでんしになりよつて、わし達の邪魔じやまばかりして居をるぢやないか。サア改心かいしんすれば良よいし、グツグツ言いひなされると、女乍をんながらも、鍛きたへあげたる此腕このうでが承知しょうちをしませぬぞや㊦」

青彦あをひこ「アハ、ハ、ハ、ア、お前まへは黒姫くろひめさまか。老いい年としして居をつて、良いい加減かげんに我がを折をりなさつたらどうぢや。棺桶くわんけへ片足かたあし突つ込みて居をり乍ながら、千年せんねんも萬年まんねんも活いきる様やうに、何時いつまで【はしやく】のぢや。チツと年としと相談さうだんをして見みたらよからうに㊦」

夏なつ、常つね二人ふたりは拍手はくしゆして、

「ヒヤヒヤ、青彦あをひこの宣傳使せんでんし、シツカリやり給たまへ㊦」

黒姫くろひめ「コラ夏彦なつひこ、常彦つねひこ、何なんの事ことぢや。悪人あくにんの青彦あをひこに加擔かたんすると云いふ事ことがあるものか、お前まへは氣きが狂くるうたか、血迷ちまようたのか㊦」

常彦「只今迄はウラナイ教の身内の者、只今縁を断つた以上は、三五教にならうと、バラモン教にならうと、常彦の勝手ぢや。ナア夏彦、さうぢやないか」

夏彦「オウさうともさうとも、……モシモシ青彦さま、あなたも元はウラナイ教のお方ぢやつたさうですなア。私は矢張りウラナイ教ぢや。併し乍らあまり此婆アの言心行が一致せないの、誰も彼れも愛想を盡かし、晨に一人、夕に三人と、各自に後足で砂をかけて、脱退する者ばかり、私も疾うから、ウラナイ教は面白くないから、三五教になりたいと思つて、朝夕念じて居りましたが、一旦黒姫や高姫に瞞されて、一生懸命に三五教の神様の悪口を廣告れて歩いたものだから、今更鬨が高うて、三五教に兜を脱ぐ譯にも行かないし、宙ブラリで困つて居りました。どうぞ青彦さま私等二人の境遇を御推察の上、どうぞ宜しく御執り成しをお願申します」

青彦「ハア宜しい承知致しました。御安心なされ。……オイ黒姫、人の胸倉を取りよつて何の態ぢや。放さぬかい」

黒姫「寝ても起きてても、お前の事ばかり思うて居るのぢや。大事のお前を三五

教けうに取とられたと思おもへば、殘念ざんねんで殘念ざんねんで堪たまらぬワイ。常彦つねひこや夏彦なつひこのガラクタとは違ちがうて、お前まへはチツト見込みこみがあると思おもうて居をつた。今はウラナイ教けうも追々おひおひ改良かいりやうして、三あ五な教ひ以上いじやうの結構けつこうな教をしへが立たち、御神力ごしんりきも赫灼いやちこだから、どうぞや一ひとつ、元もとの巢すへ返かへつて、黒姫くろひめと一いっしょ緒いっしょに活動くわつどうする氣きはないか」

夏彦なつひこ「もしもし青彦あをひこさま、嘘うそだ嘘うそだ。改良所かいりやうじころか、日ひに日ひに改惡かいあくするばつかりだ。

此間このあひだもフサの國くにから、ゲホウの樣やうな頭あたまをした高山彦たかやまひこと云いふ男をとこが出でて來きて、黒姫くろひめの婿むこになり、天下てんかを吾物わがものがほ顔がほに振ふれ舞まふものだから、誰たれもかれも愛想あいさうをつかし、毎まい

日に日に脱退だつたい者は踵くびすを接せつすると云いふ有樣ありさま、四天王してんわうの一ひとり人と呼よばれた吾々われわれでさへも、

愛想あいさうが盡つきたのだ。黒姫くろひめの口車くちぐるまに乗のらぬ樣やうにして下ください」

黒姫くろひめ「コラ夏なつ、常つね、要いらぬ事ことを言いふない。貴樣きさまア厭いやなら厭いやで、勝手かってに退のいたら宜よい。人ひとの事ことまで構かまふ權利けんりがあるか。……サア青彦あをひこ、返答へんたふはどうぢやな。返答へんたふ聞きく

まで、假令たとへし死しんでも、此腕このうでが【むし】れても放はなしやせぬぞ」

青彦あをひこ「エー執念しつねん深い婆ばアだナア。放はなさな放はなさぬで良いいワ」

と云いふより早はやく、赤裸まつぼたかになつた。黒姫くろひめは着物きものばかりを握にぎつて、

「誰が何と云うても放すものかい。……ヤア何時の間にやら、スブ抜けを喰はしよつたナ、エーコンナ皮ばつかり掴みて居つても、なにもならぬ。忌ま忌ましい」と言ひつつ着物を大地に投げつけるを夏彦は手早く拾ひあげ、常彦、青彦諸共にお節の家に飛び込み、中からピシヤリと戸を閉め、錠を「おろし」たり。黒姫は唯一人門口に取り残され、ブツブツつぶやき乍ら、比治山の方を指してスゴスゴと歸り行く。

お榎「ヤアヤアお前さまは、青彦さまか。能う来て下さつた。こないだの晩に泊つて貰はうと思つて居つたのに、泊つて欲しい人は泊つて呉れず、厭な奴ばつかりノソノソと泊り、執念深い……死ンでからも爺ドンの生命を取りに來、又聞けば、お節の生命まで亡霊となつて狙ひよつたさうぢや。お前さまが夢に現はれて、悪魔を改心させ娘を助けて下さつた夢を見たら、其日から不思議にも、お節が段々と快くなり、婆アも、お節も、毎日毎日、青彦さま青彦さまと眞名井の神様よりも尊敬して居りました。能う来て下さつた。サアサア「むさくる」しいが、ズーツと奥へお通り下され。……その二人は黒姫の弟子ではないか、エーエー黒姫

の身内ぢやと思へば何だか氣持が悪い。二人のお方は折角乍ら、トツトと歸りて下され」

青彦「お婆アさま、私も元は黒姫の弟子になつて居りましたが、あまりの身勝手な奴だから、愛想が盡きて三五教に籍を變へ、御神徳を戴いて今は御覽の通り、宣傳使になりました。此二人は、今日只今迄、常彦、夏彦と云うて、黒姫の四天王とまで謂はれて居つた豪者だが、此二人も私の様に、愛想をつかし、今此家の門口で師弟の縁を斷り私の友達になつたのだから、さう氣強い事を言はずに、大事にしてあげて下さい」

お楯「アアさうかいナさうかいナ。それとは知らずに偉い失禮な事を申しました。……コレコレお節、何恥かしさうにして居るのぢや。早うお客さまにお茶でも汲まぬかいナ」

お節は袖に顔を包み、稍俯むき氣味になつて、
「これはこれは青彦様、能う來て下さいました」
と言つた限、俯伏になり震ひ居る。

お櫛「アーア若い者と云ふ者は、仕方の無いものぢや。……モシモシ青彦さま、
婆アの頼みぢやが、不束な娘で、お氣には入りますまいが、どうぞお節の婿にな
つて下され。これが婆アの一生の頼みぢや。……コレコレお節、お前も頼まぬか
いな」

お節「……」

常彦「ナアーンと偉いローマンスを見せて頂きました。ナア夏彦、此の間は高山
彦と黒姫のお安うない所を拜觀さして貰ひ、今日は又一層濃厚なローマンスを目
の前にブラ下げられて、……イヤもうお芽出たい事ぢや。……青彦さま、一杯奢
りなされや」

青彦「お婆アさま、私の様な破れ宣傳使に大事の娘様の婿になつてくれいと仰有
るのは、有難う御座いますが、私は今悦子姫様の御命令によりて、鬼ヶ城の言靈
戦に出陣せねばなりません。又私一量見ではゆきませぬから、悦子姫様や、音彦
さまのお許しを得て、ご返辭を致します。それ迄何卒待つて下さいませ。……か
ういふ内にも心が急けます。悦子姫様が、青彦はどこへ行つただらうと、お尋ね

遊ばして御座るに違ひない。肝腎要の場合、女の愛にひかされてコンナ所へ舞ひ戻つて来たと思はれてはなりませんから、兔も角御返辭は後に致しませう。左様なれば……御機嫌よう……お婆アさま、お節どの』

と言ひすてて門口へ急ぎ出でむとするをお櫛は、

『どうぞ、お節の事を忘れて下さるなや』

常彦 『モシモシ青彦さま、どうぞ私も鬼ヶ城へ連れて行つて下さい』

夏彦 『私も、どうぞ、お伴をさして下さい』

青彦 『悦子姫様の意見を聞かねば、何ともお答は出来かねますが、御都合が好ければ、私と一緒に参りませう』

二人 『どうぞ宜しうお頼み申す。……婆アさま、お節さま、偉いお邪魔を致しま

した。御縁が有れば又お目にかかりませう』

お櫛 『左様なら……』

お節 『御機嫌よう……』

と青彦は此家を後に、心いそいそ南を指して二人を伴ひ、韋駄天走りに走り行く。

(大正一一・四・二二 舊三・二六 松村眞澄録)

第三篇 鬼ヶ城山おにがじやうざん

第一二章 花と花はな はな〔六一二三〕

メソポタミヤの瑞穂國みづほくに 世界の樂土と聞えたるせかい らくど きこ

顯恩郷を振りすてて 自轉倒島に逃來りけんおんきやう ふ おのころじま に きた

醜の曲津の大江山 山寨を構へて神國をしこ まがつつ おほえやま とりで かま かみくに

蹂躪せむと千萬に 心を盡す鬼雲彦はじゅうりん ちよろつ こころ つく おにくもひこ

神素盞鳴の大神に 仕へまつれる鬼武彦に
逐ひ退はれて中空を 翔つて伊吹の山の邊に
雲を霞と逃げ散れど 鬼雲彦が力と頼む
剛力無雙の曲司 名も怖ろしき鬼熊別は
八岐大蛇の醜の靈に操られ 荒鷹鬼鷹諸共に
大江の山の峰つづき 鬼ヶ城にと第二の砦を構へ
時を計らひ捲土重來の 祕策を凝らし
一擧に聖地に攻め寄せて 神素盞鳴の大神や
國武彦の大神の 神政成就の經綸地
桶伏山の蓮華臺 續いて四尾の神山を
力限りに占領せむと 心を碎くぞ果無けれ。

三五教の宣傳使、悦子姫は音彦、加米彦を伴ひ眞名井ヶ原を後にして三獄山に
差かかる。時しもあれや谷川に、血に塗れたる衣を濯ぐ一人の美人、三人の姿を

眺めて呆れ顔、

音彦「モシモシ悦子姫様、此深山幽谷に見らるる如き妙齡の美人唯一人、血に塗

れたる衣を洗ひ、吾々の姿を眺めて何か思案顔、これには深き様子のある事で御

座いませう。一つあの女を引捉まへて詰問して見ませうか」

悦子姫「何を云うても人里離れし此谷川、合點の行かぬ事である。貴方御苦勞だ

が柔なしくあの女に聞いて見て下さい」

音彦「承知致しました、加米彦、お前は悦子姫様と此處に待つて居て呉れ、俺は

此谷川を渡つて怪しの女に一つ質問をやつて見る、大抵この山の様子も分らうか

ら」

と云ふより早く裾をからげ谷川を向岸へ渡つた。

音彦「コレヤコレヤ、人里離れしこの深山幽谷に浦若き女の一人、血に塗れたる

衣服を洗濯致し居るは如何なる理由あつてか、定めて此邊には悪神の巢窟があつ

て、人を取り喰うと察せらるる、サア【つぶさ】に委細を物語れよ」

女は涙をはらはらと流しながら、

「ハイ私は都の女で御座います、大江山の鬼雲彦が一味の悪神、荒鷹、鬼鷹の兩人が、眞名井ヶ原の神様へ二人の僕を従へ参詣の途中、言葉巧に計略をもつて妾主従を連れ来り、二人の下僕は種々と苦役を命ぜられ、身體疲勞の結果、もはや手足も動けなくなりまして、苦しみ悶える所を、慈悲も情も荒鷹鬼鷹の兩人の指揮の下に、寄つて集つて二人の下僕を戮殺し、手足をもぎ取り、眞裸となし土中に埋めましたさうです。さうして妾は情ない荒鷹、鬼鷹兩人に虐げられ、あるにあらぬ悲しい月日を送つて居ります。今日は幸ひ兩人鬼ヶ城の鬼熊別が大將の許に召されて参りました。後には四五の下僕共、二人の留守を幸ひお酒を吞ませ酔はして置いて、下僕二人が着衣を探し求め、此谷水に洗ひ清め天日に乾し、これを夜具に造り替へて、せめては下僕の遺物と彼が菩提を弔うため、妾が肌身につけ其靈を慰めやらむと今此處に、隙を窺ひ洗濯に参りました」と、ワツと許りに泣き入りぬ。音彦は兩手を組み太息を吐きながら、
「嗚呼飽迄も惡逆無道の大自在天、バラモン教の奴輩の慘虐さ」と音彦は涙を腮邊にハラハラと流し、默念としてうつむき居る。

女「貴方様は何れの方かは存じませぬが、一寸お見受け申せば力の強さうな御姿、美しき御婦人を連れて何れへお越し遊ばしますか。此三獄山は、大江山の峰續き、鬼ヶ城との中心點に聳立つ、恐ろしき魔の山で御座います。これから先には澤山の魔神が棲みて居りますれば、これより先は劍呑千萬、どうぞ此場よりお引き返し下さいませ、又妾の如き憂目にお遇ひなされてはお氣の毒で御座います」

音彦「オ、お女中、御親切に能く云うて下さいました。併しながら吾々は、人を助ける神の取次、如何なる悪魔も言向け和さねばならぬ神界の使命を帯びて参つたもの、假令如何なる鬼大蛇、魔神の襲來致すとも、一歩たりとも退却致す事は出来ませぬ。どうぞ荒鷹、鬼鷹の住家へ御案内下さいませ」

女「左様では御座いませうが貴方等は一行三人、一方は數限りのない悪魔の集團、何程貴方が英雄豪傑でも多數と少數、勝敗の數は戦はずして分つて居ります。サアサアどうぞ早くお歸り遊ばせ」

音彦「御親切に有難う御座います。併しながら先刻承はれば貴方は都の女と仰せ

られましたが、何と云ふお方で御座います」

女「ハイ、名を聞かれては恥かしく御座いますが、妾は紫姫と申す不恙な女で御座います」

谷川の向より加米彦、大きな聲で、

「オーイオーイ、音彦、美人を捉へて何を愚圖々々云つて居るのだ。吾々を待たして置いて密約締結でもやつて居るのか、ソナ陽気な場合ぢやないぞ、コンナ谷底でいちやつく奴があるか、好い加減に談判を切り上げて敵情を大本營に報告しないか、悦子姫女王様が顔色を變へて御機嫌斜なりだ。アハ、ハ、ハ、」

悦子姫は聞き咎め、

「これこれ加米彦さま、悦子姫の御機嫌斜なりとは何を仰有る」

加米彦「アア濟みませぬ、私の言葉は意味深長に聞えたでせう、どうぞ見直し直して下さいませ、時の興に乗じつゝ洒落氣になつて音彦に擲掬て見たのですよ。谷川の此方には花を斯く悦子姫様、そして加米彦の配合、川の對岸には妙齡のナイス、音彦の大丈夫、谷を隔てて一對の若夫婦然とした此光景、繪にあるやうな

スタイルぢやありませんか。樹木の間に雪はチラチラと残り、淙々たる溪流は琴を弾じ、幽邃閑雅の深谷川、上手な畫工にでも寫生させたら随分立派なものが出来ませう、アハ、ハ、ハ、ハ、

悦子姫「加米彦さま、此處は最も危険區域ですよ、些と緊張しなさらぬか」

加米彦「柔能く剛を制す、剛中柔あり柔中剛あり、敵地に臨んで悠悠閑々綽々として餘裕を存するは、ヒーロー豪傑の心事で御座る、アハ、ハ、ハ、ハ、」

川向ふより音彦、

「オーイオーイ加米彦、悦子姫様のお伴をして此地へ渡つて来い、耳よりの話がある」

加米彦「ヨシヨシ、悦子姫さま、サア参りませう、此深い谷川、貴方は御婦人の身、お困りでせう、何なら加米彦の背に被負つて下さい」

悦子姫「御親切に有難う御座います、併し乍ら加米彦さま、自分の事は自分で處置をつけねばならぬぢやありませんか、神様の教には必ず人を杖につくなと御座います」

加米彦「其お言葉は尤もながら何だか案じられてなりませぬ、然らばお手を取つて上げませう、サア参りませう」

と裾をからげ、谷川に下りたちぬ。

悦子姫「加米彦さま、妾が貴方の手を引いて上げませう、大變な危険な激流で御座いますから」

と互に友の危難を氣遣ふ殊勝さ。

加米彦「アア有難い有難い、この谷川が無くば悦子姫様と握手したり提携したりすると云ふ事は出来ない、南無谷川大明神」

悦子姫「ホ、ホ、ホ、冗談も好い加減になされませ」

加米彦「冗談から暇が出る、瓢箪から駒が出る、三獄山から古今無雙のナイスが現はれる、大江山から鬼が出る、鬼ヶ城から大蛇が出る、私の口から涎が出る、餘り嬉しうて涙が出る、アハ、ハ、ハ」

悦子姫「ホ、ホ、ホ、これこれ加米彦さま確りしなさらぬか、辻つたら大變ぢやありませぬか」

加米彦かめひこ 迂すべつても轉ころげてても構かまひますものか、貴女あなたと私わたしと此谷川このたにがはで悦よろこびて轉ころこんで寝轉ねころんで迂すべり込こんで心中しんぢゆうしたら一寸乙ちよつとおつでせう、美男びなんと美人びじんの心中しんぢゆう物語ものがたり、いつの世よにか稗田ひえだの阿禮あれいの二代目にだいめが現あらはれて、靈界れいかい物語ものがたりに此口このローマンスを針小棒大しんせつぼうだいに書かき立たて、名なを竹帛ちくはくに垂たれ末代まつだいの語かたり草ぐさにして呉くれるかも知しれませぬよ、アハ、ハ、ハ、ハ、

悦子姫よしこひめ 加米彦かめひこさま、何どうやらお蔭かげで無難ぶなんに渡わたつて來きました」

加米彦かめひこ ア、割わりとは狭せまい川かはだ、貴女あなたと一緒いっしょに握手あくしゆ提携ていけいして歩あるくなら、假令たとへ河幅かははばが三里さんりあつても五里ごりあつても、少すこしも、遠とほいとは思おもひませぬワ」

悦子姫よしこひめ ホ、ハ、ハ、ハ、加米かめさま、好よい加減かげんに惚氣のろけて置おきなさい」

とポンと叩たたく。加米かめ、首くびをすくめ目めを細ほそうし、舌したを一寸ちよつと出して、

「ヤア占しめた占しめた、お出いでたな、もつともつと叩たたいて下くださいな」

悦子姫よしこひめ ア、加米かめさまの好すかぬたらしいお方かた、ホ、ハ、ハ、ハ、

音彦おとひこ オーイオーイ、加米彦かめひこ、何なんだか知しらぬが御機嫌斜ごきげんななめならずだなア、要領えうりやうを得え

たのか、密約みつやくは成立せいりつしたか」

悦子姫よしこひめ ホ、ハ、ハ、ハ、

加米彦「何、條約不成立不得要領だ」

音彦「不得要領の中に要領を得るのが戦術家の智略だ、アハ、ハ、ハ」

紫姫「ホ、ハ、ハ、貴方等は氣樂なお方ですなえ、最前からの皆様のお話で私の心の憂愁も何處へやら煙散霧消して仕舞ひましたワ」

悦子姫、加米彦は漸く二人の前に辿り着きぬ。

音彦「モシモシ悦子姫様、此お方は紫姫と云つて都の方ぢやさうです、二人の下僕を従へ眞名井ヶ原へ參詣の途中、荒鷹、鬼鷹兩人に誘拐され、二人の下僕が騷殺しに遇はされたさうです、氣の毒ぢやありませんか」

悦子姫「……………」

加米彦「ナニ、二人の下僕が騷殺しに遇つたと、ヨシ俺にも考へがある、サア音彦、其荒鷹鬼鷹と云ふ奴、これから一つ鬼ヶ城を征伐の門出の血祭にしようではないか、モシモシ紫姫様、長らくお目に懸りませぬ、御機嫌宜敷う、誠に御無沙汰を致しまして」

紫姫「貴方は何方で御座いましたか、記憶に浮かびませぬ」

加米彦「ア、さうでした、初めてお目にぶら下つたのですよ、私の若い時のスヰートハートしたナイスに、何處やら能く似まして御座るものだから、つい考へ違ひを致しました、アハ、ハ、ハ、ハ、」

音彦「ワハ、ハ、ハ、ハ、」

紫姫「ホ、ハ、ハ、ハ、」

紫姫、初めてニタリと笑ふ。

音彦「紫姫さま、貴女の囚はれて居る巖窟に案内して下さい、これから行つて悪神の奴、片つ端から粉碎して呉れませう、ヤア面白い面白い、腕が鳴つて耐らないワ、この握り拳のやり所が無い、サア早く案内して下さいナ」

紫姫「ヤアそれはお見合せ遊ばせ、大變で御座いますよ、ならう事なら妾も一緒に連れて逃げて下さいませぬか」

加米彦「エ、氣の弱い事を仰有るな、吾々は神素盞鳴大神の御守護がある、必ず御心配なさいますな、サア案内して下さい、悦子姫さま、音彦殿、サア往きませう」

紫姫むらさきひめ「左様さやうなら妾わらはが御案内ごあんない致いたします、荆棘けいきよくしげ茂なる難路なんろで御座ございます、残のこの雪ゆきも溜たまつて居をりますれば足許あしもとに氣きをつけて下くださいや」
と先さきに立たつ。一行いっかうは雪ゆきの坂道さかみち辿たどつて紫姫むらさきひめの後あとについて行ゆく。紫姫むらさきひめに導みちびかれ二三丁にさんちやう羊腸やうちやうの小道こみちを辿たどり行ゆく。前方ぜんぱうに見上みあぐる許ばかりの大岩石だいがんせき廣ひろく左右さいうに二三丁にさんちやう許ばかり展開てんかいし居あたり。

紫姫むらさきひめは中央まんなかの岩石がんせきを指さし、

「皆様みなさま、あの巖いはほの下したに巨大きよだいなる穴あなが開あいて居をります、今日けふは荒鷹あらたか、鬼鷹おにたかの大將株たいしやうかぶは鬼ヶ城おにがじやうに参まゐりまして不在ふざいで御座ございます。四五人しごにんの小鬼こおにとも共ともは皆酒みなさけに酔よひ潰つぶれて寝やすみて居をりますから大丈夫だいぢやうぶ、御安心ごあんしんして下くださいませ」

加米彦かめひこ「ヤア思惑おもわくとは洒落しやれた事ことを惡神あくがみの奴やつやつて居をる哩わい、山やま又また山やまに包つつまれたこの高山かうざんの幽谷いゆうこく、難攻不落なんこうふらくの金城鐵壁きんじやうてつぺきとは此事このことだ。遠さすは惡神あくがみだけあつて好よい地利ちりを選えらんだものだ。一卒道いっそつみちに當あたれば萬軍進ばんぐんすすむ能あたはずと云いふ要害堅固えうがいけんこの絶所ぜつしよだなア」
と首くびを傾かたむけ呆あきれて舌したを捲まいて居ある。

音彦おとひこ「よく感心かんしんする男をとこだなア、加米かめさま氣きに入いつたかな」

加米彦かめひこ 氣きに入るいの入いらないのつて、いやもうずっと氣きに入りいました、風景ふうけいと云いひ要害えうがいと云いひ天下てんかの珍ちんだ、サアサア往いきませう、巖窟がんくつの探險たんけんも退屈たいくつざましに面白おもしろからう」

と先さきに立たつて走はしり出だすを、紫姫むらさきひめは手てを舉あげて、

「モシモシ貴方あなた、妾わらはが御案内ごあんない致いたませう、其處そこには深ふかい深ふかい陷おとしあな穽なが御座ございます、滅多めつた矢鱈やたらにお出いでなさつては劍呑けんのんで御座ございますから」

加米彦かめひこは耳みみにもかけず巖窟がんくつ目蒐めがけて一目散いちもくさんに驅出かけだしたるが、忽たちまちドサツと音おとして陷穽おとしあなに落おち込こみにける。

紫姫むらさきひめ「ア、大變たいへん大變たいへん、皆様みなさまどうぞ助たすけて上あげて下くださいませ」

音彦おとひこ「慌者あわてものだなア、仕方しかたが無ない」

と走はしり行ゆかむとするを紫姫むらさきひめは、

「モシモシ慌あわてて下くださるな、澤山たくさんの陷穽おとしあな、妾わらはが御案内ごあんない致いたします、後あとからついで來きて下ください」

音彦おとひこ「ア、さうかなア、何處どこまで迄ちういも注意周到しうたうなものだ、ソナラ先頭せんとうを頼たのみませう、

悦子姫様、失禮ながらお先に参ります、私の足跡を踏みて来て下さい、危険ですから

悦子姫「ハイ有難う」

加米彦は二三丈もある深い陷穽に落ち込みしが、幸ひ少しの怪我もなく井戸の底に突立ちながら、

「ヤア悪神の奴、エライ事をしよつた。紫姫とやら、彼奴は鬼熊別一味の奴に相違ない、愚圖々々して居ると悦子姫さまも音彦も同じやうに、空中滑走井底着陸とやられるか知れやしないぞ、かうして井底に佇立して居る頭の上から岩石でも落されやうものなら、それこそお耐り小坊子が無いワイ、嗚呼縮尻たりな縮尻たりな、三五教は穴が無くて安心だが、今の世の中は【どこ】も【か】も穴だらけだ。穴怖ろしの娑婆世界」

と呟き居たりしが、足許の水溜りにパツと寫つた悦子姫の顔、加米彦「ヤア又出やがつたな、彼の谷川を渡る時、悦子姫さまに擲掬つたものだから、紫姫の奴、加米彦は悦子姫に現を抜かしてゐると早合點しよつて、井の底

に姫の顔を現はしよつたのだな、どつこい其手は喰はぬぞ、總て惡神は色をもつて、男子を死地に陥入ると聞く、オイ化物、悦子姫の姿を見せた處で其手に乗るものかい、道心堅固の三五教の加米彦だ、馬鹿にするない」

頭上から悦子姫は、

「モシモシ加米彦さま大變なお危ない事で御座いました。お怪我は御座いませぬか」

加米彦「ヤア悦子姫さまか、ようマア無事で陥穽へもはまらないで居て下さつた。音彦さまはどうなりました。御無事ですかなア」

悦子姫「ハイ有難う、此處に紫姫さまと來て居られます、貴方をお助けしやうと思つて綱を編みて居るところで御座います、暫くお待ち下さいませ」

加米彦「ヤア有難う、神の救ひの御綱、此神は此人と思つて綱をかけたなら放さぬぞよと云ふ御神勅の實現だナア。ア、惟神靈幸倍坐世」

音彦、紫姫の二人は手早く繩梯子を編み、吊り下ろせば、加米彦は、
「ヤア有難い」

と手を合しめる。

音彦「サア加米彦さま、この綱に確り掴まつた。三人が力を合して釣り上げませ

う、一二三

と三人一度に手繰り上げたり。

加米彦「ア、有難う、お蔭で命が助かりました。井戸い目に遇うところだつた、

ア、ハ、ハ、

紫姫「加米様とやら、お怪我が無くてお目出度う御座います。サアこれから巖窟

に参りませう」

と先に立ち細い穴を潜り入る。一行も續いて巖窟に姿を隠しける。

（大正一一・四・二三 舊三・二七 加藤明子録）

第一三章 紫姫（六二四）

細い暗い穴を腰を屈めて二三十間進んで行くと、其處に明りのさした稍廣き隧道が前方に貫通し居たり。

紫姫「サア之から天井も高う御座います、何卒お腰を伸ばしてお歩き下さいませ、此巖窟は長さ三丁許り縦横十文字に隧道が穿たれ、處々に四角い岩窟の室が御座います。荒鷹、鬼鷹の居ります場所は特に廣く築いてあります」

加米彦「ヤア益々鬼の奴、洒落た事をやつて居よる哩、鬼ヶ城へ行つて不在中で安心な様なものだが、若しひよつと愚圖々々して居ると中途に歸つて來よつて、あの細い入口をピツタリ塞ぎよるか但は青松葉でも熏べられたら、それこそ大變だ、良い加減に探險したら斯様な危険地帯は退却するに限る、ナア音彦さま」

音彦「さうだなア、一方口を塞がれては袋の鼠も同然だ」

紫姫「イエイエ御心配下さいませ、二ヶ所も三ヶ所も非常口が開いて居ます、妾は能く承知して居りますから御安心して下さい」

加米彦「ア、さうですか、それなら安心だ」

と紫姫の後につき大手を振つて大股にフン張り行く。

加米彦かめひこ「ヤア小鬼共こおにどもが澤山たくさん寝て居あよるワ。オイオイ、小鬼こおにの奴やつこ、起きぬかい、三あな五教なひけうの宣傳使せんでんし悦子姫よしこひめ一行いつかうの御臨檢ごりんけんだ、サアサア之これから簡閱點呼かんえつてんこの始はじまり」

五六人ごろくにんの男吃驚をとこびつくりして起き上あがり、

「何方どなたさまか知りませぬが生憎あいにく御大將おんたいしやうは御不在ごふざい、一向いつかうお構かまひ出来できませぬ、何卒なにとぞ悠々ゆるゆるとお休やすみ下くださいませ」

加米彦かめひこ「休やすめと云いはいでも休やすみてやる、然しかし乍ながら貴様達きさまたちは何なんの爲ために留守番るすばんを致いたして居をるのぢや、鬼おにの上前うはまへを越こす音彦おとひこや、加米彦かめひこがソノソノと奥深おくふかく進しん入にふし、此岩このいは窟やは最早もはや陷落かんらくより外ほかに道みちなき悲境ひきやうに立たち到いたつて居をるのに、大將たいしやうの留守るすを窺うかがひ、秘ひざ藏うの酒さけに喰くらひ酔よひ、鱧ふかの様やうに愚助ぐうすけ八兵衛はちべゑと前後ぜんごも知しらず寝ねて居をるとは不届ふとどき至極しごくな代物しろものだ、サア此この加米彦かめひこが目めに留とまつた以上いじやうは容赦ようしやは致いたさぬ、鬼鷹おにたか、荒鷹あらたかの兩人りやうにんになり代かはり、今日こんにち只今ただいまより暇ひまを遣つかはず、何いづれへなりと勝手かかってに出でて行ゆけ」

小鬼こおに「オイ丹州たんしう、金州きんしう、源州げんしう、遠州ゑんしう、播州ばんしう、大變たいへんだぞ、只今ただいま限り免職めんしよくだとえ」

丹州たんしう「それだから酒さけは飲のむな、酒さけを飲のんだら縮尻しくじると何時いつも云いうとるのだ、俺おれもウラナイ教けうの黒姫くろひめの兒分こぶんになつて二三年にさんねん随ついて廻まはつて居をつたが、三五教あななひけうには随分ずぶん

偉い豪傑が居つて神變不思議の術を使ひ、ドンナ處へでも生命構はずに出て來ると云ふ事を云つて居つたが、本當に油斷のならぬ三五教ぢや、三五教は穴が無いのでコンナ鬼の穴まで探して取りに來るのだらうなア」

加米彦「コレコレ丹州とやら、何を申す、神妙に此方の申す通り退却致さぬか」

丹州「お前は三五教の宣傳使ぢやないか、ドンナ惡神でも惡人でも鬼でも餓鬼でも蟲族までも助けると云ふお役だらう、假令吾々は鬼の乾兒になつて居つても、

元は天地の大神様の結構な御分靈、指一本でも觸へるなら觸へて見なさい、天則違反の大罪で根の國、底の國へ眞逆様に落されますぞえ」

加米彦「アハ、ハ、ハ、此奴、仲々理屈を云ひよる哩、オイ丹州、貴様は何處の出生ぢや」

丹州「俺かい、俺は云はいても定つた事ぢや、國の生れだよ」

加米彦「國と云つても澤山あるぢやないか、何處の國だ」

丹州「エー、頭腦の悪い男だなア、ソンナ事で宣傳使が勤まるか、丹波の國に居て國の生れと云へば丹波に定つて居るではないか」

た處で、三五教獨特の神靈發射によつて忽ち消滅さしてやるのだ、一時も早く攻め寄せて來ないかいなア、ア、待ち遠しいワイ」

丹州「アハ、ハ、ハ、力は何うだか知らぬが随分吹きまますな」

加米彦「きまつた事だよ、二百十日と綽名を取つた加米彦だ、まごまごして居る

と、俺の鼻息で貴様等の木端鬼共を中天へ捲き上げるぞ」

丹州「實の處私は眞名井ヶ原に現れました玉彦と申すもの、あまり惡神が跋扈す

るので豊國姫様の御命令を受け、小鬼と身を糞し、此岩窟に紛れ込み惡魔の状勢

を探つて居たもので御座いますよ、紫姫様のお伴になつた二人の僕は、私の計企

で或處に大切に於いて隠して置きました、やがてお目に掛けませう」

紫姫「ホー、其方は何と仰有る、あの僕を隠して置いたとな、ソナナ何故二人

の着物は血塗泥になつて居つたのですか、其理由を聞かして下さい」

丹州「アハ、ハ、ハ、それは此丹州が計企に依つて猪を獲つた其血で着物を染め、

荒鷹、鬼鷹の大將に「此通り勦殺しに致しました」と云つて見せたのだ、お疑ひ

とあらば今お目に掛けませう」

紫姫むらさきひめ 「何卒なにとぞ一時いちじも早くはや會あはして下ください」

丹州たんしゅう 「オイ、皆みなの奴やつ、何時いつも俺わしが云いうて聞きかしてある通とほり、何なにも彼かも、服從ふくじゆうするだらうなア」

甲乙丙丁かふおつへいてい、一度いちどに頭かしらを下さげ、

「ハイハイ、承知しょうち致いたしました」

丹州たんしゅう 「ヨシヨシ、それでこそ俺おれの家來けらいだ、サア金州きんしゅう、遠州ゑんしゅうの兩人りやうにん、二人ふたりをこれへ連れて來こい」

「畏かしこまりました」

と金きん、遠ゑんの二人ふたりは急いそいで岩窟がんくつの彼方あなたに姿すがたを隠かくしたるが、暫時しばらくありて二人ふたりの男をとこを伴ともなひ來きたり、

「サア親方おやかた、二人ふたりのお客きやくさまを御案内ごあんないして参まゐりました」

紫姫むらさきひめ 「ヤアお前まへは鹿しかに馬うま、能ようマア無事ぶじに居ゐて下くださつたナア」

鹿しか、馬うま一度いちどに兩手りやうてをつき嬉うれし涙なみだに暮くれて居ゐる。

悦子姫よしこひめ 「コレコレ丹州たんしゅう様とやら、其方そなたは一目見ひとめみた時ときから變かはつたお方かたぢやと思おもつて

居ましたが、豊國姫の神様の御命令で御越しになつたとは、それは眞實で御座いますか」

丹州「ハイハイ、眞實も眞實、ずっと正眞正銘の眞實で御座います」

加米彦「悦子姫さま、音彦さま、何だか勢込んで岩窟の探險と出て来るは来たもの、暗がりで屁を踏んだ様な話ですな。もうコンナ處は張合がないから何處か抜け道を教へて貰つて、崎嶇たる山道を跋涉し鬼ヶ城へ向つたら何うでせう、三五教には退却の二字は無いから元來た道に引き返す事もならず、何處の抜け穴でも見付かつたら脱出するのですなア」

丹州「此岩窟には三ヶ所も抜け穴があります、一方は鬼ヶ城へ行く道、一方は大江山へ行く道、一方は谷へ水を汲みに行く抜け穴、何方へ御案内を致しませうか」

加米彦「同じ事なら鬼ヶ城の方へ案内して下さい」

丹州「承知致しました」

と先に立ちドンと突き當つた岩石を片手でグイと押す途端にガラリと開いた。見れば三嶽の山頂、四方八方見晴らしのよき場所なりける。

加米彦「サアもう大丈夫だ、皆さま此風景を眺めて一休み致しませうか、紫姫さまも如何です、一緒にお伴致しませう、此様な岩窟に何時迄も蟄居して居ても何の樂しみもありませんまい、貴女のお好きな音彦さまと、ね……」

紫姫「ホ、ホ、ホ、」

と袖で顔を隠し俯向く。

一同は山上の風景佳き處に腰打ち下ろし四方を眺め雑談に耽る。折しも西南の天に當り一塊の黒雲現はれ、見る見る擴大して満天墨を流せし如く四方暗黒に包まれ咫尺を辨ぜざるに立ち至りぬ。身をきる許りの寒風、岩石を飛ばし、樹木も倒れよと許り吹きつけ來る。金州、源州、遠州、播州の四人は「アツ」と云つたきり風に吹き捲くられて暗の谷底へ姿を隠したり。

音彦「ヤア大變な事になつて來たワイ、八岐の大蛇が襲來し相な形勢が現はれたぞ。紫姫さま、私が手を握つてあげませう、愚圖々々して居ると吹き散らされて了ひますよ。ヤ、加米彦、お前は悦子姫さまの保護の任に當れ、丹州、お前は御苦勞だが一人で隨いて來て呉れ」

丹州たんしゅう「ハイハイ、委細承知致あさいしようちいたしました、然しかし乍ながら、もう暫時しばらく此處ここに休息きつそくしなさつ

たら如何どうです、之これから先さきは大變たいへんな斷崖絶壁だんがいぜつべき、暗くらがりに踏ふみ外はうしたら大變たいへんです」

加米彦かめひこ「何なに、構かまうものかい、何どうなるも斯こうなるも神様かみさまの思召おほしめしだ。之こればかりの風かぜ

に屁へ古垂こたれて宣傳使せんでんしが勤つとまるか」

丹州たんしゅう「偉えらい馬力ばりきですな、然しかし足許あしもとが分わかりますか」

加米彦かめひこ「それや一寸ちよつと分わからないよ、足あしに目めが無ないからなア」

黒雲くろくもは左右さいうに別わかれて又またツと現あらはれた巨大きよだいの龍體りゆうたい、中央ちゅうあうに半身はんしんを現あらはし大口おほぐちを開ひら

き五人ごにんの頭上づじやうにブラ下さがり、一丈いちぢやうばかりの紅あかい舌したを出だして舐なめかかる。

加米彦かめひこ「ヤア、やりよつたな、面白おもしろい面白おもしろい、オイ八岐やまたの大蛇をろち、貴様きさまの十八番じふはちばんは

それ位くらゐなものか、それ位くらゐの事ことで吾々われわれ観客くわんきゃくは「やんや」と云いはないぞ、もちつと變かは

つた放はなれ業わざをやらないか、一ひとふたふたみよいいつむむゆななやここのたりもちよろつつ」

と言こと靈たまの發射はつしやに大蛇をろちの姿すがたはおひおひ縮小しゆくせうし遂つひには雲くもに全身ぜんしんを没ぼつし終をはりける。

加米彦かめひこ「アハ、ハ、ハ、加米彦かめひこさまの言靈ことたまの發射はつしやは見事みごとなものだ、ナア音彦おとひこさま、

此神このしん力りきには流石さすがの悦子よしこ姫ひめさまも御感服遊ごかんぷくあそばすだらう」

悦子姫「ホ、ホ、ホ、加米サン、何故折角出て来た大蛇を去なして了つたの、捕擒に出来なかつたの」

加米彦「エ、荷物が多いのにあの様な嵩の高い、不恰好の奴を荷物にした處が棒にもならず、杖にもならず、帯には短し襷にや長し、邪魔になるから助けてやりました。アハ、アハ、東西々々、只今の藝當お目に留まりますれば次なる藝當お目に掛けます」

音彦「アハ、アハ、陽氣な男だな、序にモ一つ立派な手品を見せて貰はうかい」
加米彦「八釜しう云ふない、今大蛇の奴が樂屋で厚化粧の最中だ、暫らく待つて下さい、今度は素敵滅法界の代物をお目にぶら下げます」

風はピタリと止み、満天の黒雲はさらりと霽渡り、日光は晃々と輝き始めたり。
加米彦「サアサア天の岩戸開きと御座い、皆さまお目に留まりますれば拍手喝采の代りに天津祝詞を奏上して下さい」

茲に悦子姫、音彦、加米彦、紫姫、丹州、鹿公、馬公の一同は、西天に向ひ兩手を合せ天津祝詞を奏上し宣傳歌を謠ひ終つて、一行潔く南を指して山傳ひ、雲

表べうに聳そびゆる鬼ヶ城おにがじやうを目め蒐がけて進すすみ行ゆく。

（大正一一・四・二三 舊三・二七 北村隆光録）

第一四章 空谷くうこくの足音そくいん〔六二五〕

頃ころしも二月にぐわつじふごにち十五日

東あづまの空そらを輝かがやかし

山やまの端は出いづる月影つきかげに

三あななひけう五せん教でんの宣せん傳でん使し

色いろ青あを彦ひこの神かむつかさ司は

夏なつひこ彦つねひこ常と彦もなひて

鬼ヶ城おにがじやうざん山に立たて籠こもる

八やまた岐た大を蛇ろちの分わけ靈みたま

鬼熊おにくま別わけの一いち類るあを

言こと向むけ和やはし皇すめ神かみの

惠めぐみの露つゆに救すくはむと

比ひ沼ぬの眞ま名な井みを後あとにして

谷間たにまの雪ゆきをみたけ山やま

川かはを飛とび越こえ山やまの尾をわたり

立出でたまふ悦子姫

音彦、加米彦三人が

あとを尋ねて走り来る

見渡す限り山と山

日は黄昏に近づきて

塹たづぬる群鳥

熊鷹、鳶、百鳥の

各すみかへ歸り行く

時しもあれや忽然と

吹き来る烈風に身を煽られて

青彦、夏彦、常彦は

深き谿間に轉落し

足をいたためつ腰を打ち

苦しみ悶ゆる折からに

遠音に聞ゆる宣傳歌

木靈にひびきて三人が

鼓膜をかすめ送り来る。

青彦「ア、大變な事であつたワイ。レコード破りの烈風に吹き散らされ、千仞の

谷間に陥落し少々腰を打ち、暫くは目を眩して居たが、宣傳歌の聲が耳に微にひ

びき、これでどうやら此方のものらしい氣分がして來た。夏彦、常彦、お前はど

うだ。何處も怪我は無かつたか」

夏彦「其處ら一面眞暗がりになつて、大蛇の奴、大空から大きな舌を出し、中天にぶら下つた時の恐ろしさ、それから後はどう成つたか、一向覺えて居りませぬが、どうやら足を挫いたらしい。踵がキクキクと痛み出した。一體此處は何處でせうな」

青彦「此處は矢張三嶽山の谷底ぢや。オイ常彦、お前はどうぞぢや」

常彦「いや何うも斯うも有りませぬ哩、痛いと言つても、苦しいと言つても、コ

ンナ非道い目にあふのなら、矢張黒姫の御用をきくのだつたに、丹波村で別れた

時、黒姫の奴大きな目をむきよつて、嫌らしい笑ひ顔をして行きよつたが、その

笑ひには確かに貴様等俺に叛くと、谷底へ落ちてエライ目に會ふぞよといふ、言

はず語りの色が見えて居つた、アーアー膝節が抜けた様だ。ウラナイ教の大神様、

誠に心得違ひを致しました。どうぞお赦し下さいませ」

青彦「アハ、ハ、ハ、よう精神の動搖する奴ぢやなア、貴様の信仰は、砂上の樓閣、

風前の燈火同様だ」

夏彦「こいつは風前の燈火では無うて風後の變心ですよ。アハ、ハ、ハ、ハ。モシモシ

青彦さま、三五教の宣傳歌が益々近寄つて来るぢやありませんか。此方から一つ大きな聲を出して合圖をしたらどうでせう」

青彦「あれは確かに悦子姫さまの御一行らしい。コンナ谷底へ吹き飛ばされ、名前に怪我をして「みつとも」ない。自分の怪我は自分が處置せなくては成るまい。卑怯未練にも人の救ひを求めるとは、男子の恥づ可き處だ。それよりも此方から聲を尋ねて出かけたらどうだ」

常彦「出かけると云つた處で、膝が脱けて了ひ、コンパスの使用不可能と成つて居るのにどうして歩けませうか」

夏彦「馬鹿云ふな、俺だつて足は痛い、青彦さまだつて腰の骨を挫いて御座るのだ。コンナ處で弱音を吹いて耐るものかい。何事も精神で勝つのだ。七尺の男子が、身體の一箇所や二箇所怪我したと云つて、屁古垂れるといふ事が有るものか。蛙や蜥蜴を見、身體の半分位切られても、平氣でピヨコピヨコ飛んで居るではないか。兔角人間は精神が第一ぢや、サアサア行かう」

常彦「ソナ事云つたつて、動かぬぢやないか」

夏彦「俺の様な腰の曲つた中年寄が、足を怪我してもこれ丈の元氣だ。それに何だ。若い屈強盛りの身を以て、モウ動かぬの動けぬのと、弱い事を言ふない」

常彦「ハ、ハ、ハ、俺は天下無雙の豪傑だ、信仰心は磐石の如く、チツトも動かぬ。試生粹の日本魂だ。如何なる難局にブツカツても動揺しないと云ふ代物だからな」

夏彦「ヘン、口許り黒姫仕込みだけあつて、仰有います哩。貴様の信仰はガタガ夕震ひの動揺震ひだが、動かぬのは親譲りの交通機關許りだらう。グズグズ吐すと邪魔臭いから、谷底にホツトイてやるぞ。サアサア青彦さま、此奴は矢張黒姫黨だ。見捨てて参りませうか」

青彦「常彦さまの足の起つやうに、鎮魂を願ひませうか」

夏彦「イヤもう結構、コンナ奴に鎮魂して、足でも起つたが最後、又もや黒姫の處へ信仰逆轉旅行と早變り、膺懲の爲めに、御筆先通り、改心致さぬと谷底へ落すぞよ。落して行きませう」

常彦「アハ、ハ、ハ、嘘だ嘘だ、ドツコも鵜の毛で突いた程も怪我は無いだよ。完全無缺ネットプライスの完全體だ。大きに色々と御心配をかけました。サアサ

ア参りませう、お二人のお方、私の後に跟いてうせやがれ」

夏彦 「ヤイ常彦、俺に何程汚い言葉を使っても、友達の仲だから構はないが、ソナ事を言うのと、青彦さまに御無禮ぢやぞ。速かに宣り直さぬかい」

常彦 「初めのは青彦さまに對して御叮嚀に申上げたのだ。跟いてうせやがれと言ったのは御注文通り貴様に言つたのだ。アハ、ハ、ハ、」

夏彦 「俺もお蔭で蚤が喰た程も怪我は無い。大きに御心配をかけました」

青彦 「ア、私も大丈夫だ。サアサア行かう」

常彦 「モシモシ青彦さま、貴方最前、腰が抜けたと仰有つたぢや有りませぬか。

あれは嘘でしたか。宣傳使たるものが、假りにも嘘を吐いて良いのですか」

青彦 「腰が抜けたかと言つたのは、常彦さまの信仰の腰が抜けたさうだと言つたのだよ。まかり違へばまたもやウライナイ教に逆轉する處でしたね」

常彦 「三五教に入信つてから、三嶽山の吹き放しを歩いて居つた時、大變な大風、脚下はヨロヨロ、兩方は千仞の谷間、これやテツキリ三五教ぢやない、アブナイ

教ぢやと思つて、怖々歩いて居ると、忽ち一陣の烈風に吹き捲られ、空中を幾回

となく逆轉して遂にこの谷底へ無事着陸、これ丈け逆轉の修行をすれば、モウ此上は逆轉も懲り懲りです。御安心して下さいませ」

夏彦「常彦の安心して呉れも可い加減なものだ。常平常から心の定らぬ奴で、狐の様に嘘許り言ふから、同僚間から、彼奴は狐彦だと言つて居るのを知らぬのか」
常彦「狐彦でも狸彦でも、お構ひ御無用、サアサア狐彦は山中は勝手をよく知つて居ります。狐の後から馬が来るのだよ」

青彦「アハ、ハ、ハ、」

三人は月夜を幸ひ、四ツ這ひに成つて嶮しき山腹を驅け登る。こちらには悦子姫の一行、皎々たる満月を眺め、山上の岩に各腰打ち掛け、雑談に耽り居る。

音彦「今日の暴風といったら何うだらう、眞黒けの雲の中より、大蛇の奴、乙な藝當を演じやがる。風は吹いて吹いて吹き捲くる。イヤもう落花狼藉、修羅道の旅行のやうだつたね。加米彦が二百十日だなぞと、大風呂敷を擴げるものだから、アンナ事が突發したのでせう。何事も言靈の幸ふ世の中、言靈は慎まねばなりませぬなア」

悦子姫「さうですとも、言靈の天照る國、言靈の助くる國、言靈の生る國ですもの」

加米彦「ヤア悦子姫さま有難う。只今限り、惡の言靈に停電を命じます。どうぞ今日のところ見直して下さいませ。それについても青彦はどうして居るのだらう。三嶽山の登り口まで跟いて来よつたが、林の中へ小便にでも行くやうな顔をして、それきり姿を見せぬぢやありませんか。大方丹波村のお節さまの處へでも往つたのぢや有るまいかなア。青彦は此の間、眞名井ヶ原の珍の寶座の前で、お節の顔を穴のあく程眺めて居た。さうしてお節さまは良い女だ、良い女だと、口癖のやうに執着心を發揮して居たから、大方今頃は、お節の膝を枕に、夜中の夢でも見て居るのでせう」

音彦「ナニ、ソナ事が有るものか。深山の事だから、吾々一行の姿を見失ひ、迷うて居るのかも知れない。都合に依れば、吾々よりも先に行つて居るかも分らない。さう斷定的判断を下すものぢやないよ」

加米彦「貧乏人の材木屋だ。ワルぎを廻すのだ。アハ、ハ、ハ。青彦の青瓢箪彦、

實際何をして居るのだ。何だか知らぬが、俺は胸騒ぎがして、猿の小便ぢや無いが、きにかかつて仕方がない」

青彦、木の茂みより、

「加米彦さま、ご心配有難う」

加米彦「ヤア、何ぢや、姿も無いのに聲許り聞えてゐるぞ。ハ、ア判つた、途中に於て鬼熊別の部下の奴等に、岩窟へ投げ込まれ、散々にさいなまれて生命を奪られ、幽霊に成つて化けて来よつたのだ。杜鵑ぢやないが、聲は聞けども姿は見えずぢや、エーイ、ケツタイの悪い夜だ。音彦さま、確りせぬと青彦が青い青い顔をして、ヒュードロドロとやつて来ますぜ」

音彦「加米彦、お前は随分元氣な男ぢやが、死んだ者が何故そのやうに怖いのか。怖いものは此の世の中に人間許りだ。人間位怖い者は無いぞ。假令幽霊が出たつて、人間の死んだのぢや無いか。マア氣を落ち着けたらどうだ、何をビクビク震うて居るのだ」

木の中より夏彦の聲、

「夏、夏、夏、夏彦の幽霊ぢや。青彦は青い火を燈して、谷の底で幽霊に化つて居るわいのう。加米さまが戀しいから、今お目にかかる。夏彦一足先へ行つて偵察をして来いと仰有つた。ヒュードロドロ ドロドロ」
と腰の屈みた夏彦は加米彦の前に髪をサンバラにし、妙な手眞似をして現れた。
加米彦は、

「キヤツ」

と一聲腰を抜かし、

「ヤイヤイ、貴様は幽霊の乾兒か。ア、もう仕方が無い。青彦に能う言うて呉れ、お目にかかつたも同然ぢや。御親切は有難いが、今では無事に暮して居る。黄泉へ行つたらもう仕方が無い。俺に執着心を起さずに、トツトと神界へ行けと傳言をして呉れ、何だ、お前の腰はよう曲つて居るぢやないか、幽霊のお爺さまだらう、サアサア、トツトと去ンだり去ンだり」

悦子姫 「ホ、ホ、ホ、ホ、」

紫姫 「ホ、ホ、ホ、ホ、」

加米彦「エーエー、イヤらしい聲を出して、コンナ山の上で、おいて下さいな」

青彦「この場に又ツと現はれ、」

「アハ、ハ、ハ、これはこれは悦子姫様、お待たせ致しました。ヤア音彦さま、加米彦さま、濟まなかつた。見なれぬ御女中や澤山のお伴が居られますが、何れの方ですか。これはこれは初めてお目に懸ります。どうか御昵懇に願ひます」

加米彦「アハ、ハ、ハ、オイ青彦、貴様谷底へ風に吹き飛ばされて、蟄居して居よつたのだな、お節は何と言つた。加米さまに宜しう、どうぞ一時も早く鬼ヶ城の魔神を言向け和し、優しい加米さまの顔を拜まして下さいと、傳言をして居つただらう」

音彦「オイ加米彦、何うだ、俄に元氣づいたぢやないか」

加米彦「あまり退屈なから、一つ臆病者の演劇をして、悦子姫さまなり、紫姫さまのお慰みに供したのだ。アハ、ハ、ハ、」

一同「聲を揃へて笑ひこける。」

青彦「悦子姫さま、音彦様にお願ひが御座います。どうぞ御聴き届け下さいませ」

ぬか

悦子姫よしこひめ「これは又改またあらたまつたお言葉ことば、お願ねがひとは何事なにごとで御座ございます」

青彦あをひこ「ハイ、犬いぬの子こを二匹にひき拾ひろつて來きました」

音彦おとひこ「其その犬いぬは何處どこに居をるのだ」

青彦あをひこは、

「ハイ」

と言いひ乍ながら、夏彦なつひこ、常彦つねひこを指ゆびさし、

「これで御座ございます」

夏彦なつひこ「エイ、殺生せつしやうな」

常彦つねひこ「青彦あをサン、餘あんまり馬鹿ばかにして貰もらふまいかい。ソソンナ事ことを云いうと、お節せつの事ことを素すつ

破拔やばかうか」

青彦あをひこ「ハ、ハ、ハ、お前まへ達たち兩人りやうにんに對たいし只今ただいまより嵌かん口こう令れいを施しく。暫しばらく沈黙ちんもくするのだよ」

加米彦かめひこ「ワハ、ハ、ハ、何なんだか意味いみありげな此この場ばの光景くわうけいだ。ナニ、加米彦かめひこが許ゆる

す。二匹にひきの犬いぬとやら、充分じゆつぶん吠ほえて吠ほえて吠ほえ立てたてるのだよ」

青彦「エ、喧しい。俺が口切りする迄、黙つて聞いて居らう。エ、悦子姫さま、實はこの男二人は、ウラナイ教の黒姫が四天王と呼ばれたる、其中の二人で、夏彦、常彦と云ふ豪の者で御座います。さうした處が黒姫の内幕をすつかり看破し、三五教の教理の優秀なる事を、心の底より悟りまして、どうぞ入信させて呉れいと、犬つく這いになつて、低頭平身嘆願致しますので、物の哀れを知る吾々、さう無情に見捨てても成らず、貴方がたにお目玉を頂戴するかも知れぬと、恐る恐る此處まで連れて参りました。然し乍ら何時今の固い信仰がグラツいて、元の古巢へ尾を振つて去ぬかも知れませぬ、その段は保證出来ないで、イヌものと覺悟し、二匹の犬と申上げました」

加米彦「オイ青彦さま、言靈が悪いぞ、宣り直せ宣り直せ」

悦子姫「オホ、々、々」

音彦「直に眞似をしよるなア、アハ、々、々、夜は追ひ追ひと更けて來ました。今から行けば途中に夜が明けますまいから、一同此處で悠くりと休息し、明日の黎明を待つて、鬼ヶ城へ立向ふ事に致しませうか」

悦子姫「ア、それが宣しからう。紫姫さま、妾の側でお休み下さい」

紫姫「有難う御座います」

と、一同は肱を枕に、月の光を浴びて、蓑を敷きゴロリと横たはる。忽ち聞ゆる
鼾の聲、無心の月は、一行の頭上をにこにこ笑ひ乍ら射照らし居る。

(大正一一・四・二三 舊三・二七 東尾吉雄録)

第一五章 敵味方(六二六)

二月十五日の月光を浴びて、三嶽山の頂上の平地に、一蓮托生、蓑を敷き、肱を枕に華胥の國に入る。馬公鹿公は峰吹く嵐の音に夢を破られ、一度にムツクと起上り、

鹿公「ア、恐ろしい事だった。折角紫姫様のお情に依りて、岩窟の難を免れたと思へば荒鷹、鬼鷹の兩人、鬼ヶ城より歸り來り、俺達二人をフン縛つて、又もや

岩窟がんくつに捻込みねぢこやがったと思へば、夢ゆめだつた。アー恐ろしい恐ろしい、夢に見ても、アンナ悪人あくにんはゾツとする」

馬公うまこう「ヤアお前まへも夢ゆめを見たか。俺おれも同様の夢ゆめを見た。何なんだか此處ここは寢心ねこころが悪い。

チツト月夜つきよでもあり、そこらをブラついて見ようかい」

鹿公しかこう「さうだなア、是れ丈だけの同勢どうせいがあれば、まさかの時ときには大丈夫だいぢやうぶだ。一丁いちぢやうや二

丁ぢやう離れたつて、氣遣きづかひはあるまい。萬一まんいち荒鷹あらたかや、鬼鷹おにたかが出て來きやがった所ところで「オ

イ助たすけて呉くれい」と一言ひとこと云へば、すぐ加米彦かめひこさまが、言靈ことたまの發射はつしゃとやらで助たすけて

下くださるは請合うけあひぢや。サア行かう行かう。皆みなさまはマア、よう寢やすんで居ゐらつしやる

こと。吾々われわれの様やうに罪つみが深い者ものは、恐怖心きょうふしんに驅かられて、安眠あんみんも碌ろくに出來できないワ。起お

きて居をれば怖い目めに遭あはされる、寢ねれば眠ねるで怖い夢ゆめを見る、寢ねても醒さめても、

責せめられ通とほしだ……結構けつこうなお月様つきさまの光ひかりをたよりに、チツと其處邊そこらを、保養ほやうがてら、

ウロつかうぢやないか」

馬公うまこう「宜よからう」

と、フツと立たち、二人ふたりは手てをつなぎ、ブラブラと山やまの頂いただきを逍遙せうえうして居ゐる。

「ア、何と、佳い景色だ。山の上で風は良い加減に冷たいが、木の葉に露が溜り
一々月が宿つて居る、此光景はまるで、水晶の世界に居る様だ。アア俺達の様
な不仕合せ者でも、亦コンナ愉快な光景を見る事が出来る。人間は長生したいも
のだなア」
と鼻唄を唄ひ、あちらこちらとウロついて居る。

加米彦は中途に目を醒まし、

「アア皆さま打揃うて、よく寝て居らつしやるワイ。悦子姫さまの白い顔、桃
色の頬べた、紫姫さまの花のやうな麗しきお姿、一方は花の顔容、一方は雪の肌、
空には三五の明月、お月さまも餘程氣に入つたと見えて、二人のナイスの顔を、
特別待遇でお照しなされると見える、いやが上にも綺麗なお顔だ事。……ア、音
彦の顔か、随分力をオト彦テなスタイルだ。片腕をくの字に曲げ、無作法に口を
開けて寝て御座るワイ。今頃は五十子姫の夢でも見て居るのだらう。可愛い女房
をバラモン教の奴に攫はれ、今に行衛不明、思へば思へば心中を察してやる。そ
れでも此永の間に一緒に歩いて居るが、五十子姫のイの字も口に出しよらぬ所を見

ると、餘程確りして居るワイ……人間の寝顔を見れば、大抵其人の精神が分るものだ。どれどれ青瓢箪彦の首實檢と出かけよう……ヤア此奴は嬉しさにホヤホヤと笑うて居る。何でも丹波村とかのお節の夢でも見て居るのだらう。ヤア益々笑ひよるぞ。幽霊と假稱せられる様な奴だから、どうで笑ひにも何處ともなしに厭味たつぷりの所がある。コンナ所を一つお節に見せてやりたいものだなア、アハ、ハ、ハ。ヤア此奴は丹州かな、一寸好い顔をして居やがるぞ。何でも豊國姫の神様の御命令だと云つて居たが、何處ともなしに威嚴が備はつて居る。ハ、ア顔の眞中に妙な光が現はれて居るぞ。木の花姫の化身か、妙音菩薩の再來か、此奴ア、ウツカリ輕蔑する譯には行かぬワイ。我々一行中での大人格者と見える。……ヤア良い審神をした。明日になったら音彦の大將に一泡吹かしてやらう。……ウン此奴は黒姫仕込みの、腰曲りの夏彦と云ふ奴だ。なんと情ない鯨つ面だなア。ヤア此奴ア批評の價値がないワイ。此處に一寸こましい面の持主がある。此奴が、何でも狐とか狸とか云ふ奴だ。ウンさうさう常彦々々、今寝て居る間に、髪と髪とを括つといてやらうかなア』

加米彦は二人の長髪をソツと掴み、端と端とで地獄結に括つて了ひ、

「サア此奴が目が覺めたら、随分滑稽だらう。これからが、音彦さまと青彦の番だ。併しあまり距離が遠いので……髪と髪とが届かぬらしい。待て待て……エー此處に綱がある。此奴で括つて置かう」

と手早く括り合し、

「ハ、ハ、ハ、これで紛失の憂ひなしだ。此次が悦子姫さま、紫姫さまか……ヤア此奴ア、惜いぞ。紫姫と丹州とを繼ぎ合せ、最後に悦子姫と加米彦の大神さまとの繼ぎ合せだ。これで二四ヶ八人、二八十六本の手と足。ヤア面白い、面白い」と手探りに、紫姫の髪をソツと掴みかかった。紫姫はムツクと起き上りさま、加米彦の腕首掴んで、ドツカと投げたるその勢あまつて加米彦は、傍の谷を目がけてドスン。

「アイタ、ハ、ハ、」

と叫び居る。

紫姫「ヤア皆さま、起きて下さいませ。又もや鬼熊別の部下の者共が現はれまし

た。サア御用意々々」

此聲に驚いて一同は撥ね起き、常彦は、

「アイタ、タ、タ、タ」

夏彦「エ、エ、エ、エ、エ、エ、エ、エ、エ、エ、誰だ誰だ、人の髪の毛を引っぱりよつて…

…放さぬかい」

常彦「オイ夏、貴様だらう」

夏彦「馬鹿云ふな、貴様が俺の髪を引っぱつとるのだ」

青彦「ヤア俺の頭を曳く奴がある。……ヤア何だ、寝て居る間に、髪と髪とを

繼ぎ合しよつたな、コンナ悪戯をする奴は、大方加米公だらう。……オイ加米彦、

何處へ行つた。早く出て来て、ほどこかないか」

加米彦「オーイ、オイ、俺はエライ所に、後手に括られて、困つて居るワイ。誰

か出て来てほどこいて呉れ」

青彦「ヤア加米彦も括られよつたのかな、是れだから、油断は大敵と云ふのだ。

敵地に臨みて氣を許し、寝てるのが此方の不覺だ、併し人間が紛失せなくてまだ

しもだ

加米彦「オーイ、青彦、皆さま、御心配下さいますな、私のは自縄自縛、自縄自

解、依然として元の通り」

青彦「ナアーンだ、人を脅嚇かしよつて……どこを括られて居つたのだ」

加米彦「マアどうでも良い、一體お前達はナアんだ。頭に長い尾を付けよつて……」

……」

丹州「加米彦さま、あなた随分悪戯をしましたネー。私が知らぬ顔をして見て居

りましたよ。紫姫さまに取つて放られなさつたときの面白さ、アツハ、ハ、ハ、」

加米彦「ヤア失敗つた。皆さま、飛んだ失禮を演じまして、……どうぞ神直日、

大直日に見直し聞直して下さいませ」

音彦「戲談にも程がある。宣傳使の神聖を害する行動だ。今日限り、素盞鳴大神

の代りとなつて、汝に對し、宣傳使の職を解く。有難う思へ」

加米彦「此奴ア一寸迷惑だ。モシモシ音彦さま、鬼ヶ城の征伐が済む迄、執行猶

豫をして下さいな」

音彦「イヤなりませぬ」

加米彦「モシモシ悦子姫さま、どうぞ仲裁して下さいませ」

悦子姫「コレ音彦さま、今後、コンナ悪戯をなさらぬ様に、能く戒めて、今度は

赦して上げて下さいな」

音彦「赦し難き其方なれど、悦子姫様のお言葉に従ひ、今度は忘れて遣はす」

加米彦「アツハ、、、何に吐しよるのだい。遣はす………が聞いて呆れるワイ、

アハ、、、あまり可笑しくて、腹が痛くなつた。眞面目くさつた面構へをしよ

つて何だい。………チツと捌けぬかい。何程五十子姫の事を思つて心配したつて、

龍宮の一つ島に漂着して居る女房に遇へるでもなし、刹那心を出して、モウちつ

と碎けぬかい。何だか、ソナむつかしい顔した奴が混つて居ると、道中が面白

くないワ」

音彦「ナニツ、五十子姫は龍宮の一つ島に漂着して居るのか、それやお前、何時、

誰に聞いたのぢや」

加米彦「ソナ事が分らぬ様な事で、宣傳使が勤まるかい。加米彦さまの天眼通

で、チャーンと調べてあるのだ。梅子姫さまと侍女の今子姫、宇豆姫の四人連れで、今龍宮島でバラモン教と激戦の最中だ。併し心配は致すな、神様が護いて御座る」

音彦「ヤアさうだつたか、五十子姫は、ウラナイ教に、若しや擒になつて居るのではなからうかと種々と工夫をして、黒姫の荷持となり、様子を考へて居たが、どうもウラナイ教には居りさうもないので、若しや大江山の鬼雲彦が爲に捕はれの身となつて居るのではなからうかと思つて居たのだ。鬼ヶ城へ是から行つて、モシや五十子姫が居つたら助けてやらねばなるまい、と、此處まで勇みて來たのだ。さうすれば鬼ヶ城には、五十子姫は居ないかなア」

加米彦「ハ、ハ、ハ、ハ、お氣の毒様、明日は鬼ヶ城を征服し、可愛い女房の五十子姫さまに芽出度く對面遊ばす御心中であつたのに、エライ悪い事を申しました。……

お力落しさま」

「ホ、ハ、ハ、ハ、」

音彦「何事も運命だ。人間がどれ程煩悶したつて、成る様にほか成りはせぬ。今

晩はゆつくりと此處でモウ一寝入りして、明日は花々しく言靈戦を開始する事に
しやう。サア皆さま休ませう。加米彦、お前は御苦勞だが、今夜は不寝番だ
加米彦、ワザと叮嚀に、大地に頭を摺つけ、両手を突き乍ら、
加米彦「これはこれは音彦の君の御仰せ、確に承知仕つて御座いまする」

一同「アハ、ハ、ハ、オホ、ハ、ハ、ハ」

又もや思ひ思ひに寢に就く。月の景色に浮かされて、鹿公、馬公の二人は思はず
知らず、七八丁ばかり、一行の休息場より南に離れて了つた。此時四五人の荒
男、突然木蔭より現はれ來り、バラバラと二人の周圍を取り巻き、棍棒を携へ、
「ヤア其方は、紫姫の僕、鹿、馬の兩人ではないか、どうして此處へ脱け出して
來た」

鹿公「コレハコレハ荒鷹、鬼鷹の親分様、誠にお氣の毒で御座いますが、岩窟を
叩き破つてやうやう此處まで出て參りました」

荒鷹「貴様はどうして、あの堅固な岩窟を破つたのか」

鹿公「私は御存じの通り、身に寸鐵も持たない、どうする事も出来ませぬが、神

變不思議の言靈に依りて、自然に岩戸は左右にパツと開き、平和の女神に誘はれて、此處までやつて來ましたよ」

鬼鷹「ナニ、平和の女神とは誰の事だ。紫姫の事ではないか」

馬公「紫姫も結構だが、見目も貌も悦子姫と云ふ絶世のナイスが、突然現はれ給

ひ、馬さま、鹿さまの御手を取り、救ひ出させ給うたのだ。モウスうなる上は千

人力だ、荒鷹、鬼鷹、其他の小童武者共、千疋、萬疋一度に掛らうと、ビクとも

致さぬ某だ、アハ、ハ、ハ、ハ」

荒鷹「オイ鬼鷹の大將、此奴アちつと變ぢやないか。毎日日日ベソベソと吠面か

わいて慄うて居つた兩人が、今日は心底から氣樂さうに、大言を吐いて居る、ど

うしたものだらう」

鬼鷹「此奴ア、發狂したのだらう。さうでなくては、アンナ事が言へたものぢや

ない」

荒鷹「それにしても、肝腎の目的物たる紫姫は、どうなつただらう。鬼熊別の御

大將に御約束をして來たのだ。若し紛失でもして居たら大變だがなア」

鹿公しかこう「アツハ、、、、夕、、大變たいへんだ大變たいへんだ。大變たいへんが通り越こして、天變てんべん地變ちへんだ、地震ぢし震雷んかみなりひ火くるまの車くるま、鬼おにの岩窟いはやは忽たちまち明日あすをも待またず、木端こつば微塵みぢん、憐あはれ果敢はかなき次第しだいなり、ワツハ、、、、」

鬼鷹おにたか「ヤア益々ますます怪あやしいぞ、………オイ鹿しか、馬うまの奴やつ、紫姫むらさきひめの所在ありかを有態ありていに申ませ」

鹿公しかこう「アハ、、、、あの心配しんぱいさうな面付かほつき、蟻ありか、蚯蚓みみづか、鼬いたちか知らぬが、貴様きさま等の翫おも弄物ちやにはお成なり遊あそばす紫姫むらさきひめぢや御座ごらぬワイ。鬼熊おにくま別わけの大將たいしやうに奉たてまつつて、御褒ごほう美びに與あつかうと云いふ目的もくてきであらうが、細引ほそびききの禪ふんどし、あちらへ外はうれ、こちらへ外はうれ、お氣きの毒どく乍ながら目的もくてきは成就じやうじゆ致いたさぬワイ。あまり呆あきれて腮あこが外はうれぬ様に御注ごちう意いなされませや」

鬼鷹おにたか「ヤア益々ますます合點がてんのゆかぬ事ことを申ます奴やつだ。コラ馬うま、鹿しか、貴様きさまは荒鷹あらか、鬼鷹おにたか御兩ごりやう人様にんさまの御威勢ごゐせいを恐おそれぬか」

鹿公しかこう「コレヤ荒鷹あらか、鬼鷹おにたか、貴様きさまは鹿公しかこうさま馬公うまこうさま御兩ごりやう人の御威勢ごゐせいを何なんと思おもふか、恐おそれ入いらぬか、アツハ、、、、」

荒鷹あらか「益々ますます可怪をかしい奴やつだ。何なんでも此こ奴やつア、強がうり力きな尻押しりおしが出来できたに違ちがひない。オイ

鹿、貴様の後に誰か尻を押す奴が出来たのだらう。逐一白状致せ

鹿公「きまつた事だよ、此方には大江山の鬼雲彦を始めとし、其他數萬の天下の

豪傑、雲霞の如く吾々兩人を救援に向ひ、三嶽の山の岩窟を滅茶苦茶に叩き潰し、

五六人の留守番の奴等は谷底へ吹き散らし、是れより進みて鬼ヶ城の敵に向つて

攻撃の準備中だ。東方よりは又もや數多の軍勢、龜彦、英子姫のヒーロー豪傑を

先頭に、數十萬とも限りなく、日ならず攻め寄せる計畫整うたり。モウ斯うなる

上は、鬼ヶ城もガタガタの滅茶々々、一時も早く引返し、此由を鬼熊別の腰拔大

將に注進致すが宜からうぞ

荒鷹「ナニツ、言はしておけば際限なき雑言無禮、首途の血祭、汝等二人の身體

は、此棍棒の先に粉碎し呉れむ……ヤアヤア者共、二人に向つて打つて掛れ

一同は二人を目あてに、棍棒打振り打つてかかるを、鹿、馬の兩人は一生懸命、

韋駄天走りに、悦子姫が休息場に向つて逃げ歸る。

荒鷹「ヤア卑怯未練な馬、鹿の兩人、口程にもない代物、……ヤアヤア者共、汝

ら四五人にて結構だ。早く追つかけ兩人を生捕に致して来い

「畏まりました」

と五六人の男は、二人の後を追つて北へ北へと走り行く。

加米彦「ヤア騒々しき足音が聞えて来た。青彦、常彦、夏彦、起きたり起きたり」

斯く云ふ内、鹿公、馬公は此場に走り来り、

「宣傳使に申し上げます。只今荒鷹、鬼鷹の兩人、四五人の乾兒を引きつれ、棍

棒を打振り、此場に進みて参ります。防戦の御用意なされませ」

加米彦「ヤア最早やつて来よつたか。序に鬼ヶ城の鬼熊別全軍を率ゐて来て呉れ

れば、埒が明いて良いがなア。五人や十人邪魔臭い」

鹿公「もうし加米彦さま、随分力一杯、馬公と二人で吹いて吹いて吹き捲つてや

りました。是でああなたの二代目が勤まりませうなア」

加米彦「ヤア此場へ敵がやつて来ては、悦子姫さま其他の安眠妨害だ。それより

も此方から向つて、一つ奮戦だ。鹿公、馬公、サア来い来れ……」

と云ふより早く加米彦は、南を指して走り行く。忽ち南方より息せき切つて走り

来る四五の物影、三人は傍の木の茂みに身を忍ばせ、様子を窺つて居る。

甲 「オイ貴様さつきへ往かぬかい」

乙 「先も後もあつたものかい。先へ行た者が險呑だとも、安全だとも分るものぢやない。何事も運命の儘に進めば良いのだ。ソナ臆病風を出して、惡の御用が勤まるかい」

甲 「ナ二誰が惡の御用だ。吾々は是位最善の道はないと思つて、一生懸命に活動

して居るのだ。鬼熊別の大將は何時も仰有るぢやないか。世界は惡魔の世の中だ。優勝劣敗だ。さうだから世界の人間が可哀相だ、強い者を苛め、弱い者を助けて

やるのが人間だ……と、何時も仰有るぢやないか。俺は鬼熊別の大將が毛筋程で

も惡だと思つたら、コンナ夜夜中に山坂を驅巡り、辛い働きはせないよ。何でも、

三五教とやらの、強い者勝の惡神が出て來よつて、世界の弱い人民を虐げると云

ふ事だから、俺も天下の爲惡人を滅亡すのが唯一の目的だ」

乙 「アハ、ハ、ハ、貴様は割りとは馬鹿正直な奴だなア、鬼熊別はア、見えても、

惡が七分に善が三分だ、それが貴様分らぬのか。……アアもう一步も前進する

事が出來なくなつて了つた」

丙へい「さうだなア、此處ここまで來ると、足あしがピタリと止とまつた。何なんでも最前さいぜん逃にげて行いきよつた二人ふたりの奴やつ、魔法まはふを使つかつて俺達おれたちの足止あしどめをしよつたのかも知しれぬぞ」

木きの茂しげみの中なかより、

「加米彦かめひこさま、世界せかいに絶對ぜつたいの惡人あくにんはありませぬなア、今彼等いまかれらの話はなしを聞きけば、鬼おにの乾兒こぶんにもヤツパリ善人ぜんにんが混まじつて居ゐるぢやありませぬか」

加米彦かめひこ「そうだ、如何いかに惡人あくにんと云いつても、元もとはみな神様かみさまの結構けつこうな靈みたまが血管けつくわんの中なかを流ながれて居ゐるのだから、惡あくになるのは皆誤解みんなごかいからだ。併しかし惡あくと知しりつつ惡あくを行やる奴やつ

は滅多めつたにないものだ。吾々われわれも斯かうして善ぜんを盡つくした積つもりでも、智德ちとく圓滿えんまん豐美ほうびなる神かみ様の御心みこころから御覽ごらんになれば、知しらず識しらずの間に罪つみを重かさねて居ゐるか知しれないよ。

そうだから人間にんげんは何事なにごとも惟神かむながらに任まかし、己おのれを責せめ、謙遜へりくだり省かへりみなくてはならないのだ」

鹿公しかこう「ヘン……殊勝しゆしやうらしい事を仰おつしや有あいます事こと、あなたは随分ずぶん謙遜へりくだる所どころか、高慢かうまん心の強つよいお方かたぢや、法螺ほらばつかり吹ふいて吹ふいて吹ふき倒たふし、人ひとを煙けぶりに卷まいて、鼻はなを高たかうして得意とくいがつてるお方かたぢや有ありませぬか。あなたも、よつぽど耄碌まうろくしましたな

ア

加米彦「アハ、、、それだから困ると云ふのだ。お前達は表面ばかり見て、

吾々の魂を見て呉れないから困るナア」

甲「ヤア何だ、林の中から聲が聞えるぢやないか」

乙「そうだ、最前から怪體な聲がすると思つて居た。……オイオイ今の聲の主人

公は何處に居るのだ。敵でも味方でも良いワ、みな神様の目から見れば世界兄弟

だ。ソナ所に怖相に引込みて、ヒソビソ話をするよりも、公然と此場に現れて、

一つ懇談會でもやつたらどうだい」

加米彦「此奴ア面白い、お前達は鬼ヶ城に割據する鬼熊別の部下の者だらう。俺

は三五教の加米彦と云ふ立派な宣傳使だ。一つ宣傳歌を聞かしてやらうか」

甲「ハイハイ良い所で……ドツコイ不思議な所でお目にかかりました。どうぞ生

命許りはお助け下さいませ」

乙「オイオイ何を謝罪なのだ。結構な歌を聴かしてやると仰有るのだよ」

甲「ア、さうか、おれや又、煎じて食てやらうと聞えたので、ビツクリしたのだ

よ
」

乙「アハ、ハ、ハ、モシモシ宣傳使とやら云ふお方、あなたの言靈は、どうも明瞭して居ります。吾々に對し一寸も敵意を含みて居ない。ヤアもう安心致しました、どうぞ聞かして下さいませ」

鹿公「オイ鬼の部下共、俺達は鹿公ぢやぞ。あまり安心を早うすると、後で後悔をせにやならぬぞ」

乙「ナニ、お前は今逃げた鹿公ぢやなア、此處へ出て來ぬかい、一つ力比べをして、負たら従うてやる、勝つたら従はずぞよ」

鹿公「アハ、ハ、ハ、三五教のお筆先の様な事を云つて居やがる。勝つも負けるも時の運だ。併し乍ら勝負は最早ついて居るぢやないか。サツパリ加米彦の宣傳使の言靈に零敗して了つた。アツハ、ハ、ハ、」

斯かる所へ荒鷹、鬼鷹の兩人、ノソリノソリと現れ來り、

「オイ貴様達、コンナ所で何をして居るのだ、吾々の命令に服従せないのか」

甲「ハイ俄に強くなつて、腹の底から、何だかムクムクと動き出し、阿呆らしく

なつて、あなた方の命令に服従する事が出来なくなつて来ました」

荒鷹「ソラ何を言ふのだ、貴様、臆病風に誘はれて腰を抜かし、逆上せやがつたな」

乙「モシモシ荒鷹、鬼鷹の兩人さま、モウ駄目ですよ、あなたの威張るのも今日唯今限り、私もどうやら腹の底から、本守護神とやらがムクムクと頭を擡げ「ナー

二鬼鷹荒鷹の木端武者、今此場で改心致せばよし、致さぬに於ては、腕を捺折り、股から引裂いて喰つて了へ」と囁いて御座る、アツハ、、、」

丙「ヤア鬼鷹、荒鷹、どうぞや、降参致したか」

丁「改心するか」

戊「往生致すか、三五教に従ふか、悪を改め善に立歸るか、返答はどうぞや。宣傳歌を聴かしてやらうか」

荒鷹「アイタ、、、此奴ア變だ、頭が鑿で力チ割られる様に痛くなつて來よつた、鬼鷹、お前はどうか」

鬼鷹「アイタ、、、俺も何だか、痛くなつて來たやうだ。ハテ合點の行かぬ事

だワイ

林の中より、加米彦の聲、

☐ 朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くとも

假令大地は沈むとも 曲津の神は多くとも

三五教の神の道 善と悪とを立別けて

鬼も大蛇も曲津見も 誠の道に皆救ふ

世の荒風に揉まれつつ 神の御子なる諸人は

右や左や前後ろ 彷徨ひ惑ふ其間に

善にも進み又悪に 知らず識らずに陥りて

神より受けし生御魂 或は汚し又破り

破れかぶれの其果は 心の鬼に責められて

あらぬ方へと傾きつ 誠の道を踏み外し

邪の道に勇ましく 知らず識らずに進み行く

元もとは天帝てんていの分靈わけたま 善ぜんも無なければ惡あくも無ない

善ぜんと惡あくとは人ひとの世よの 其その折をり々の捨言すてことば葉は

アテにはならぬ物ものぞかし 善ぜんも無なければ惡あくも無ない
あゝ荒鷹あらたかよ鬼鷹おにたかよ

汝なれも神かみの子こ人ひとの子こよ 尊たふとき神かみの子こと生うまれ

何なに苦くるしさに鬼おにヶ城がじやう 鬼おに熊くま別まわけの部ぶ下かとなり

世よ人びとを苦くるしめ虐しひたぐる 身み魂たまを直なほせ今いま直なほせ

三み嶽たけの山やまの頂いただきで 吾われに逢あうたは神かみ々がみの

篤あつき惠めぐみの引ひ合あせ 心こころ一ひとつの持もち方かたで

惡あくともなれば善ぜんとなる 善ぜん惡あく正せい邪じやの分ぶん水すい嶺れい

覺かく悟ごは如い何かにサア如い何かに 此この世よを造つくりし神かみ直なほ日ひ

心こころも廣ひろき大直おほなほ日ひ 唯ただ何なに事ことも人ひとの世よを

直なほ日ひに見み直なほし宣のり直なほす 神かみの樹たてたる三あな五な教ひけう

復かへれよ歸かへれ眞ま心こころに 磨みがけよみみがけ天あめ地つちの

神かみより受うけし生いく魂たま あゝ惟かむ神な々ながら

御靈幸はひましまして

荒鷹鬼鷹其外の

魔神の身魂を清めませ

偏に願ひ奉る

偏に祈願申します

と聲も涼しく歌ひ終るや、荒鷹、鬼鷹其他一同は大地に平伏し、涙をハラハラと

流し唯、

有難う有難う

と僅に感謝の意を表して居る。

斯かる所へ、悦子姫の一行は現はれ來り、

音彦「ヤア加米彦、御手柄々々、荒鷹、鬼鷹の大將も、どうやら救はれた様な鹽

梅ですなア

荒鷹、鬼鷹一度に、

「これはこれは三五教の宣傳使様、私は今日、只今、神の御靈に照されて、發根と心の岩戸が開けました。最早吾々は惡より救はれました。どうぞ今日限り、あ

なたのお道みちに入れて下くださいまして、お伴ともに御使おつかひ下くだされば有難ありがたう御座ございます」
音彦おとひこ「ホーそれは何なにより重疊ちゆうたつだ。もうし悦子姫よしこひめ様さま、如何いかに致いたませう。斯かう早はやく改かい心しんせられては鬼ヶ城おにがじやうの言靈ことたま戦せんも、何なんだか張合はりあひが抜ぬけた様やうです、何卒どうぞあなたの指し揮きを願ねがひます」

悦子姫よしこひめ、儼然げんぜんとして立上たちあがり、

「イヤ荒鷹あらたか、鬼鷹おにたかの兩人りやうにん、そなたは一先ひとまづ鬼ヶ城おにがじやうに立歸たちかへり、妾わたしの一行いっかうと花々はなばなしく言靈ことたまの戦いくさを開始かいしし、其上そのうへにて雙方さうほうより和睦わぼくをする事ことに致いたませう」

荒鷹あらたか「ナント仰あふせられます、最早もはや私共わたくしどもはあなた方がたに向むかつて戦たたかふ勇氣ゆうきはありませぬ。

ナア鬼鷹おにたか、お前まへもさうだらう」

鬼鷹おにたか「吾々われわれは絶對ぜつたいに三五教あななひけうに歸順きじゆん致いたしました。勿體もつたいない、どうしてあなた方がたに刃はむ向かふ事ことができませんか」

悦子姫よしこひめ「分わかりました。併しかし乍ながら鬼熊別おにくまわけの歸順きじゆんする迄までは、あなたは、三五教あななひけうに入信にふしんの許可きよかを保留ほりうして置おきます。今迄いままで首領しゆりやうと仰あふいだ鬼熊別おにくまわけに對たいし親切しんせつが通とほりませぬ。

成なる事ことならばあなた方がたより鬼熊別おにくまわけを、改心かいしんさして頂いたきたい。併しかし乍ながら俄にはかにあなた

方がたの仰おつしや有ことる事ことを、大將たいしやうとして聞きけますまいから、茲ここに一ひとつの神策しんさくを案あんじ、一旦いったんあなた方がたと立別たちわかれて、花々はなばなしく言靈ことたま戦せんを開始かいしし、其結果そのけつ和睦わはく開城かいじやうと云いふ段取だんどりとなるのが、穩健おんけんな行方やりかたでせう。就ついでては今迄いままで三嶽みたけの岩窟いはやに捕とらはれて居ゐた紫姫むらさきひめさま、鹿しかさま、馬うまさまを始めはじめ、丹州たんしうさまは荒鷹あらたかさま、鬼鷹おにたかさまと共に、一先ひとまず鬼ヶ城おにがじやうへ御歸おかへり下ください。さうして妾わたしの神軍しんぐんに向むかつて言靈ことたま戦せんを開始かいしなされませ。あなたの方は防禦ぼう軍ぐん、妾わたしの方は攻撃こうげき軍ぐんで御座ございます。攻撃こうげき軍ぐんには、悦子姫よしこひめ、音彦おとひこ、加米彦かめひこ、青彦あをひこ、夏彦なつひこ、常彦つねひこを以もつて之これに當あてます、……サアサア一時いちじも早く鬼ヶ城おにがじやうへ御歸おかへり遊あそばせ。時ときを移うつさず妾わたしは神軍しんぐんを引率いんそつし、大攻撃だいこうげきに着手ちやくしゆいた致します。』

丹州たんしう「ヤア六韜りくたう三略さんりやくの姫様ひめさまの御神策ごしんさく、心得こころえしました。サアサア紫姫むらさきひめさま、鹿公しかこう、馬公うまこう、是これから鬼ヶ城おにがじやうへ乗り込こみ、悦子姫よしこひめさまの攻撃こうげきに向むかつて、極力きよくり防戦ぼうせんを致いたませう。……悦子姫よしこひめさま、戰場せんぢやうにて、改あらためてお目めに掛かりませう。此この丹州たんしうが言靈ことたまの威力ゐりよくをお目めにかける、必かならずオメオメと敗走はいそうなされますな。あゝ面白おもしろし面白おもしろし、吾等われらは是これより鬼ヶ城おにがじやうの本城ほんじやうに立歸たちかへり、鬼熊おにくま別わけを總大將そうだいしやうと仰あふぎ、寄よせ來くる三五あななひけう教けうの神軍しんぐんに向むかつて、あらゆる神變しんべん不思議ふしぎの言靈ことたまの秘術ひじゆつを盡つくし、千變せんべん萬化ばんくわにかけ惱なやまし、木端こつぱ微塵みぢん

に平たひらげ呉くれむ、さらば悦よしこひめ子ひめ姫どの殿どの』
悦よしこひめ子ひめ姫どの殿どの』さらば丹たん州しゅう殿どの、改あらためて戦せん場ぢやうにてお目めに掛かりませう』
(大正一一・四・二三 舊三・二七 松村眞澄録)

第一六章 城攻しろせめ〔六二七〕

冷つめたき風かぜも福ふく知ち山やま、世よを良うしろの空おほぞらに聳そそり立たちたる鬼おにヶ城がじやう、千ち引びきの岩いはにて固かためた
る、鬼おに熊くま別わけが千ち代よの住す家みか、金きん城じやう鐵てつ壁ぺき一いつ卒そつこれを守まもれば萬ばん卒そつ攻せむべからざる、敵てきの
攻こう撃げきに對たいしては絶ぜつ對たい的てきの安あん全ぜん地ち帯たい、岩いは窟くわの中なかに築きづきたる八や尋ひろ殿どのに砦とりでの棟とつり梁やう鬼おに熊くま別わけ
は、角つのの生はえたる命いのちの女によう房ぼう、顔かほ色いろ黒くろい蜈むか蚣か姫ひめ數あまた多たの足あし從したがへて夜よる晝ひる堅けん固こに守まもり居ゐ
る。鬼おに熊くま別わけが懷ふところ中ちゆう刀たなと賴たのみたる、荒あら鷹たか、鬼おに鷹たか始はじめとし、紫むら姫さきや容みめ貌かたち美よき丹たん州しゅうの、
味み方かたの兵つは士ものを呼よび集あつめ、三あな五な教ひけうの宣せん傳でん使し、悦よしこひめ子ひめ姫どのが率ひきゐる來きたる言こと靈たま隊たいの進しん軍ぐんに對たいし
て、防ぼう戰せんの協けい議ぎを凝こらす大だい會かい議ぎ、數あまた多たの從じゆう卒そつ岩いは窟くわ戸どの周ま圍わりを十と重へ二た十へ重とに取とり圍かこ

み、敵の襲來に備へ居るその物々しさ、よその見る目も勇ましき。鬼熊別は一同に向ひ、

「三五教の奴原、大江山に在す鬼雲彦の御大將の館を蹂躪し、尚ほ進みて三嶽の岩窟を破壊し去り、今や少數の神軍をもつて本城に押し寄せ來るとの注進、吾は名に負ふ大軍を擁し、斯る堅城鐵壁を構へ居れば、如何なる英雄豪傑鬼神の襲來と雖も屈するに及ばず、然はさりながら油斷は大敵、汝等は是より、味方の數多の部下を引率し、所在武器をもつて敵に向ひ、只一戰に殲滅せよ、夫についての作戦計畫、意見あらば各吾前へ開陳せよ」

と嚴命したりければ、荒鷹は進み出で、

荒鷹「御大將の御仰せ、一應御尤もでは御座いますが、御存じの通り大江山の鬼雲彦は數多の味方を擁しながら、僅四人の宣傳使のために一敗地に塗れて雲を霞と遁走せられたる如く、到底天來の神軍に對し武器をもつて向ふは心許なし、何か良き方法あらばお示し下さいませ」

蜈蚣姫「さうだと申して此鬼ヶ城に於ては、槍、長刀、劍の外に敵に對する武器

はあらず。汝等如何に致す所存にや、良策あらば遠慮なく開陳せよ」

鬼鷹「畏れながら、鬼熊別、蜈蚣姫様に申上ます、敵は言靈を以て迫り來り、五

色の靈光を放射し敵を縦横無盡に驅惱ます神力を具備し居れば、到底此儘にては

叶ひ難し。吾は幸ひ一聲天地を震撼し、一言風雷雨霆を叱咤する神力を圖らずも

三嶽山の山上に於て白髮異様の神人より傳授されました、もう此上は大丈夫、假

令幾萬の武器ありとも、部下の身體を靈縛されなば如何ともする事は出來ますま

い、吾々は言靈を以て寄せ來る敵を殲滅するを最上の策と存じます」

鬼熊別「汝一人如何に言靈を應用すればとて、其他の部將は如何致す積りだ」

鬼鷹「畏れながら、荒鷹、丹州、紫姫のお歴々は、私と一度に神變不思議の言靈

の妙術を神人より傳授され居りますれば、必ず必ず御心配あらせられな、假令三

五教の宣傳使、神變不思議の靈術をもつて迫り來るとも、吾が言靈の威力を以て、

縦横無盡にかけ惱まさむ、必ず必ず數多の部下を勞し、兇器をもつて向はせ給ふ

べからず、確に吾々勝算が御座る」

と事もなげに述べ立てたるに、鬼熊別、蜈蚣姫は滿面に笑を湛へ、

「然らば鬼鷹汝に全軍の指揮を命ず、必ず共に油断致すな、吾は是より高樓に登り、汝等が奮戦の状況を見む、蜈蚣姫來れ」
と此場を立つて奥の一間に悠々と忍び入る。忽ち聞ゆる宣傳歌の聲に耳を聳立て、鬼鷹「ヤアヤアかたがた、敵は間近く攻め寄せました、何れも防戦の用意あれ」
荒鷹「假令三五教の宣傳使、悦子姫、音彦、加米彦、青瓢箪彦、腰の曲つた夏彦、狐のやうに目の釣り上つた常彦押寄せ來るとも、吾は孫呉の秘術を揮ひ、否々神變不思議の言靈の妙術を發揮し、敵を千變萬化に驅惱まし、勝鬨上げるは瞬く間」と勇める顔色英氣に満ち、威風凜凜として四邊を拂ふ勇ましさ。一同は雙手を打ち一齊にウローウローと鬨の聲、山嶽も崩るる許りの光景なり。
宣傳歌の聲に一同は勇み立ち、鬼鷹、荒鷹其他の言靈隊は廊下に立ち現はれ、寄せ來る神軍の言靈の散弾に向つて防戦の用意に取りかかりぬ。寄手の部將加米彦は聲も涼しく宣傳歌を宣り始めたり。

「神が表に現はれて

善と惡とを立て別ける

鬼熊別の運の盡き
亡び行く世は如月の

三五の月は大空に
明皎々と輝きて

鬼の頭を照すなり
萬代祝ふ加米彦が

惡魔の砦に攻め寄せて
宣る言靈は天地の

百の神達八百萬
諾ひ給へ鬼ヶ城

群がる曲を言向けて
西の海へと逐散らし

豐葦原の瑞穂國
隈なく照す言靈の

誠の水火を受けて見よ
槍雉刀や劍太刀

穂先を揃へて攻め來とも
皇大神の守ります

吾加米彦の誠心は
火にも焼けない又水に

溺れもせない如意寶珠
萬代朽ちぬ生身魂

玉の御柱立て直し
言向け和す其ために

今や加米彦向うたり
吾と思はむ奴原は

一人二人は面倒だ
千萬人も一時に

小束となつて攻め來れ

三五教の宣傳使

神の御魂を蒙りて

息吹の狭霧に吹き拂ひ

風に木の葉の散る如く

吹き散らさむは目のあたり

心改め吾前に

歸順致すかさもなくば

城を枕に討死か

それも厭なら逸早く

城明け渡し逃げ出せ

月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも

此加米彦が麻柱の

心の魂に言向けて

丹波の空に塞がれる

雲霧四方に吹き拂ひ

清めて晴らす神の道

嗚呼面白い面白い

神の守りの宣傳使

嗚呼惟神々々

御魂幸はひ坐ませよ

と謠ひ終りし加米彦が宣傳歌に四邊を守る數多の部卒は頭を振り暫く苦悶の體を
現はしける。

少壯白面の丹州は、加米彦の言靈に應戦すべく白扇を披き左右左に打ちふりながら、

誠まことの風かぜの福知山ふくちやま

人の心こころの鬼ヶ城おにがじやう

鬼おにも大蛇をろちも言こと向むけて

世人よびとを救すくふ神心かみこころ

鬼熊おにくま別わけはバラモンの

神かみの教をしへの宣せんでん傳し使し

素もとより悪あしき者ものならず

顔色かほいろ黒くろき蜈蚣むかでひめ姫ひめ

色いろの黒くろいに靈たまぬかれ

知しらず識しらずに水晶すゐしやうの

清きよき靈みたまは曇くもり果はて

常夜とこよの暗やみとなり果はてぬ

さはさりながら加米彦かめひこよ

人ひとは神かみの子こ神かみの宮みや

悪あくの中なかにも善ぜんがある

善ぜんに見みえても悪あくがある

鬼熊おにくま別わけの大將たいしやうは

欲よくに心こころを曇くもらせて

曲まがの言靈ことたま宣のりつれど

時節じせつ來きたれば又また元の

神かみの靈みたまと立たち復かへり

神かみの御おん爲ため國くにのため

世人よびとのために勳功いさをしを

ひよつと立たてまいものでない

許ゆるせよ許ゆるせ麻柱あななひの

神かみの教をしへの宣傳使せんでんし

此世このよを造つくりし神直日かむなほひ

心こころも廣ひろき大直日おほなほひ

唯何事ただなにごとも人ひとの世よは

直日なほひに見直みなほせ聞きき直なほせ

身みの過あやまちは宣のり直なほせ

これぞ天地てんちの大おほ神かみの

御旨みむねに等ひとしき心こころなり

嗚呼ああ加米彦かめひこよ加米彦かめひこよ

これこのの皆とりでに立たち向むかひ

言靈戰ことたませんを開始かいしして

勝鬨かちどきあぐる汝なが心こころ

さはさりながらさりながら

満みつれば缺かくる世よの習ならひ

弱よわきを助たすけ強つよきをば

抑おさへて行ゆくが神かみの道みち

勝かちに乗じやうじて徒いたづらに

吾等われらが味方みかたを惱なやますな

神かみの御眼みめより見給みたまへば

世界せかいの者ものは皆みな我が子こ

神かみは親おやなり人ひとは子こよ

人ひとと人ひととは兄弟きやうだいよ

兄弟喧譁けうだいげんくわは兩親りやうしんに

對たいして不ふ幸かうとなるものぞ

吾わが言靈ことたまのひと一つひとだに

汝が耳に入るならば 早く此場を立ち去れよ
世人を救ふ宣傳使 嗚呼惟神々々
御魂幸はへましませよ

と謠ひ終り忽ち姿を隠したり。

加米彦 何だ丹州の奴、敵だか味方だか譯の分らぬ事を云ひよつたな、エ、氣の

弱い奴だ。鬼熊別に餘程氣兼をして居ると見える哩、アハ、ハ、ハ、ハ、

腰のくの字に曲つた小男の夏彦は敵の岩窟に向ひ、言靈戦を開始すべく宣傳歌を歌ひ始めたり。

鬼の棲家と聞えたる 曲津の潛む鬼ヶ城

鬼熊別や蜈蚣姫 牛のやうなる角生やし

虎皮の禪きうと締め 廣い世界をのそのそと

吾物顔に蹂躪り 彼方此方の女達

弱いと見たら忽ちにたちま 小脇に搔い込み連れ歸り

寄つてかかつてなぶりもの 生血を啜り肉を喰ひ

未だ飽き足らで人の家にひと 隙を窺ひ忍び込み

目より大事と蓄へたたいじ 金や寶をぼつたくり

榮耀榮華の仕放題えいようえいぐわ 雲に聳ゆる鬼ヶ城

殊更高い高樓にことさらたか 登つて悠くり酒喰ひ

世人を眼下に見下してよびと 暑さ寒さも知らず顔

いかい眼を剥き鼻を剥きめ 大い口をかつと開け

人を見下ろす鬼瓦ひと 夏彦司の言靈の

霰を喰つて忽ちにあられ がらりがらりとめげ落ちる

鬼熊別の身の果てぞおにくまわけ 今から思ひやられける

春とは云へど夏彦がはる 誠にアツき言靈の

矢玉を一つ喰つて見よやだま 鬼鷹、荒鷹、鹿に馬

紫姫も丹州もむらさきひめ 風に木葉の散る如く

不意を喰つてばらばら 夕立のやうな涙雨

乾く間もなき袖時雨 月は御空に輝けど

汝がためには運の盡き ウロ【つき】間誤【つき】キヨロ【つき】の

ウロつき廻る狐憑き 鬼に大蛇はつきものぢや

昔々の神代より 鬼の夫に蛇の女房

世の諺はあるものに これや又何とした事か

鬼の女房に蜈蚣姫 青い爺に黒い嬢

サア是からは夏彦が 日頃鍛へし言靈の

霊弾を向けて鬼ヶ城 紅蓮の舌で舐めてやる

嗚呼面黒い面赤い 嗚呼惟神々々

とても叶はぬ叶はぬから 耐りませぬと鬼共が

逃げ行く姿を目の當り 見る吾こそは樂しけれ

見る吾こそは面白き。

アハ、ハ、ハ、

加米彦かめひこ「オイ夏彦なつひこ、何なんと云いふまづい言靈ことたまだ、ソことナ事ことで敵てきが降服かうぷくするものか、宣の

り直せなほ宣り直せなほ」

夏彦なつひこ「身魂みたま相應さうおうの言靈ことたまをやつたのだ、何程なにほど宣り直せなほと云いうても、はや品切しなぎれに相成あひなりまを

申候しんこうだよ」

加米彦かめひこ「アハ、ハ、ハ、怪體けたいの言靈ことたまもあるものだなア、併しかしこれも今度こんどの戦鬪せんとうの景けい

物ぶつと思おもへば辛抱しんぼうが出来できるよ」

夏彦なつひこ「何れ腰こしが曲まがつて居ゐるものだから、臍下さいか丹田たんでんから出でる言靈ことたまも何どうせ腰折こしをれ歌うた

だよ、アハ、ハ、ハ、

岩窟がんくつの方ほうより鹿公しかこうは立たち上あがり、又またもや扇あふぎを打振うちふり打振うちふり、寄よせ手てに向むかつて大音だいおん

聲せうに言靈ことたま戦せんを開始かいししたり。その歌うた、

「眞名井まなゐヶ原がはらに現あれませる 豊國とよくに姫ひめの大おほ神かみに

詣まうでむものと紫むらさき姫ひめの 神かみの司つかさは都みやこをば

立ち出で給ひ馬と鹿

二人の伴を従へて

山越え谷越え川を越え

大野ヶ原や里を越え

眞名井ヶ原の手前迄

進み來れる折柄に

三嶽の岩窟に立て籠る

荒鷹、鬼鷹兩人が

部下の魔神に欺かれ

眞名井ヶ原は此方ぢやと

云うた言葉を眞に受けて

暗き岩窟に誘はれ

深い穴へと放り込まれ

馬と鹿とは馬鹿を見た

紫姫は幸に

澁皮剥けたるお蔭にて

鬼鷹荒鷹兩人が

お目に留まつて助けられ

【チンコ】、【はいこ】と敬はれ 岩窟の女王となり濟まし

權威を揮ふ凄じさ

間もなく出て來た麻柱の

神の教の宣傳使

容貌も形も悦子姫

松吹く風の音彦や

背の堅い加米彦が

のそのそ來る谷の口

バサンバサンと衣洗ふ

婆々にはあらぬ紫姫の

神の司の優姿

肝を潰して加米彦が

荆棘の茂る坂道を

轉けつ迂りつ漸うに

岩窟の前にやつて来て

思ひがけなき陷穽

ドスンと落ちて尻餅を

ついたかつかぬか俺や知らぬ それから三人のこのこと

紫姫に誘はれ

岩窟の中にやつて来て

俺を助けて呉れた故

そこで二人は麻柱の

神の教に入信し

三嶽の山の絶頂で

レコード破りの風に遇ひ

これや耐らぬと四つ這ひに

なつて漸う木の茂み

一同此處に息やすめ

白河夜船と寝て居れば

鬼鷹荒鷹やつて来て

鹿と馬とを後手に

縛つて又もや岩窟に

押し込められた夢を見て

ビツクリ仰天起き上り

月の光を賞めながら

其邊をぶらつく時もあれ

現はれ来る黒い影 摺つた揉みたといさかいつ

とうとう鬼鷹荒鷹の 二人の奴を言向けて

三五教に導きつ 悦子の姫の命令で

歸つて来たは表向 おつとどつこいこれや違ふ

俺が言ふのぢやなかつたに 餘り嬉して間違つた

ヤイヤイ夏彦常彦よ ドツコイすべつた灰小屋で

灰にまみれて眞黒氣 もう斯うなれば是非もない

他人は兔も角俺だけは 今を限りに鬼熊別の

大將に尻を喰ますぞよ むかづくまいぞよ蜈蚣姫

うっかり剥げた嘘の皮 俺の身魂はまだ暗い

言靈戦は皆駄目だ 嗚呼惟神々々

御靈幸はひましませよ 蛙は口から知らぬ間に

腹の中をば曝け出し もう叶はぬから逃げて出る

三五教の宣傳使 本當に吾は歸順する

何うぞ赦して下されやど ゆる くだ」

と尻しりを捲まくつて一散いちさん走り、音彦おとひこが戦陣せんぢんに向むかつて、一目散いちもくさんに逃にげ來きたる可笑をかしさ、悦子よしこ姫め、音彦おとひこ、加米彦かめひこは可笑をかしさに吹ふき出だし、笑わらひ轉こけたり。

（大正一一・四・二三 舊三・二七 加藤明子録）

（昭和一〇・五・二六 王仁校正）

第十七章 有終いうしうの美び（六二八）

常彦つねひこ「世よは常暗とこやみと成なり果はてて 鬼おにや大蛇をろちや曲津神まがつかみ

天あめが下したをば横行わうかうし 吹ふき來くる風かぜは腥なまくさく
歎なげき悲かなしむ人ひとの聲こゑ 鬼おにの棲すむてふ大江山おほえやま

憂^{うき}を三^み嶽^{たけ}の岩^{いは}窟^{やど}に

鬼^{おにくま}熊^{まわけ}別の片^{かたうで}腕^でと

誇^{ほこ}り顔^{がほ}なる鬼^{おに}鷹^{たか}や

情^{なさけ}容^{よう}赦^{しや}も荒^{あたら}鷹^{たか}の

爪^{つめ}研^とぎすまし世^よの人^{ひと}を

見^み付^つけ次第^{しだい}に引^ひ攪^{つか}み

岩^{いは}窟^やの中^{なか}へと連^つれ歸^{かへ}り

人^{ひと}を惱^{なや}ます曲^{まが}津^{つか}神^{かみ}

それさへあるに鬼^{おに}ヶ城^{じやう}の

數^{あまた}多^たの部^て下^{した}を從^{したが}へて

天^{あめ}が下^{した}をば吾^{わが}儘^{まま}に

振^ふる舞^まひ暮^{くら}す曲^{まが}靈^{みたま}

鬼^{おにくま}熊^{まわけ}別^{わけ}を始^{はじ}めとし

それ^そに連^つれ添^そふ蜈^{むか}蚣^で姫^{ひめ}

數^{あまた}多^たの魔^ま神^{がみ}と諸^{もろ}共^{とも}に

バ^{けう}ラ^{けう}モ^{けう}ン^り教^{けう}の教^{けう}理^りをば

世^よ人^{ひと}欺^{あざむ}く種^{たね}となし

男^{をとこ}、女^{をんな}の嫌^{きら}ひなく

暇^{ひま}さへあれば引^ひ捕^{とら}へ

己^{おの}が棲^{すみ}處^かへ連^つれ歸^{かへ}り

無^む理^り往^{わう}生^{じやう}に部^ぶ下^かとなし

日^ひに日^ひにまさる頭^{あたま}數^{かず}

烏^う合^{がふ}の衆^{しう}を驅^かり集^{あつ}め

世^よを驚^{おどろ}かす空^{から}威^ゐ張^ばり

山^{とり}砦^では立^り派^{っぱ}に見^みゆれども

その内^{ない}實^{じつ}は反^{はん}比^ひ例^{れい}

風^{かぜ}が吹^ふいてもガ^がタ^がと

障^{しやう}子^じは踊^{をど}る戸^とは叫^{さけ}ぶ

柱はグキグキ泣き出す
一寸の風にも屋根の皮

剥けて忽ち雨が漏る
コンナ山砦を偉相に

難攻不落の鐵城と
誇る奴等の氣が知れぬ

鼻の糞にて的貼った
様な要害何になる

三五教の言靈に
忽ち城は滅茶々に

碎けて逃げ出す曲津共
蜘蛛の子ちらす其の如く

四方八方に散亂し
這うて逃行く可笑しさは

他所の見る目も哀れなり
ドッコイ待ったそれや先ぢや

今は鬼鷹荒鷹が
死力を竭して防戦の

眞最中のお氣苦勞
遙に察し奉る

もう良い加減に我を折つて
運の盡きたる此城を

綺麗薩張引き渡せ
花も實もある其間に

渡すが利巧なやり方ぞ
人を助ける宣傳使

相互の爲にならぬ様な
下手な事をば申さない

サアサア如何ぢや、さア如何ぢや 返答聞かせ早う聞かせ

朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

假令千年かかるとも 三五教の言靈の

續く限りは攻めかける 水攻め火攻めはまだ愚

地震雷火の車 大洪水は宵の口

それより怖ひ俺の口 惜しからうが我を折つて

素直に降参するが良い 宵に企みた梟鳥

夜食に外れてつまらない 顔を見るのが氣の毒ぢや

此世を造りし神直日 心も廣き大直日

只何事も三五の 神の教の吾々は

直日に見直し聞直す 深き恵に省みて

鬼熊別の家來ども 胸の戸開いてさらさらと

醜の岩窟を明け渡せ 渡る浮世に鬼は無

泣いて暮すも一生ぢや 怒つて暮すも一生ぢや

笑うて暮せ鬼ヶ城

笑ふ門には福が来る

鬼は佛と早變り

佛は神と出世する

神が表に現はれて

善と惡とを立て別ける

此世の立替立別の

出て来る迄に逸早く

神の御子と生れたる

鬼熊別の家來共

叶はぬ時の神頼み

もう斯うなつては百年目

早く山砦を明け渡せ

此常彦が氣をつける

ア、惟神々々

御靈幸倍坐世よ

夏彦「何だ、常彦、俺の言靈を随分冷かした貴様の言靈は何だ、長い長い大蛇

の様なぬるぬるとした、蛭り「さがした」骨無し歌ぢやないか」

常彦「きまつた事だ、先方が大蛇の身魂だから此方もぬるぬると長く攻かけたの

だよ」

加米彦「何だか根っから能う分る言靈だった、之には流石の鬼熊別も膽を潰して

腹はらを抱かかへて笑わらひ轉こけるであらう、アハ、ハ、ハ、
馬公うまこうは岩窟いはやの高欄かうらんの上に立たち、怪あやしき身振みぶりをし乍ながら謠うたひ初はじめた。

花はなの都みやこを立たち出いでて 馬うまと鹿しかとの二人ふたり連れ

紫姫むらさきひめのお伴ともして 比沼ひぬの眞名井まなぬに詣まうでむと

遙々はるばるやつて來きた折をりに バラモン教けうの神かみの子こと

現あらはれ出いでたる鬼鷹おにたかや 心こころの荒あらき荒鷹あらたかの

二人ふたりの奴やつにうまうまと 口くちの車くるまに乗のせられて

馬うまと鹿しかとの兩人りやうにんは 馬鹿ばかにしられて三嶽山みたけやま

岩窟いはやの中なかに放ほりこまれ 泣ないて怒おこつて暮くらす中うち

折をりも悦よしこ子このお姫ひめさま 音彦おとひこさまや加米彦かめひこの

二人ふたりの取次とりつぎ從したがへて 岩窟いはやの中なかに御入來ごじうらい

折をりよく私わたしは助たすけられ 忽たちまち變かはる三五あななひの

神かみの教をしへの信徒まめひとと なつて嬉うれしき今日けふの日ひは

鬼おにの棲すまへる鬼おにヶ城がじやう

言こと靈たま戦せんに加くははりて

鬼おに熊くま別わけの土ど手てつ腹ばら

突ついて突ついて突つき捲まくり

オツトドツコイちこら違ちうた 心こころの裡うちは兔とも角かくも

表おもては矢や張はり鬼おにヶ城がじやう

鬼おにの味み方かたになり居をれと

悦よし子の姫ひめが仰おつしや

かねて定さだめた八百長やほちやうの

此この言こと靈たまの戦たたかひに

敵てきと味み方かたの區く別べつなく

言こと向むけ和やはし三五あななひの

神かみの教をしを敷しき島しまの

大やま和とし島しま根ねはおろか

豊とよ葦あし原はらの瑞みづ穂ほ國くに

國くにの八や十そ國くに八や十その島しま

一いち度どに開ひらく梅うめの花はな

開ひらいてちりて實みを結むすぶ

結むすぶ誠まことの神かみの縁えん

鬼おに熊くま別わけの大おほ頭あたま

お色いろの黒くろい蜈蚣むかで姫ひめ

一いち時じも早はやく村むら肝きもの

心こころの鬼おにを追おひ出いだし

神かみに貰もらうた真ま心こころに

早はやく復かへつて下くだされや

馬うま公こうが一いっ生しやうのお頼たのみぢや

荒あ鷹たか改かい心しんするならば

敵も味方もありはせぬ
天下泰平無事安穩

千秋萬歳萬々歳
散らぬ萎れぬ花が咲く

誠一つの神の道
朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも
假令大地は沈むとも

神のお道は變らない
誠の道は二つない

誠一つに立ち復り
神の光に照されて

恵の露に潤へよ
鬼熊別や蜈蚣姫

三五教の宣傳使
音彦加米彦青彦よ

お前も一寸我が強い
序に言靈放し置く

ア、惟神々々
靈幸倍坐世よ

鹿公「アハ、ハ、ハ、オイ馬、貴様は何方に向つて言靈戦をやつたのだ、貴様餘程

筒井式だな」

馬公「きまつた事だ、味方をつついたり、敵をつついたりするから【つつい】式

だよ、旗色の良い方へつくのが當世の處世法だ、オツトドツコイ戰略だよ、

八、八、八、八

攻撃軍の青彦は敵城に向ひ、又もや立つて言靈の發射を開始する。

三五教の宣傳使 誠の道を宣べ傳ふ

神の御子たる青彦が 之の山砦の司神

鬼熊別や蜈蚣姫 二人の君に物申す

天と地との其中に 生とし生ける者皆は

皇大神の珍の御子 青人草と稱へられ

神の御業をそれぞれに 御仕へまつる者ぞかし

汝が命も天地の 神の靈魂を受け給ひ

此世に生れし者なれば 人の憫れを顧みて

善と惡とを推し量り 世人を救ふ其爲めに

誠の道に立ち復れ それに従ふ人々よ

バラモン教の神の教けうかみのかみの教のり 心こころ一つひとに勵いそしみて

仕つかへ給たまふは良よけれども 神かみの心こころを取とり違ちがへ

知らしず識しらずの其中そのうちに 曲津まがつの神かみの容いれ器ものと

成ならせ給たまひて天地あめつちの 神かみの御前みまへに許こ々こ多た久くの

罪つみをば重かさね世よを穢けがし 根底ねそこの國くにの苦くるみを

受うけさせ給たまふ事ことあらば 吾等われらはいかでか忍しのびむや

天てんを父ちちとし地ちを母ははと 仰あふぎ生うまれし人ひとの子こは

皆みな兄弟はらよ姉妹おとどひよ 一ひと日も早はやく神直日かむなほひ

心こころも廣ひろき大直日おほなほひ 神かみの眞道まみちに立復たちかへり

誠まことの道みちにのりかへて 今迄いままで盡つくせし曲業まがわざを

神かみの御前みまへに悔くい給たまへ 三あな五な教ひけうは世よを救すくふ

神かみの誠まことの言ことの葉はを 四よ方もに傳つたふる天あま使つかい

心こころの耳みみに安やすらかに 吾言わがこと靈たまを聞きし召めせ

ア、惟かむ神な々ら々かむ 靈幸みたま倍さち坐は世まよませ

と聲淑やかに謠ひ終つた。荒鷹は又もや立ち上り青彦に向つて、
射し始めた。言靈の砲彈を發

神の恵のあら尊

心の荒き荒鷹も

心新に立直し

世の荒浪に掉して

神の助けの船に乗り

心改め行ひを

改め直し世を廣く

神の教を服ひて

誠の道を立て徹し

バラモン教やウライナイの

神の教の長を採り

短をば捨てて新玉の

春立ち返る初より

あな有難や三五の

神の教に身を任せ

心の花も一時に

開いて薫る梅の花

日の出神や木の花姫の

神の命に神習ひ

野立の彦や野立姫

埴安彦や埴安姫の

神の命の御心を

うまらにつばらに推量りて
神素盞鳴大神の

此世を洗ふ瑞靈
嚴の靈の御教

身もたなしらに勵しみて
仕へ守るぞ嬉しけれ

鬼熊別や蜈蚣姫
今迄仕へし荒鷹が

今改めて願ぎ申す
汝が盡せし許々多久の

邪惡の道を今よりは
改めまして天地の

神の御言を謹みて
朝な夕なに村肝の

心にかけて守りませ
汝が命に眞心を

盡しまつるは荒鷹が
清き心の表現ぞ

必ず怒らせ給ふまじ
回顧すれば荒鷹が

バラモン教に仕へてゆ
早や二十年になりたれど

天と地との神々や
世の人々の身に對し

一つの功績立てしこと
まだ荒鷹の身の因果

赦し給はれ天津神
國津神等百の神

偏ひとへに願ねがひ奉たてまつる
ア、惟かむながら神かむながら々々

靈みたま幸まさは倍はへ坐ましませ世せよ
□

荒鷹あらたかは斯かく謠うたひ涙なみだをはらはらと降ふらし鬼熊別おにくまわけ、
蜈蚣むかで姫ひめの端坐たんざせる高樓たかどのの前まへに向むか
つて合掌がつしやうしたり。三五教あななひけうの宣傳せんでん使音彦しおとひこはすつくと立たち敵城てきじやうに向むかひ、
又またもや言靈ことたまの
速射砲そくしやほうを差さし向むけたり。その歌うた、

□ 日本にほんの國くには松まつの國くに
松吹まつふく風かぜの音彦おとひこが

音おとに名な高たかき鬼ヶ城おにがじやう
司つかさの神かみと現あれませる

鬼熊別おにくまわけの御前おんまへに
稜威いづの言靈ことたま宣のり上あげて

清きよき言ことの葉は宣のり傳つたふ
豐葦原とよあしはらの中津國なかつくに

メソポタミヤの樂園らくえんに
教開をしへきしバラモンの

鬼雲彦おにくもひこが言ことの葉はは
靈主れいしゆ體從たいじうの御教おんをしへ

三五教あななひけうも其その通とほり
之これ亦また靈主れいしゆ體從たいじうを

珍うづの御旗みはたと押し立て

四方よもの草木くさきを靡なびかしつ

天あめが下したをば吹き拂はらふ

科戸しなどの風かせの神司かむつかさ

松まつに聲こゑあり立つ波なみの

音彦おとひこ此處ここに現あらはれて

誠まことの道みちを宣のべ傳つたふ

靈れい主體しゅたい從じゅうと稱とへたる

その名目めいもくは一いつなれど

内容なかみは變かはる雪ゆきと墨すみ

白しろき黒くろきも辨わきまへて

汝なれが命みことは逸いち早く

お伴ともの者ものと諸もろ共ともに

誠まことの神かみの開ひらきたる

三五あななひけつ教みをしへの御教みをしへに

一ひと日も早はやく片時かたときも

疾とく速すみけくかへりませ

元もとは天地てんちの分靈わけみたま

天あめが下したには敵てきも無なし

相互たがひに扶たすけ助たすけられ

睦むつび親したしみ世よの中なかに

茂しげり榮さかゆる人ひとの道みち

省かへりみ給たまへ蜈蚣むかで姫ひめ

鬼熊おにくま別わけの司神つかさがみ

三五あななひけつ教おとひこの音彦おとひこが

眞心まごころ籠こめて宣のり申まをす

吾言わがこと靈たまの一ひとつだに

汝なれが命みことの御耳おんみみに

響ひびき渡わたりて行おこなひを 直なほさせ給たまへば我われとして
之これに越こえたる喜よろこびは 又またと世せ界かいにあらざらめ
ア、惟かむながらかむながら神かむながら々々 靈たまの復かへしを待まち奉まつる
□

と謠うたひ終をはつて岩がん石せきの上うへに腰こしを下おろしたり。鬼おにくまわけ熊くま別わけの片かたうで腕うでと聞きこえたる鬼おに鷹たかは白はく扇せんを
開ひらいて衝つつ立たち上あがり、攻こう撃げき軍ぐんに向むかひ言こと靈たまの應おう戦せんを開かい始いししたりけり。

□ 神かみの身み魂たまと生あれ乍ながら 誠まことの道みちを踏ふみ外はづし

心こころ汚きたき鬼おに神がみの 醜しこの曲まが津つの群むれに入いり

日ひに夜よに募つる許こ々こ多た久くの 罪つみや穢けがれに包つつまれて

此この世よからなる生いき地ぢ獄じく 心こころに鬼おにが棲すむのみか

鬼おにくも雲ひこ彦まがの曲まが津つ神かみ 鬼おにくま熊まわけ別わけや蜈むか蚣で姫ひめ

醜しこの從しも僕べとなり果はてて 名なも恐おそろしき鬼おに鷹たかと

天てん地ちの御み子こと生うまれきて 萬よろづの長をさと名なを負おひつ

鬼畜生や鳥翼

蟲にも劣る醜魂の

此世を亂す曲業に

心碎きし淺猿しさ

かかる汚なき吾身にも

慈愛の深き皇神は

恵の鞭を鞭たせつつ

今日は嬉しき三五の

神の教に照されて

心も廣く蓮花

薰り床しき木の花の

咲耶の姫の御仰せ

日の出神の御神力

千座の置戸を負ひ給ひ

普く世人を救ひます

神素盞鳴大神の

瑞の御靈と現はれて

身魂も清き神の御子

神も佛もなき世かと

日に夜に胸を痛めしが

時節待ちつる甲斐ありて

惡を斥け善道に

忽ち復る今日の空

霽れゆく雪の跡見れば

三五の月は皎々と

己が頭を照らしつつ

恵の露をたれ給ふ

ア、惟神々々

御靈幸倍坐世よ
假令大地は沈むとも

月日西より昇るとも
神に誓ひし吾心

幾世經ぬとも變らまじ
變る浮世と云ひ乍ら

遠き神代の昔より
誠の道に變りなし

ア、尊しや有難や
三五教の神の教

喜び仰ぎ奉る
曲津の集まる鬼ヶ城

八岐大蛇の醜魂
八握の劍抜き持たせ

五百美須麻琉の玉の緒に
神の御水火を結びつつ

心の鏡照り渡る
月照彦の大神や

足眞の彦の大神の
傳へ給ひし御教

埴安彦や埴安姫の
神の命の現はれて

織り出でませる經緯の
綾と錦の神機を

天津御風に翻し
山の尾の上や河の瀬に

荒ぶる百の神等を
草木の風に靡く如

言向け和し皇神の

御水火も清く九十

十曜の神紋中空に

靡かせ奉り皇神の

御稜威を四方に輝かし

醜の山砦に進撃し

太き功績を永久に

立てて心の眞木柱

高天原に千木高く

仕へまつらむ吾心

ア、惟神々々

御靈幸倍坐世よ

と謠ひ終り、天地に向つて合掌し嬉し涙に咽びつつ地上にドツと打ち倒れたり。

鬼熊別が幕下の者共、感激の涙にうたれ、ものをも言はず大地に平伏し、落つる

涙に大地を潤しける。紫姫は立ち上り聲淑やかに宣傳歌を謠ひ初めたり。

救ひの神と現れませる 嚴の御靈や瑞御靈

天教山や地教山 名さへ目出度き萬壽山

靈鷲山の三葉彦 神の命の御教は

天地四方に擴ひろがりて 世は永久とこしへに開ひらけ行ゆく

ア、惟かむながらかむながら神々々 御靈みたまさち幸まはひ坐ましまして

醜しこの魔風まかせも凧なぎ渡わたり 荒あらき波風なみかせ鎮をさまりて

御代みよは平たひらに安やすらかに 常磐ときはかきは磐はの松まつの世よと

治をさめ給たまふぞ尊たふとけれ 妾われは都みやこに現あらはれて

紫姫むらさきひめと名な乗のりつつ 戀こひしき父ちちに生いき別わかれ

悲かなしき月日つきひを送おくる内うち 心こころの色いろも悦よしこひめ子こ姫め

嬉うれしき便たよりの音彦おとひこや 名なさへ目め出で度たき加米彦かめひこの

教をしへの御子みこに助たすけられ 三五あななひけう教の御柱みはしらと

仕つかへまつりし今日けふこそは 千代ちよも八や千代ちよも忘わすられぬ

生いくひ日たるひと祝いはひつつ 心こころに住すめる曲津見まがつみを

禊みそぎ袂はらひて眞澄空ますみぞら 三五さんごの月つきのいと圓まるく

神かみの大道おほぢを力ちからとし 圓まるく治をさめむ神かみの國くに

ア、有ありがたや尊たふとしや 三五あななひけう教の神かみの恩おん

千代ちよに八千代やちよに永久とこしへに
仕つかへまつりて忘れまじ
ア、惟かむながらかむながら神々々
御みたま霊たまの幸さちを賜たまへかし
ア、惟かむながらかむながら神々々
御みたま霊たまの幸さちを賜たまへかし
御みたま霊たまの幸さちを賜たまへかし

と謠うたひ終をはり天地てんちに向むかつて恭うやうやしく拜はい禮れいしたり。三五あななひけう教せんの宣せんでん傳しちやう使よしこひめ長た悦ちあが子あが姫はは立たちあが上りり、
鬼おにくまわけ熊やかた別むかの館むかに向むかつて聲こゑを張はりあ上せんでんかげ宣おく傳おく歌おくを送おくりたり。

天あめの八重やへくも雲か搔かき別わけて 天あ降もりましたる皇すめかみ神かみの

珍うづの御おんこ子こと現あらはれし 神かむす素さ蓋の鳴をの瑞みづ靈みたま

木この花はな姫ひめの生いく御み靈たま 日ひの出での神かみの嚴いづ靈みたま

三さん五ごの月つきの御み教をしへを 四よ方もの國くに々くに隈くまもなく

月つき照て彦ひこの御おほ神かみや 金きん勝かつ要かねの御おほ神かみ

從したがひ給たまふ八や百ほ萬よろづ 神かみの使つかいの宣せん傳でん使し

教をしへを開ひらく八やし洲まぐに國に 誠まことの道みちにさやりたる

八岐大蛇や醜の鬼

醜の狐や曲神の

曇りし御魂を照さむと

心を千々に配りつつ

霜の剣や雪の空

雨の襖に包まれて

尾羽打ち枯らしシトシトと

あてども無しに進み行く

教傳ふる宣傳使

夜な夜な變る石枕

草の褥に雪の夜着

世人の爲に身も窶れ

心も疲れ山河を

數限りなく渡り來て

曲津の神にさいなまれ

寒さを凌ぎ飢、渴

心を千々に盡しつつ

救ひの綱に操られ

愈此處に鬼城山

司の神と現はれし

鬼熊別や蜈蚣姫

永久の棲處と聞えたる

魔窟の山に登り來て

宣り足らはれし言靈の

稜威の力に許々多久の

罪や穢を吹き拂ひ

被ひ清むる神の道

世は紫陽花の變るとも

色香褪せざる兄の花の
一度に開く神の教
宣り傳へ行く楽しさよ
ア、惟神々々
御靈幸倍坐世よ

と言葉短に謠ひ終れる折しも高殿より、火煙濛々と立ち昇り阿鼻叫喚の聲、耳朶
を打つ。一同はハツと驚き見上ぐる途端に鬼熊別、蜈蚣姫の二人は高閣に納めた
りし天の岩船にひらりと飛び乗り、プロペラの音轟々と中空を轟かせ乍ら東方の
天を目蒐けて一目散に翔り行く。敵も味方も一度に聲張上げて、
三五教の宣傳使、萬歳々々
と三唱したりける。此聲に驚き目覺むれば瑞月の身は宮垣内の賤の伏屋に横たわ
り、枕許には里鬼と綽名を取った丸松が、眞赤な顔をして二三人の隣人と共に酒
をグビリグビリと傾け居たりける。

(大正一・四・二三 舊三・二七 北村隆光録)

靈たまの礎いしず（三）

一、高天原たかあまはらの天國てんごくに上のほるものは、地上ちじやうにある時とき其身内しんないに愛あいと信しんとの天國てんごくを開設かいせつし置おかなければ、死後しごに於おいて身外しんぐわいの天國てんごくを攝受せつじゆすることは不可ふかのう能のうである。

一、人間にんげんとして、其身内そのしんないに天國てんごくを有いうし無なかつたならば身外しんぐわいに在ある天國てんごくは決けつして其その人に流ながれ來くるものではない。又また之これを攝受せつじゆすることが出來できぬものである。要えうするに

人は現實界げんじつかいにある間あひだに、自らみづか造り且かつ開ひらくのは、神かみを愛あいし神かみを信しんじ無限絶對むげんぜつたいと合がふ一いつしておかねば成ならぬ。自らみづか造り且かつ開ひらくのは、神かみを愛あいし神かみを信しんじ無限絶對むげんぜつたいと合がふ一いつしておかねば成ならぬ。

人は何ひとうしても、この無限絶對むげんぜつたいの一斷片いちだんぺんである以上いじやうは、何處どこまでも無限絶對むげんぜつたい、無む始し無終むしうの眞神しんしんを信愛しんあいせなくては靈肉れいにく共に安靜あんせいを保たもつことは出來できぬものである。

一、眞神しんしんたる天之御中主あめのみなかぬしの大神おほかみその靈德れいとくの完備具足くわんびぐそくせるを天照皇大御神あまてらすすめおほみかみと稱となへ奉たてまつり、又撞またつきの大御神おほみかみと稱となへ奉たてまつる。而しかして火の御祖神ごそしん（靈れい）を高皇産靈大神たかみむすびのおほかみと稱となへ嚴いづ

の御魂みたまと申まをし奉たてまつり、水の御祖神みづごそしん（體たい）を神皇産靈大神かむみむすびのおほかみと稱となへ瑞の御魂みたまと申まをし奉たてまつる。一、靈系れいけいの主宰神しゆさいしんは嚴の御魂みたまに坐まします國常立神くにとこたちのかみ、體系たいけいの主宰神しゆさいしんは瑞の御魂みたまと坐ま

します豊國主尊と申し奉る。

一、以上の三神は其御活動に由りて種々の名義あれども、三位一體にして天之御中主の大神（大國常立命）御一柱に歸着するのである。

一、故に獨一眞神と稱へ奉り、一神即ち多神にして多神即ち一神である。之を短縮して主と曰ふ。又嚴の御魂は靈界人の主である。又瑞の御魂は現界人の心身内を守り治むる主である。

一、現界人にして心身内に天國を建てておかねば死後身外の天國を攝受することは到底不可能である。死後天國の歡喜を攝受し且つ現實界の歡喜生活を送らむと思ふものは、瑞の御魂の守りを受けねばならぬ。要するに生命の清水を汲み取り飢渴ける心靈を霑しておかねば成らぬのである。瑞の御魂の手を通し、口を通し示されたる言靈が即ち生命の清水である。靈界物語によつて人は心身共に歡喜に咽び、永遠の生命を保ち、死後の歡樂境を築き得るものである。

一、天帝即ち主は水火の息を呼吸して無限にその生命を保ち又宇宙萬有の生命の源泉と成り玉ふ。

一、太陽又水火の息を呼吸して光温を萬有に與ふ。されど太陽神の呼吸する大氣は、太陰神の呼吸する大氣ではない。又人間の呼吸する大氣は、主及び日月の呼吸する大氣では無い。故に萬物の呼吸する大氣も亦、夫れ夫れに違つて居る。凡て神の呼吸する大氣は現體の呼吸する大氣では無い。現實界と精靈界と凡ての事象の相違あるは、是にても明かである。併しながら現實界も精靈界も、外面より見れば殆んど相似して居るものである。何となれば現實界の一切は精靈界の移寫なるを以てである。

一、高天原の天國は主の神格に由りて所成せられて居る。故に全徳の人間の往く天國と、三徳二徳一徳の人間の往く天國とは各高下の區別がある。又主を見る人々に由つて主の神格に相違があるのである。

一、そして何人の眼にも同一に見えざるは主神の身に變異があるのでは無い。主を見る所の塵身又は靈身に、その徳の不同があつて、自身の情動に由りて其標準を定むるからである。

一、天國には靈身の善徳の如何に由つて高下大小種々の團體が開かれて居る。主

を愛し主を信じて徳全きものは、最高天國に上り最歡喜の境に遊び、主の御姿も亦至眞至美至善に映るのである。茲に於てか天國に種々の區別が現出し、主神の神格を見る眼に高下勝劣の區別が出来るのである。

一、又天國外に在る罪惡不信の徒に致つては主神を見れば苦悶に堪へず、且つ惡相に見え恐怖措く能はざるに致るのである。

一、主神が天國の各團體の中にその神姿を現はし給ふ時は、其御相は一個の天人に似させ玉ふ。されど主は他の諸多の天人とは天地の相違がある。主自らの御人格が其神身より全徳に由つて赫き玉ふからである。

一、一靈四魂即ち直靈、荒魂、和魂、奇魂、幸魂、以上の四魂には各自直靈と云ふ一靈が之を主宰して居る。この四魂全く善と愛と信とに善動し活用するを全徳と曰ふ。全徳の靈身及び塵身は直に天國の最高位地に上り、又三魂の善の活用するを三徳と云ひ第二の天國に進み、又二魂の善の活用するを二徳と云ひ第三の天國へ進み、又一魂の善の活用するを一徳又は一善と云ひ、最下級の天國へ到り得るものである。一徳一善の記すべき無きものは、草莽間に漂浪し、又は天の八衢

に彷徨するものである。

一、之に反して悪の強きもの、不信不愛不徳の徒は、其罪業の輕重に應じて夫れ
夫れの地獄へ墮し、罪相當の苦悶を受くるのである。

大正十一年十二月

曉山雲（謠曲）

萬世の稜威輝く不二が嶺の

稜威輝く不二が嶺の

雲に白むか曉の

八重棚雲もあかねさし

神代の姿そのままに

壽ぐ松の世末ながく

迎ふる年こそ樂しけれ

迎^{むか}ふる年^{とし}こそ樂^{たの}しけれ

(昭和一〇・五・二六 王仁校正)

〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵
〵

靈界物語 第一七卷 如意寶珠 辰の卷

終り